川柳塔

昭和六十年九月二十五日 印刷
昭和六十年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻 七〇一号

日川協加盟

60年度二賞発表

No. 701

十月号

60年度 同人総会と二賞表彰10月句会

日　時　昭和60年10月6日（日）午後一時開場

会　場　メンズファッションセンター3階
地下鉄谷町線「谷町4丁目」下車2号出口
谷町3丁目交差点西南角
電話　06（941）1918

▼同人総会　午後2時～3時30分
〔議事〕①会計報告―高杉鬼遊　②事業経過報告―樫谷寿馬　③役員改選　④質疑応答

▼二賞表彰句会　午後5時30分から
おはなし　西尾栞
路郎賞・川柳塔賞表彰
兼　題　「例」　塩満敏選
「指定」　阿萬萬的選
「種」　阿部柳太選
「ゴール」　橘高薫風選
席　題　当日二題　各題3句
会　費　五百円

川柳塔社

一本の自由を、

人って、さみしかったり、うれしかったり、いろいろあって。一本のボトルをキープする。それはつまり、自由な時をキープする、ということで。いい酒だから自由になれるのか。自由だからいい酒になるのか。心開いて、いつものオールドにたどりつく。

今夜も・会う・憩う・酔う
サントリーオールド
キープする。

製造・販売　サントリー株式会社

ふるさと

西尾　栞

柳界の一茶と呼ばれて、柳人から敬愛されていた大先輩須崎豆秋さんの句集、「ふるさと」の復刻版が昭和六十年九月五日に、橘高薫風、谷垣史好の両氏の選句編集で発行された。

豆秋さんは明治二十五年九月十日に生れられて、昭和三十六年五月四日に逝去されている。享年七十歳であった。お葬式の日は五月五日の子供の日だったから日の丸の旗がたてられていた。子供好きの豆秋さんのあの世へのお旅立らしい光景であった。

数々のエピソードの中で一番有名なのは遺書である。

「もうあかんと覚悟したので、わかれの言葉を、書きのこします」という書き出しで、奥さん、路郎先生、会社の津村社長、川柳関係、町内の人々にまで鉛筆で、別れの言葉を書き残されていた。

奥さんにあてた遺書には（抜粋）

「あんたはんは、私のわがまま生活で長い間苦労かけて、何一つ楽な目をさせず、一生のどたん場になって思いもよらぬ大病にかかり、あんたはんが寝食をわすれての介抱をしてくれたことを心の底から感謝しながら、一足お先きへ失礼いたします。

あんたはんは、遺族年金その他で貧しいながらも暮して行けますから、高鴨さんへお願いして、この町内（こんないい町内はありません）で居らしていただき健康に注意して達者で長生きして下さい。

たいへんお世話になったこと幾重にも感謝してお別れいたします。

さようなら　　清次

妻へ

遺書のなかで特に豆秋さんらしいと思ったのは、

葬式はごくかんたんにして下さい

香典供物はかたく御辞退すること

お通夜だけは、ご馳走をして大いに飲んで賑やかに陽気にやって下さい。

感心したことは相当長文なのに、ただの一字も誤字、脱字のなかったことである。

麻生路郎先生に送った遺書（抜粋）

先生の御健康御長命を祈り上げつつ、お先きへ失礼いたします。

（私の机の抽斗に「川柳日誌」というのが四冊と外に一冊あります。これに私の創作吟句会吟等の全作品を収めてあります。本社で保管していただければ心残りがないと存じます）葭乃奥さんへ、柳友のみなさんへ何卒よろしく。

須崎豆秋

麻生路郎先生膝下

豆秋を悼む

死を知って楽しく遺書を書いたらし　　路郎

午後の便たった一通それは遺書　　葭乃

簡単であるが、これで豆秋さんのアウトラインがわかっていただいたと思う。そして句集「ふるさと」を読んでもらえば、豆秋さんの訥々とした口調と良寛さんに似た、おつもがクローズアップされることであろう。因みに歿くなられたご病名は直腸癌であった。

座右の句

宗教へつかず離れず世を渡り　（操　子）

私の句

三叉路の一つに私の道がある　古野ひで

川柳塔　十月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

ふるさと……西尾　栞……（1）
ニューメディア時代へ……橘高薫風……（2）
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選……（4）
自選集……（27）
■川柳太平記(89)　川柳の群像　塚越迷亭……東野大八……（30）
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（二十二丁）……（32）
江戸川柳に現われた八百屋お七(三)……阿達義雄……（34）
60年度路郎賞・川柳塔賞決る……（36）
水煙抄……黒川紫香選……（40）
秀句鑑賞「同人吟……谷垣史好……（59）
　　「水煙抄……小林由多香……（68）
愛染帖……橘高薫風選……（56）
直原七面山自選百句……（60）

ニューメディア時代へ

橘高薫風

「よめやうたえや川柳天国」の第四回目のテレビ生中継が8月29日（木）午後8時から45分間に亘り、全国に放映された。司会は、桂三枝さん、ゲストは小沢昭一さんで前回と変らなかったが、アシスタントの木内みどりさんがほのぼのとした爽やかなムードをスタジオに発散させて下さった。

第一回は昭和58年8月16日、台風5号を気遣いながらの緊張の連続で、番組終了時には台風の余波の雨の中を帰路についた。

「親子」というテーマだった。

動物の親子の情を見せておく　小島　蘭幸
気がつけば母とおんなじ道にいる　高橋　幸代

第二回目は、「男と女」で、

問われたら答える齢を女もつ　川口　弘生
女心わからぬ人の机拭く　白岩　文衛
子歳元日の放映で、終了後、私は住吉大社に初詣をしたのだった。

第三回目は、花の中年、

中年が寿司を土産に帰るなり　森川まさお
中年は背中に詩を持っている　神平　狂虎

作品は三万句を越え、大阪東電話局の読取装置によると四万八千件のコールがあった。

藤村〆女自選百句……（62）
■座談会『川柳塔』過去・現在・未来（下）……（64）
豆秋句集「ふるさと」に寄せて……中尾藻介……（69）
須崎豆秋さん……橘高薫風……（70）
随想／前川千賀子・松村総七郎・栗谷春子……（72）
悼浦野和子さん……野村太茂津……（74）
木塚素石さんを悼む……仁部四郎……（75）
初歩教室……阿萬萬的……（76）
「大衆」……小幡里風選……（78）
一路集「茶」……原独仙選……（78）
「勢い」……大林曲ん手選……（79）
柳界展望……（80）
本社九月句会……（82）
各地柳壇（佳句地10選／西村早苗）……（86）
■句会だより「サークル檸檬」鳥羽吟行／田形美緒　98
■10月各地句会案内　99　■編集後記　101

座右の句

ちっぽけな善意でもよし心満つ　（操子）

私の句

生あくびこらえ名曲もてあまし　林春栄

川柳の社会化にはこれ以上の効果的なものはないという者と、川柳の品性を落とす番組だとの反撥とが入りまじったので、NHKは60年の正月番組から外し、一年ぶりの放映となる。今回の特色は、選者もスタジオ出演者も少人数に限られ、整然とお行儀の良過ぎる程に仕組まれていた。そうすると今度は、活気がなくて面白味が少ないとの批判が出た。選者の立場からすれば、佳句も少ないように感じたのである。

すでに句集作成のための選の作業は終えたが、この整理が大事なのだ。電話で句を受けとる女子大生の語彙の貧しさ、あるいは、それが時間的制約であるためかも知れぬが、判読に時間がかかるのである。苦労は多いが、文字通り昭和の万句合せだ。このマスメディアを利用せぬ方はあるまい。理解者のご支援で少しずつ良い番組になるよう努力を重ねて貰っている。

水府・路郎の時代には無かった形の川柳の社会化運動、生々庵・砂人両氏の矍鑠としたお人柄では、やや馴染めないであろう番組を森中恵美子さんと共に、気楽に、しかも気を遣いながら続けている。

電話による川柳の社会化を田口麦彦氏から聞いた。世はニューメディア時代だ。川柳にも新しい方途が待ち受けているのだから、勉強勉強の時代であると言えよう。

川柳塔

西尾栞選

大阪市　本間　満津子

もうすぐ七十自己採点が甘くなり
元気ですと言うのが気兼ねになる周囲
帰らない日々よ日めくり痩せてゆく
良い顔で干し物の山たたんでる
蒼穹へ木犀自意識強すぎる
雑草の丈逞しいゴミ捨て場

松原市　谷垣　史好

何買うてきても食べるのはひとり
今の世を怒ってるのはオコゼだけ
お元気な陛下を母は生き甲斐に
お喋りは楽しくしようふくらし粉
しのび寄る嘘かまことか熟女の手
愛欲やだんごにキナ粉まぶすごと

大阪市　西出　楓楽

錦など着ずとも故郷あたたかし
秋風へ自分を許すことにする
つっかい棒外すと建前くずれ出す
マムシドリンク飲み外堀を埋めておく
幸せで背中の声に気付かない
一気飲み何かが追って来るようで

桜井市　岩本　雀踊子

時効にせぬ罪が妻の目の奥に
コメカミに昨夜の嘘と苦い酒
出る杭になるには年がとり過ぎた
大胆に足組む女が前に座す
後向く女が泣いていた別れ
悲しいがひとり芝居の台詞だよ

堺市　高橋　千万子

たしなみの女涼しく帯を締め
紙吹雪どの辺で撒こう秘密メモ
悪化したらしい見舞せかされる

貧乏人でウソの話にもらい泣き
安住の地として御所の蟬しぐれ
さてさてと残る命を考える　八尾市　高杉鬼遊

中流のワインの酔いはさめやすし
言うことがあって言わないひとり酒
炎天の葬は仏の知らぬこと
することがなくて寝ている訳でない
キリギリス母と笑いし日もありき
人の字のかたちになった老夫婦　米子市　林瑞枝

天皇の船かくしゃくと長寿国
ぴったりと別れの指を傘の柄に
割箸は潔癖家だがいさぎよい
出来心馬鹿ねと鬼やんまが嗤う
掌中の珠は十指の友だった
背筋しゃんと約束の日まで歩く　倉敷市　野田素身郎

当然のように税金滞納す
呼び戻したい子がどんどん出世する
若葉マークとれてちいさな事故多発
自転車を下ろすにも妻日を選び
ゲームセットこれで僕等の夏終る
手応えが少なくなった髪を梳く　竹原市　小島蘭幸

妻よ子よ迎えに来たぞクラクション
蟬時雨坐禅を組んでみたくなる
真夏日のトイレにしゃがむ現実ぞ
パチンコのプロなら私でも出来る
襖開けると亡父の枕が落ちてくる
ひとつだけ芽が出て花がまだ咲かぬ　大阪市　津守柳伸

恥ずかしさ少し残っていたビキニ
高いから美味いと決めているスイカ
目的がある暗闇の迷いみち
冷房の喜怒哀楽も散髪屋
惰性から逃れヒミコの罪を着る
向日葵も夕顔も好き明日がある　島根県　堀江正朗

盲人は風とも話のできる幸
くり抜いた左眼の涙ごまかせぬ
桐下駄の音妻だけが持つリズム
亡母の声のせて頭上で鳴る風鈴
白杖を評価する目を背に感じ
苛立ちは白杖握る手にもあり　出雲市　原独仙

四季巡る自然の法則にも狂い
海招くみんな裸で来いと呼ぶ
残暑見舞律義な人へ返すペン
朝涼し地球確かに廻ってる
野菜の愚痴ビールが冷蔵庫を占める
油蟬残暑厳しと鳴き続け

倉吉市　奥谷弘朗

積み重ねあって生れたお人柄
夢のある内が花だと言っておき
文化財土蔵の壁を残す策
父として贈る言葉を考える
じわじわと値踏みされてる目に出合い
客が来て又ナイターを見そこない

熊本市　有働芳仙

酔い切れぬ酒を哀しい歌にする
天才も同じ高さの枕なり
妻の目を盗んですてる物があり
過去形で語る瞳の輝いて
不凍液私と貴方に欲しい頃
冗談を本気にされてからの距離

島根県　小砂白汀

冗談を言わなくなった怒ってる
頤をしゃくると雲が崩れだす
老いならんカタカナ如きに舌もつれ
ぬすと草風のたわ言聞き流し
花火師に銀河計画まかせよう
早い者勝ちだと仏壇屋が急かし

平田市　久家代仕男

慎重になると臆病風が吹く
たじろげば前もうしろも千の針
公園のベンチで示談まだ続き
いらっしゃいませと愛想のいい鸚鵡
条件が整いすぎて思案する
小銭では孫の玩具は買えませぬ

大阪市　河井庸佑

先生はよろしゅうまんなと夏休み
愚痴並べ己の値打ち下げただけ
時として冷たい言葉もいる立場
横車友達ひとりふたり減り
結局は親と先生知らぬだけ
裏側が読めぬ男の不仕合わせ

岡山県　嘉数兆代賀

雨季つづく雨はこころの中に降る
その裏を見透されてる敗けている
人形の眉に潜んでいる疑惑
駅に灯が点り情けの雨が降る
年金のくらしへ白いめしがある
幸福駅へ走りつづける縄電車

兵庫県　遠山可住

乗り代えて建設省に顔が効き
一年が早い達者な汗を拭く
立秋の風を知ってる茄子の味
迫真の芸は背中で芝居する
世渡りの裏の儲けを軽う言う
婦人票握って選挙勝ちました

和歌山市　西山幸

そうかあなたは身替り地蔵だったのか
いつか利く釘を一本打っておく

人を指す指はあなたも持っている
日めくりの紙の薄さにあるあした
虫干しへ生きてきた日が湿っぽい
うしろから私の影が追うてくる

大阪市　西森花村

一文も無けれど寝釈迦堂々と
ＯＫと言わずさよかと聞き流し
若い日も今もカンナは赤く咲く
うたい文句日本一ではもう売れず
秋めくや年金暮しも盆が過ぎ
交通渋滞今日の行先忘れそう

和歌山市　神平狂虎

疲れたら海の話をして欲しい
亡父の事星に頼んでよく眠る
俯くと何処かで嗤う声がする
滝の音胸にあるうち負けはせぬ
想い出を御伽噺のように言う
男はおとこの波を被って進むのだ

西宮市　林はつ絵

前ぶれもなく鵺のジャンボさ見せつける
今はユダの笑うをそっと見ていよう
モナリザの向いの席にいる苦痛
消しゴムを上手に使い丸くいる
鉛筆が疲れ口笛吹いてみる
当り券と熱いコーヒー飲んでいる

吹田市　西川景子

世話やきの血は母ゆずり祖母ゆずり
空回りばかりしているダイエット
台風の余波にいじわるされた旅
対岸の火の粉をもろに保証印
まゆつば物らしく話がやせてくる
見解の相違で遠く輪の外に

高石市　牛尾緑良

透析十年
耐えるなど言わずに妻がついてくる
薬より妻の手料理で元気
病床の便りは母へ子へ友へ
妻の手に夢も命もまかせきる
ナースより良く知っていて疎まれる
血の赤を妻も見慣れてきたベッド

大阪市　江城修史

背を向ける絆見事な捨てぜりふ
ままならぬ世に男ってつらいよね
肚割って話したい子は遠く住み
長男の嫁に家風をゆさぶられ
ままならぬ世にままならぬ肉親よ
隙のない男で人生語らない

富田林市　藤田泰子

お手洗い借りにホテルのロビーまで
十人の仲間にもらう十の彩
神様のマリオネットに甘んじる
盆おどり音頭は哀しい物語

若者のコンパスで描く広い地図
その内に煙も出なくなる火種

島根県　堀江芳子

三途の川ころばず老母よ越したまえ
真実が好き盲人の妻だから
一癖があって生きぬく白い杖
しみじみと傘の大きさ老母逝って
争わず蕾は開くときを待ち
温かいものだけ願う年と知る

岡山県　土居耕花

プリズムで見よう沢山妻が居る
世話焼いて一番禿る母の箸
ロボットもやがては欲しい生殖器
大正の眼にはビックリ筥ばかり
適当の距離に夫の枕置く
老妻という男性と同居する

名古屋市　越村枯梢

閑古鳥店の主は酒買いに
本心を明かすと別れが近くなる
同病と見て呆け老人が話しかけ
欲捨てて老境流れのままにいる
失恋を昔噺にしてしまう
母がいて子がいる部屋の窓灯り

唐津市　久保正敏

何一つ特技がなくて軍手干す
制御機を毀してみたい胸に逢う
やりくりの手形で走るキャデラック
言いにくいことに限って妻が訊く
人倫の道から外れた有頂天
鷹の子に学資継ぎ足す鳶の夢

唐津市　浜本久仁於

雪国に生まれこけしの薄い眉
方言を一つ覚えた雪の宿
方言で綴る悲恋の子守唄
食膳に載った魚の目が光り
喜寿生きて父に自慢の耳黒子
大漁の旗を鷗が追うてくる

尼崎市　春城年代

打ち消した噂がひとり歩きする
まむし指器用貧乏に甘んじる
アドリブのうまい男が連れにいる
夕立が逃げてストレスつきまとい
山の向うを探し求めて夕焼ける
長いものにより添うてきた女坂

和歌山県　寺田裕美

比べればきりない隣に嫁がくる
一本足のバッタが猫に追いつかれ
生え変わる草の名前に秋がある
秋が来て摘果の汗が見なおされ
中流の意識ひっさげ市場カゴ
愛犬に蚊取り線香をぶら下げる

浜田市　佐々木裕

妻の座も包丁の音も錆びて来る
頑なに造花のバラを愛してる
貸し借りが無くて正面向き合える
自尊心見付けてやれば従いてくる
肘鉄と殺し文句のからみ合い
人として生きる気力のクレゾール

島根県　松本文子

主なき部屋銀ヤンマ通り抜け
あの日から仮面外せぬ日が続き
妻という身分証明書を埋める
悲鳴とも懺悔とも聞くお念仏
人生観変えた無常の菊一輪
哀しみをゴクンと飲めばセミの鳴く

島根県　松本はるみ

アマリリスとてもきちんと咲いている
よそ見してフランスパンは齧られぬ
思いどおり切れます亡母の裁ち鋏
言うだけは言わしてもらう夏座敷
目を閉じて揺れていたのはさるすべり
明日があるあしたがあると喉仏

伊丹市　樫谷寿馬

塔も伽藍も見下し山の涼しかり
印刷のハガキを生かしている添え字
手伝って民宿らしい気が通う
お荷物にだけはなるまい子に想う
麦茶にも口つけられず盆の僧

富田林市　岩田美代

信じているから仲間が美しい
まだ書けぬ返信があり失語症
虹描く美しいクレパスは持っている
それなりに美しいコントよ遠花火
三つあみの髪そのままの盆どうろう

小野田市　国弘半休門

山曰く崩れるとこに家を建て
入院に馴れたと思えば六ヶ月
付添いに逃げられては困るトイレ
お食事を美味しくたべて医者がほめ
五年居ると言う入院の先輩さ

米子市　林荒介

神様の方だけ向ける面を買う
口上はすっかり父を越えて来た
中年の芸は背中でして見せる
ハンドルを切って夕陽を追いかける
お祭りの先頭を行くお巡りさん

大阪市　天正千梢

目先しか知らん心荒れている
よそ行きの顔で「為になる？」話聞いている
理屈の枠に自分をはめている
うかつにも大合唱についてゆき
伊吹山新幹線はプラモデル

京都市　山本規不風

別れようと妻も思ったろうに五十年

気にかけているあの人の好きな花
親と子のクッションふんわり祖母の皺
生き残り奇蹟の謎にある原因
大文字消え手を握り合う老夫婦　和歌山市　松原寿子

枠のなかで実らぬ愛を抱き続け
甘えてもいいのね迷いうち消され
夢幾重なお崩れても女かな
矢を向けて不動のこころぐらつかす
火の章へおんなの秋を織りたたむ　米子市　小西雄々

フィニッシュは何にしようか定年期
高齢化社会へひまわり母おもい
乱れても如来の顔は汚すまい
提灯もネオンも消えて明日の彩
ジョギングの丘で老後を案じない　倉吉市　渡辺独歩

万骨に秋立つ暦届いたか
適時打となるアイデアを子が放つ
ペンネーム慣れたら空を向きたがる
補聴器の世界に手話のキューピット
四〇年涙の跡は枯れやらず　松江市　恒松叮紅

詩人にはなれぬ歩道の夾竹桃
人情が残って島は海の碧
夾竹桃戦闘帽が征った道

惜しまれた人の訃を聞く炎天下
蟬しぐれ子無し夫婦の昼寝時　松江市　小林孤呂二

風化した戦をかたる終戦忌
光琳の波でもサーフィンは出来ず
謙譲表現にも乏しきかな小役人
赤提灯に灯が入り男の夜になる
「ひとひらの雪」老いのこころ惑わせる　松江市　舟木与根一

冠省楽しい友が居てくれる
花作る趣味を万年平は持つ
三度三度きっちり食事とる無職
少しずつ婦唱夫随へ移行する
ひと夏の体験日記から外す　松江市　柳楽鶴丸

弁解と見抜いているシャンデリア
馬鹿な事を言ってるときは御安心
男も女も浮気の虫を飼っている
モナリザもセーブアップがしたかろう
三次会は只今独身です　弘前市　波多野五楽庵

心にもないことを言う包み紙
この街に来れば破れる涙壺
気のせいでしょうと主治医の聴診器
惜しまれて晴耕雨読の人となり
仏滅で三りんぼうで二日酔い

一心寺

香煙の中で善女になりすます
迎え火をたいて待ちます旦那様
夢にも顔見せぬ貴方に慣れました
大惨事よそに航空機(ジェット)今日も飛ぶ
あられもない背に×(バッテン)水着跡

寝屋川市　宮尾　あいき

保育園臆せず保母の水泳着
無表情という表情がある甲子園
茄子の艶でるから不思議水墨画
年金の生活と知ってるクレジット
バスの客こんなに違う夏休み

京都市　松川　杜的

ささやきの中厚化粧の御出勤
通勤車あわい恋をだいたまま
鍵握る男へ敵が多すぎる
洗剤も荷物に入れて単身赴任
宿賃の外は貴重品のない旅行

柳井市　弘津　柳慶

俎に母が刻んだ四季の音
眉細う生きて汚点のない履歴
勝ち越して飯がゆっくり食べられる
輪の中の一人がそろばんばかりおく
自惚れの傘はななめにさして出る

兵庫県　辻　文平

失敗の言いわけは先ず吾にする
明日からと言いつつ明日も変るまい
裏切りは彼せい一杯の生きる知恵
きっと無理してくれるから頼めない
休肝日だからビールでやめておく

東京都　増田　次章

トップセールスに安らぐ日などない
美しい嘘に加担をして帰る
どうしてもドラマに欠かせない端役
相和して我が家にSOSは無い
父の背を越えると責任重くなる

竹原市　森井　菁居

すみません言えるチャンスはあれっきり
子等よりも低く暮していい余生
心臓よよくぞ堪えたぞこのショック
蛇苺その色艶を怪しまれ
コマーシャルをおしらせなどと耳ざわり

和歌山市　若宮　武雄

終戦の日から自伝を書きだそう
坂の上に住んで対話が減ってゆく
指切りの先に溜まっている妬心
甘言にすぐ乗りたがるイヤリング
鍵穴を探すライター貸してくれ

和歌山市　堀端　三男

流し目の犬よ鎖につながれて
金魚パクパク外の空気が欲しくなる

岡山市　川端　柳子

一口で言えぬ苦労は洩らさない
ゆりかごで聞いた気もする蟬しぐれ
ひげ面の父が愛しい終戦忌

仙台市　川村映輝

三食美味八十一翁の朝確か
憲法違反すれすれの日本の平和
倖せが過ぎて不安が頭出し
生きがいをゲートボールとは淋し
事なかれ主義が定年無事迎え

松原市　玉置重人

足跡は言わぬ羅漢のまるい顔
こつこつと働く策は持っている
缶ビール男ばかりのものでなし
通知票気にせぬ孫の灼けぐあい
私を裁く私の自己嫌悪

和歌山市　福本英子

寄港地と決めたら入りやすい店
約束のひとに届かぬ発車ベル
海紅豆娘の初盆へ遠慮せず
白昼夢敵も味方も甲子園
たっぷりと夫の保険掛けている

和歌山市　内芝登志代

三角や四角もあって丸く住み
正直に生きて貧乏しています
浅漬の色を味わう老いの箸
喪の帯の少し低目が哀しくて

人間を観察しているカラス族

寝屋川市　柴田英壬子

夏木立少し早目に来た老後
ゆれ動く心静めるペンダント
生薬を煎じて芯になるわたし
編棒をさがしておこう床の冷え
焼きナンバ主人が買えとあごしゃくる

大阪市　神夏磯道子

人間の弱さを笑う夏の草
モーニングサービスに落ち着けぬ妻
健康な間は気楽な差し向い
酒好きと聞いて気楽に酒贈る
幻想にしてはならないきのこ雲

大阪市　中川滋雀

追いついた時からわたしの影がない
枯れすすき同床異夢を抱いたまま
香典が明日もいります熱帯夜
病室へ声を落して金のこと
つきあい費上目使いに妻をみる

岸和田市　福浦勝晴

プラタナスの舗道で仰ぐ青い月
連れ添ってわかった夫に多いロス
ゴマを摺る術も知らないまま老いる
昔ヨイトマケのおばはんと飲むコップ酒
虎造がめしより好きでぼけ初め

倉吉市　渡辺菩句

海の見える窓に船来て童画になる
喝と鳴く鴉ののどを見てしまう
怒るなら怒らぬ判断は翌朝にする
その時はコック玉子の片手割り
手花火が展く真下にあるこの世

岡山市　時末一灯

握手した時から流れ向きをかえ
ネオン川ふらり噂が流れつく
まどろみのなかを八月十五日
水溜り流れる雲は秋の色
コピーしたような息子が気をもませ

守口市　羽原静歩

昭和元禄上げ底文化平和呆け
パン屑を鳩にやる日の墨絵めき
人間を裁く人間の咳ばらい
老いの坂涙はもろいものと知る
煩悩と煩悩楽しいデートする

桜井市　河合茂雄

知恵のある魚は領海線泳ぐ
自己主張させぬ扇にある要
父の日の父パチンコで負けている
見通しのたたぬ達磨の目が白い
憩いの場知らずに兵隊蟻が逝く

羽咋市　三宅ろ亭

ケイトウは去年のとこから顔を出す
美濃焼の茶碗をもらった盆払い

農協はお盆残金みな集め
墓参した帰郷の友を家に連れ
大水害大旱だった夏送る

河内長野市　井上喜酔

老化した頭で勘定だけ確か
晩めしの都合があると妻の愚痴
外食に行くのに化粧念が入り
立ち呑みが好きで決めてる指定席
病棟の優等生と医者が賞め

東大阪市　森下愛論

恍惚はいやだと出歩き飲み歩き
俺の話してたらしい皆黙り
本当かと念を押されて目のやり場
オーイ180ミリリットル美味くないお酒
影踏みをしてナイター帰る父と子と

西条市　片上明水

手のひらに乗せると消える夏の夢
杖にした他人の知恵が折れそうで
戦争はロボットだけがすればよい
都会から土産に買った泥の舟
半分の麦茶残して頼みごと

大阪市　黒田真砂

柳友と逢う日の化粧念入りに
定休日の昼はビールで済ます夫
風鈴の余韻打水盆提燈
明日の夢追う中流の兎小屋

鈍行の旅に情の沁みる駅　寝屋川市　江口度

銷夏法戸毎に窓を閉めきって
ポチ連れてなすびをもぎにゆく日課
朝顔の屋根に届いていわし雲
庭の苔格子の錆をあざ笑い
石切の水ですコーヒー店流行る　美祢市　安平次弘道

情報があふれ五感が鈍くなる
バラの棘おんな魔性をかくし持ち
願いごと神は指切りしてくれぬ
弥陀の手にすがると触れる縄梯子
どんぐりのプライド縦に並ばない　倉敷市　稲田豊作

僕の財窓に広がる空と雲
堆肥撒く政治に疎い汗出して
百姓の汗お日さまが瞰てござる
意外なり老師の部屋に裸婦の額
一本箸やがて私も立てるだろ　諫早市　原田メイシュン

四海波静かもう喧嘩おっぱじめ
機械化へ嫁は爪染め野良衣着る
右を見て左を見たらぶっつかり
落第も亦楽しからずや同窓会
最初から最後まで味方はやはり女房なり　新宮市　川上渓水

絶好調だから何でも良く見える
親に似た子の成績を叱りつけ
責任は持たず知恵貸す他人事
占いが少し気になる日の孤独
失業の耳には働く音ばかり　京都市　都倉求芽

落ちるにも順番があり雫
横顔は本音を語るイヤリング
アイディアは常識破って賞められる
路地にビルおっ建てたよな入れ歯
ロボットを相手に工場の昼弁当　高知県　赤川菊野

仏にも鬼にもなれず米をとぐ
医者の無い過疎へスナック喫茶店
極楽を見せて地獄へつき落し
再婚の話へ年齢がじゃまをする
独り居はテレビに笑い泣いて暮れ　今治市　矢野佳雲

高望み止そうと土に住むモグラ
切り札を抱くときめきが快い
猫撫で声聞くと出そうなジンマシン
年頃になってホオズキ紅をつけ
噂では別れた人もまだ一人　東大阪市　斉藤三十四

ビル街の夜犬が逃げてゆく
残業の靴は夜道へよくひびく

定年のそれから道は広くなる
万歩計朝の散歩の道変える
山の辺の仏はとっても話好き

唐津市　仁部四郎

母に聞き神に祈って母になる
黒白をすぐつけたがり罠に落ち
十五夜の嘘は書けない日記帳
十六夜は留守番電話セットする
偏差値を測りなおした鯨尺

唐津市　田口虹汀

いたずらもせぬ秀才の白い腕
雨に倦き太陽に倦き葉月終ゆ
亡父曰く風は借りなど作らない
いたずらな雨に連休総崩れ
ご先祖へ供えて朝の茶を啜る

唐津市　浜本義美

不倖せの夜は長くても朝がくる
もう一度たしかめてみるのし袋
病友の訃に明日をおもう秋の風
炎天がみごと育てる〝コシヒカリ〟
老いの夢年金噛じる孫に賭け

米子市　石垣花子

本心は押さえて女の来た歴史
虹入れて描かねば故郷の絵にならぬ
こっそりと握りつぶそう愚痴袋
嘘一つますます闇が深くなる
梨の花愛憎知らぬまま実り

米子市　青戸田鶴

八月の闇を見てきたひまわりだ
いつまでの呵責かまんじゅしゃげ燃える
つり橋をいつもゆすっている兄だ
傷痕はだれにでもある遠花火
語り部も風化してゆく夏の雲

米子市　寺沢みど里

満たされて虹につけ足す彩がない
かたくなな窓から風が折り返す
どの皿も赤い果実を待っている
手車を押せば歩ける老母の張り
片ちびの靴へあずけた半世紀

寝屋川市　稲葉冬葉

台風の目になっている娘が戻る
仮面していたことを誰にも話せない
花言葉固定資産税重くなり
飼主の主張を知っているおおむ
平凡に生きて白足袋白く干す

名古屋市　大林曲ん手

言う程は蓄めていません貸しません
年甲斐のなさ気短かを悔いている
あの頃はおちょぼ口の妻でした
同居してそうかそうかと負けておく
耳掃除している金の要る話

富田林市　田形美緒

悪ぶってみても所詮は檻の中
文化会館読めない額も掛けてあり
胸底にボロも錦も貯めている
虫の墓小石を積んで夏が逝く
嫁姑墓の前では睦まじく

鳥取市　森田熊生

だまされた事にはふれず電話切る
考えている気の電気消し忘れ
思い切り泣いて涙に意地がある
足棒にしても結論から遠い
耳そうじしてる父にもある意見

尼崎市　春城武庫坊

ピンク色の話についついのせられる
無理入れる袋を提げて会いに行く
口止めに飲ました酒が喋り出す
海笑うビキニが海に入るとき
ほほ笑みの中に女の嘘七分

出雲市　園山多賀子

独りいて複数の金魚飼っている
パン一枚食べて事足る無為無策
亀の持つペースは輿論に崩される
不即不離夫は長生きせよと言う
喝采のなかった兄に甘茶蔓

岡山県　岩道博友

割勘にしたのに年金差で絡む
明日の日を信じて自慢の種を播く
見物で無いのに入山断わられ
広告を見てから隣の町で買う
長風呂を出てから野球をくやしがり

堺市　柿花紀美女

人生のけじめつかぬに古稀来る
ひときわに輝く星は気丈な亡母
鍵っ子へ窓の風鈴鳴り続け
長男へ庭の燈籠苔重く
ゆるされた昼寝も老いの日課なり

姫路市　松浦輝月

田の面吹く風吹きぬける里の家
この暑さトーチカの日日思い出す
豪邸の主になって目が覚める
全国の祭をカメラと追っかける
散財して金儲けの本買うて来る

松原市　北野久子

カラカラのお墓へ詫びる事ばかり
思い出のちくまのそばは昼餉時
飲み助が揃って高い盆になり
割勘に慣れて私も社会人
縁側に日の這い上る秋近し

大阪市　北勝美

かぶりつく西瓜のうまさここにあり
白桃の滴る雫にある味覚
話好き僧もお盆は茶ものまず
串だんご線香にむせる六地蔵

ケーブルは墓参と花と捕虫網
兼六園の木陰で老母と蟬をきく
母娘旅亡父の写真も伴いて
海へ沈む太陽西方浄土の黄金道
千里浜でかもめが遊ぶわたしも遊ぶ
お天道さん亡父さんよい旅の日をありがとう

神戸市　山口美穂

核心へのらりくらりとふれて来る
根なし草辞令一つで飛んでゆき
入歯まだ我がものでないかみ合せ
一言を呑んで義理の輪に溶ける
かみしめた涙の数がちがう姉

和歌山市　細川稚代

中年の猫でボールと遊ばない
目を閉じて乱れた風をやりすごす
渦潮の恐さを船に見せておく
昼下りの空気を乱すチンドンヤ
傷口をさかなでにするボールペン

倉吉市　野中御前

夏の浜自信過剰の波ばかり
肘鉄砲女は強い武器を持つ
米櫃が空になってた盆休み
怠惰して夾竹桃の花眩し
白雲去来他人ばかりの原爆忌

松原市　佐藤藤子

ヤジロベエ器用な亡父に憧れる
葉鶏頭から熱い血を透析す
真実を一つ懐から点す
ぶきっちょな涙涸して皿廻し
あなたにも倖せクルミ砕いてる

鳥取県　新家完司

焼鳥の煙のはての星祭
さいころを握ったままで立ちつくす
宣誓台誰かが嘘をついている
黒枠に遊び足りない顔がある
満願の朝あたらしい水を汲む

鳥取県　中原諷人

母の料理イッキに食べて帰省の子
帰省の子知らせず帰る雨の中
旅先で出来た内緒は見ぬふりで
嘘八百夫は鞄につめてある
ねこじゃらし女の性がゆれ動く

八尾市　宮崎シマ子

四時の舟出て竹生島夜に入り
落ちるまで蟬は吟遊詩人かも
落日やいつか忘れる人と居て
やさしさを捨てたい胸へ虫の声
それだけが取り柄の若ささえ失せる

近江八幡市　前川千賀子

忠孝の忠と一緒に孝も消え
呼びよせる便りに書いた甲虫

大和高田市　岸本豊平次

だんじりについて町内一ト廻り
故里も代が変ってかしこまり
本好きな子で期待もし気にもなり

姫路市　人見翠記

うそつきの心まずしき顔の彩
この持病方便となるクラス会
金の欲ダイヤの唄の末路かな
ローカル線のりつぐ旅の好奇心
胸底に沈めた情熱休火山

宝塚市　丸山よし津

括られた紐の長さの猿芝居
リトマス紙濡れて答を迫られる
筆蹟は大事に自分だけのもの
ときめきを忘れてからの失語症
肩書きをなくしてからの寒い風

高石市　浅野房子

星屑は星屑なりのロマン秘め
青春の鐘の鳴る丘遠くなり
大衆の中の一人で満足し
中流を意識してから金が入り
怒りなげきやがてあきらめに移行する

大阪市　大塚節子

合格のお願いふえる星まつり
プライドの高さにおのれを見失い
熱のある身体に電話のベル高し
小糠雨ついそこどすにだまされる
やり水の肌に風あり今朝の秋

和歌山市　後藤正子

ボルテージ下げよう静かなる怒り
車間距離あしたが恐くなる視角
高速道命が軽くなる疲れ
助手席の眠りに思いやりがない
髪を梳く母をこっそり覗いてる

和歌山市　福井桂香

安心を売る保険屋のでかいビル
真心と思えど名物の不味さ
チューハイを手におばさんも女です
イースト菌ついでにイメージふくらませ
泳がされ終止符近くなるドラマ

島根県　北川民子

スリッパの音さえ今日は気にさわり
腹だちを蛇口ひねって消さんとす
ゴキブリのただ一匹へ鬼になる
頑なにくちなしの実口あけず
あばら家へ笑い充たして城にする

寝屋川市　岸野あやめ

角隠し男に角はないそうな
辞令受け男はつらいよ深呼吸
存在を主張するのか歯が痛む
鏡には淋しがりやの顔がある
夕暮れの早さに惑う針のめど

島根県　西村早苗

そんな縁だったが未練ちょっぴりと
片思いこんな冗談言える仲
冷ややかな眼を別れぎわにもらう
危なかったと手まねロまねロ八丁

大田市　藤田軒太楼

膨らんだ新芽に日課の水をやり
無器用な父で盆栽を友とする
山の湯に浸り孤老の詩心
口軽が来たと涼みの輪がとける

奈良市　森田カズエ

個性的妻に人魚の顔をみる
ためらいも詰めて欠かせぬお中元
新聞に相乗りしてる善と悪
パックづめにされる苺の朱が哀れ

玉野市　小谷仙山

昔の事言えば蛙が踊り出す
今日此頃の暑さが美味い生ビール
子守唄父がうたえば目がさえる
コスモスが自由に伸びて枝が折れ

今治市　越智一水

雑草に追われ退職せまられる
幸せな散歩日傘が目を廻わす
ライバルのキッス見舞へ見てしまい
御見舞に行き病人に励まされ

米子市　菅井とも子

割る皿を決めて落ちつく夫の留守
ふる里を想えば亡父も亡母も居る
ひと昔前にはみんな生きていた

米子市　田中亜弥

花の道歩けば花の精に似て
ほめことば梨は素朴でほしがらぬ
白と黒けじめつけねば死にきれぬ
病院へ歩くコースは決めてある

七尾市　松高秀峰

母の骨箸より手でみな拾い
ひと言を控え男の見直され
母の死に花輪が光る子の出世
犬といる時にニコニコ自閉の子

芦屋市　竹中綾珠

マリオネットのよう親の言葉よく聞く子
鬼瓦の無い家増えてピアノ道
跳び過ぎて自分でびっくりする蛙
男達も化粧するちょう世となりぬ

鳥取県　林露杖

夾竹桃の紅白舗道の夏を染め
せめてもの贅たっぷりと水を打ち
切り売りの車輛国鉄店仕舞
立秋という熱帯夜原爆忌

宇部市　平田実男

老人ホーム息子来た日はよく喋り
ほどくのに困る同んなじ血のもつれ

呆け老人やがて行く道笑うまい
似ていると言われ可愛さつのる孫

町田市　竹内紫錆

幼時の記憶しかと震災
同窓名簿に光る晩成
疲れたからと旅行する人
砂煙から立つガッツポーズ

鳥取県　金川満春

二度と無い人生喜寿を温める
裏表卒業しました喜寿の坂
福祉法やたら老人遊ばせる
ほめもせず叱りもせずに期待せず

岸和田市　清野こう

旅行先踵を返す計の報せ
小心で馬鹿正直でつけぬうそ
愚図だけどやりとげる意地持ってます
又逢う日誓った君はもう居ない

岸和田市　古野ひで

気にかかる子がひとりいて生き伸びる
こんなにも似るかと母娘見つめられ
大切な鬼門へ今日も犬の糞
あれからは八月の風泣き続け

高知県　松岡三吉

定年の日から包丁がよく切れる
清物の石このごろはどっこいしょ
袋ごと渡して貰いにくい金
料金は十円色気のない電話

神戸市　仲どんたく

暫くは掏摸も見とれている花火
宝恵駕にこぼれる裾のまま揺れる
煩悩をかなぐり捨てた棺の笑み
クラシックにはクラシック聞くポーズ

羽曳野市　佐野白水

来年の富士へ金剛で足鍛え
大阪の方言生きている黒門市場
栄転も左遷も知らぬ彦根城
十六代目もう藩主でない市長

大阪府　坂口公子

貝割れの白い根っこがからみ合う
倖せと隣合わせでいる焦り
山里の朝へ切り絵の夢を見る
思い切り噛みついて来て泣いてはる

東大阪市　崎山美子

見栄すてた生活に朝の風清し
我慢してみたが好転しないまま
冷蔵庫の整理でピンチの膳かざる
定退の日課のひとつ孫の守り

西宮市　奥田みつ子

炎天に対話が続く母の墓
リハビリの砂袋持つ姑の汗
氷柱花花の冷たさわかるまい
こおろぎは千年前と同じ歌

大阪市　長谷川　春　蘭

木もれ陽に滝の冷気の夏の朝
このあたり覚えある道村祭り
白壁のつづく町並蟬しぐれ
滝の軸掛けて涼とる夏座敷

岸和田市　原　さよ子

へそ曲りの癖そのままに減る踵
息子もう嫁の好みの味になり
心意気だけで根気がついてこず
降るような星空残し旅終る

大阪市　藤田　頂留子

十人十肌世界なかなかまとまれず
科学でも駄目ね一寸先の闇
独り身のハンディ作句にもおよび
社会派のセミ街路樹でシュプレヒコール

西宮市　西口　いわる

本物の笑いを幼児からもらう
腰紐が女の心しめてゆく
折返し地点で重くなる荷物
責任を果したようにばら崩れ

福岡県　横地　雅風

新築も十年で売る使い捨て
排ガスを逃れて公園愛児抱く
通してる自我に相手は金を持つ
儲けたい金吸い取られくじ売り場

倉敷市　小幡　里風

庭石へ打ち水午後の暑気払い
蟬の鳴く去年と同じ節廻し
三伏の夏へ挑んでしじみ貝
風鈴の風すら休む午後三時

島根県　木村　はじめ

古寺の萩の中から世を覗く
馬鹿になる心へ邪魔な自尊心
アフリカは飢餓飽食の朝の膳
栄光の蔭にひそんでいる孤独

出雲市　吉岡　きみえ

おんな心じらし焦らして花時計
六十年惰性で生きて悔いばかり
どんぐりはどんぐりなりに秋を待つ
いつになくはしゃぐ妻にある秘密

岡山市　井上　柳五郎

音で聞く花火でよしの老い二人
これしきの動きで光る老いの汗
これ位はいいではないか深む酔い
雑音で聞けと本音置いて去に

岡山市　行吉　照路

ペンダコは住所氏名を書くばかり
トンネルを抜けて男の血が騒ぐ
Uターンの橋で労働歌を唄う
サングラス今日はネクタイ無い休み

岸和田市　芳地　狸村

ご無沙汰をしておりました墓掃除

電話までカードを使っている時代
ご先祖が驚きましたビルの墓
指先に力が入る保証印

和泉市　西岡洛酔

残り火をねぶた祭に燃えて居る
みちのくの夏の祭に余生行く
ポシェットに女小さい秘密入れ
宿の下駄背信を知る音で鳴り

出雲市　落合正江

入院（一句）

熱の夢赤鬼青鬼追いかける
我儘を叱って下さいお不動様
物言わぬ女の日傘ふるえてる
夏帽子川に流れて嬉しそう

奈良県　宮川古都路

お茶の友孫もおかしい素振りする
ゲートボール老いのたしなみうす化粧
専属をはなれてフリーの席がない
海外へ一人赴任の飛行雲

西宮市　野呂鵜汀

納得がいかず茶漬の音荒し
華やかな式に泣く親笑う親
蟬捕りの子の抜き足は安来節
鼻水の落ちた跡あり母便り

守口市　野呂右近

掻き出せば全体痒くなる背中
丸味出たとは覇気失せた事なのか
未来見ず過去振り返る余生の日
再婚で幸せ摑んだ噂聞く

出雲市　板垣夢酔

百姓にお米があって銭がない
野球拳男が脱いでなんになる
快復をしたらと預金まだ言えず
ラーメン屋今日は背広で相場する

姫路市　大原葉香

風鈴の風に騒音まぎれ込み
くもの巣を無断で軒に張り始め
ステテコをはいて男の夏となる
串にさされ火焙りにされ鮎の刑

羽曳野市　中村優

或るときはネオンが好きな戎橋
職安で耳に蓋する労働歌
一億の端数の孫と手を握り
かな文字へ愛を遺して母が逝く

浜田市　中川幸一

演出をされた出会いがぎこちない
難病の露見が怖いレントゲン
繕うたバランスシートで金を借り
女子社員注目という品定め

岡山県　直原七面山

新芽の囁き
話と違う娘
草に寝て雲を追い
娘は距離を置いて座し

橿原市　岩井本蔭棒

笑点が違うお人と喜劇見る
威勢よく軍艦マーチへ突入し
買って来た定価通りを叱られる
町中が留守で空巣も甲子園

笠岡市　松本忠三

高い高い孫の笑いが宙に舞い
天候に左右されずに荒れている
核心へ素知らぬ顔の頬被り
忘れてた薬そろそろ快方期

倉敷市　藤井春日

宝石へ揺れる心を罠は待ち
赴任先へ身籠りましたと妻の声
二度と来ぬ青春だ粗末にするでない
カラオケでお経で鍛えた声が受け

大阪市　中西兼治郎

残してた旧万札も放す破目
計ってる様に尺取虫登り
鳴戸大橋見上げて渦が目を廻し
おかあさんだけが夏休みを嫌い

箕面市　坪田紅葉

柴折戸に伸びててっせん咲くままに
仏よりお金が大事寺もめる
暑い午後美容院はこんでいる
バーゲンのホームドレスで若がえり

兵庫県　藤後実男

病床へ退職勧告来た上司
お互いに飲まぬ約束バーで会い
ライバルへひそかに買った道路地図
石を積む心の嘘がくずれかけ

島根県　大屋秋峰

美人より一段落ちた妻でいい
土にぎるこぶしの中に今日がある
鉛筆の主張を削る肥後守
二十一世紀へ生きる顔あり消える顔

豊中市　田中正坊

肩書がまだ残ってた定年後
さざなみも怒濤もあった父の海
近況は相変らずと言える幸
日本が真ん中ではない地球

尼崎市　角野かず子

杭打って仲良く暮らすことにする
親だけが眠たくなった子守唄
骨の痛みを知っているのは雨女
転落の道とは知らず弾む毬

寝屋川市　平松かすみ

地球からこぼれ落ちずに半生記
ゴキブリの速さに負けた蠅叩き
良い方へ解釈してる更年期
ピコピコに主婦がドレイにされている

堺市　河内月子

石榴熟れ女に隠しごとふえる
礫になっても言えぬ男の名
当然のことへ眩しい感謝状
この坂を一気に登るあなたと登る

枚方市　二宮山久

受付に美人という敵をおいておく
追伸へ愛の深さの切手はる
艶っぽい肌が気になる妻パート
大胆なポーズで爪切る女坂

大阪市　吐田公一

二十一世紀の夢を育てる柿の種
酒の力借りて口説いて共白髪
茶断ちして仏にすがる子の病
旅立ちの朝の茶柱懐に

尼崎市　西村かすみ

盲点をつかれてからの距離が出来
泣きに行く故郷に青い海がある
背もたれのない善人の固い椅子
背信の靴を揃える泣きぼくろ

出雲市　石倉芙佐子

灯りつく橋まで行こうひとり旅
犠牲の杭は黙して泣きはせぬ
夕映えの橋美しく枯葉舞う
修羅の橋ただひとすじに渡りたい

松江市　竹内寿美子

またひとり私の船を降りて行く
どの人も皆淋しがり梅雨の空
紫陽花や逢いたい人にまだ逢えず
糸電話いつも火になる赫くなる

西宮市　津山冬子

お向いは絵になるような老夫婦
早く起き隣も掃いて祖母達者
通知簿へ子供の不安叱れない
いじめっ子ふっと見つけた泣きぼくろ

豊中市　奥田満女

夏休み来たよ虫たちかくれなさい
女居て食べ度いような脚を組み
注文をしてから入れ歯忘れてた
安らぎを繁りの下の地蔵さま

大阪市　板東倫子

戦争を知らない人の核論議
語り部となって被爆者口開く
僧兵が山門閉ざす京の夏
絵日記のための旅行に連れて行く

川西市　松本ただし

古都に生き古都の遺産を喰う鼠
孫の居る余生に入道雲も立ち
清濁を一気飲みするお人好し
捻子巻かぬ時計に老妻なってゆき

寝屋川市　堀江光子

一匹も怠けていない蟻の列
竹とんぼ風にさからう夢を見る
いつ見ても母のバッグは変らずに
人ひとり愛し抜けずに説く教え

西宮市　山片紀雄

降るもよし照るも亦よし生きて居る
降って照るくにの大地は瑞穂型
渡り鶴亀も卵を産みにくる
白い球一つの行方に血を湧かす

境港市　細木歳栄

ほろ酔いの時だけ賞めてくれたとて
ストレスの捨て場にされている私
整理箱積むだけ積んで片付けず
ララランランさんりんぼうとは何だ

島根県　藤原鈴江

風に舞う花びら自由をもてあまし
ハンサムも優しすぎては頼りなし
廃人になるかも眼球いとおしむ
限界を知っていながらなおあがき

高槻市　竹内花代子

畳這う蟻へ人差指の鬼
ソックスのレースを賞めた茶の稽古
アナウンサーの声が弾んだホームラン
初盆と忌明兄妹同じ月

竹原市　信本博子

今も尚夢から覚めぬ鳩時計
最後までかけて気付いたボタンのずれ
しっかりと居場所を確保塩のつぼ
記憶喪失わがふる里の発展譜

島根県　石田清泉

片仮名のヒロシマ何処までつづくのか
大臣の献花も枯れる午下り
仲良しをしようと鳩が寄って来る

西宮市　朝山千世子

油蟬あさがお大輪かぞえてる
下町の玉三郎に酔うている大衆
まけて貰っただけ買うて見た宝くじ

枚方市　稲葉星斗

炎天下陸橋の下救急車
孟蘭盆会僧侶のつとめ蟬しぐれ
盆経を上げて夜釣りへ父は出る

和泉市　岡井やすお

本当の国民多数何で知る
金やめて旅へ注ぎ込む老分限
ボケはじめトイレにも吊る備忘板

大阪市　北山悟郎

お人柄課長どまりで惜しい人
雑音はそれぞれに根が生えている
人に言えぬ些事泣いたり笑ったり

大阪市　岡田ふみ

アルゼンチンより友帰国（二句）

外国で育った息子が孝行で
再会の約束出来ず手を握り
母の忌に炎暑の京へ子が五人

和歌山市　坂部紀久子

八月六日何時も我子の誕生日
他の星から見れば地球は光るまい
今年又無事で踊る阿呆になる

姫路市　丁坪サワ子

梅干の出来をみせたい姑は居ず
冷奴留守を楽しむ姑の舌
古都税にくすぐられてる仏の座

和歌山市　山川克子

赦された空の青さが目に沁みる
目を伏せて揺れる心を鎮めてる
地球儀を廻して飢餓と飽食と

松原市　小池成男

プロポーズ風邪も歯痛もみな治る
タイガース勝っても負けても呑んでくる
長い日もきっちり知らす鳩時計

岡山県　二宗吟平

ステージで餅つき客の歌を入れ
念仏を唱え石手寺暗い地下
シャッターを頼んで立った鳴戸大橋

尼崎市　伊藤春子

墨が光る暗中模索の筆を持ち
つまずいて耳をすませば母の笛
留守番はまかすかしこい犬がいる

豊中市　上田登志実

さわやかな十月私の生まれ月
彼岸会に詣でる妻の衣がえ
暇ついた古家具に見るわが歴史

大阪市　松尾柳右子

悪玉が混じりドラマは動き出す
盛り売りに一つは混じる傷があり
窓少し開けていさかい気にかかる

大阪市　塩田新一郎

青春も戦争（いくさ）も遙か天の川
生ビール売りきれました水都祭
すっきりと自毛の芸妓の富士額

大阪市　町田達子

お地蔵様の嘆き聞いてる袋菓子
ゆったりと鼻唄も出る野天風呂
旅先のコーヒー歴史の味に酔い

自選集

三度目の梅雨明けから来た酷暑
折角の帰省野球で明け暮れる
仲人へ父あれこれと娘の短所
無事着いた知らせへそっと置く受話器
午睡とも知らず順番待たされる

大矢十郎

袈裟斬りで思い上がりを消せばよい
諸行無常だ赦しておこう乳臭し
物言えば癇に障ってくる輩
他に術無いものか癌憎し
癌憎し憎しとも癌諦めず

野村太茂津

医者の笑顔額面通り受け取れぬ
月も荒れてる極楽もあの程度
日記のみ知るあつい思いを持ったまま
鳴き叫ぶいのちの限り蟬しぐれ
手相人相足にも相がある筈だ

長野文庫

子が笑うプロレスが好き妻も好き
爪パチリパチリただいま編集中
母知らぬいじらしい妻の夢
プロでない私が戴く講師料
南無阿弥陀仏罰が当らんのが不思議

山内静水

盆帰省水のうまさから語る
四十年平和に慣れ人の道ゆれる
順序くるうから人の和を乱す
受章それから長生きしたし仕事へも意欲
中流の家庭もローンと同居する

藤井明朗

牧水の〝幾山河〟碑を訪う
当時三歳の除幕者、小川裕子さんの案内

足おとを幾山河の道に聞く
牧水のその日を旅の峠茶屋
わたくしも牧水となる歩を止める

水粉千翁

牧水はここから西へ蟬時雨
いしぶみの心果てなき旅に哭く

米沢暁明

兄ちゃんも抱かせてみたい母の膝
お得意様お得意様とだまされた
持ち合わす方が払うて喫茶出る
欲のない男で話すすまない
外が見たい時もあろうに高い塀

高橋操子

海へ帰る子亀よ母といつ逢える
人間動物園へ入園希望者多いとか
大人にもはやりかけてるまんが文字
まんが文字なぜ悪いのと子が尋ね
赤い靴はけばリズムにのる踵

八木千代

鼻先をかすめて遮断機が下りた
ひまわりに冬の話をしてやろう
森の絵が透けるまで拭く秋のガラス
仏飯を盛る愛されたお返しに
失ったものを探しに行く柩

小出智子

玄関に秋が来ているご挨拶
丁寧な言葉を探す仏の間
歯を抜いた医者を三年忘れない

その頃は姑もいた柿畠
秋が来て隣はピアノ弾いている

尼緑之助

氷山の一角崩壊した虚業
鍬洗う夏の日ぐれの里言葉
川の詩汚染で黙る世紀末
腐れ縁なかなか切れぬ木綿糸
CMのとおりになれば死なれない

月原宵明

罪深き女見つめる鳳仙花
血を分けた親子で同じとこに渦
靴すべり嘘がそこから湧いて出る
流れ星二人は何んでもない二人
奥さんの美人が自慢ご用聞き

藤村〆女

乾杯へ下戸もジュースを持って立ち
償いはきっとしますと夜逃げされ
赤トンボ静かな秋を我におく
大事にも邪魔にもされず老い気まま
古都の鐘その寺々にある音色

川口弘生

オパールとトルマリンかやオクトーバー
日の当る丘でアフリカの飢え思う
血を吸った蚊を叩いた熱帯夜

鮫の歯が天狗の爪になる信仰
此の道を真直ぐ行けば寺がある

小林由多香

横すべりして窓際の席温め
スーパーの流れをもらう小商い
帰省して亡父との対話墓洗う
管理職に抜擢器用さが失せる
暑に耐える蜆の汁を熱く吸う

黒川紫香

美しい月だと思う奥琵琶湖
杉木立峠はいつも雨が降る
追い書で家から出した旅便り
塀ばかりつづく都会の白い坂
コーヒでも飲もかと軽くあしらわれ

市川鱗魚

義理の重さが針のむしろで責めてくる
気の多い女ツボミの花を買う
鏡かけ覗くと亡妻がいてくれる
嘘つきはとても嫌いな忘れ花
一夫一婦の掟で回る金の独楽

本田恵二朗

金婚宴食い気呑み気に取り巻かれ
色直し相合傘で見せつける
成功じゃないまぐれですまぐれです

うわさ種仰山提げてコンバンワ
ピヨピヨとあと追いかける歩が揃い

正本水客

期待していますと責任がない
うつされた欠伸へ笑顔返しとく
子育てを振り返る声に艶があり
少し遅れて悪知恵が付いてくる
外野席にいる気でベール取っている

児島与呂志

今更の人生にある線を継ぐ
妥協点見付けてやれるお人好し
しおらしい女姑息な指を持ち
夕陽落つ恋の炎かも知れず
ひっそりと重ねる両手に欲動く

工藤甲吉

法治国指紋一つを持て余し
米価据置百姓はお人よし
手の中でばかり泣き虫育てられ
カマキリの雌の辛さは雄を食い
打明けるにはお月さん円過ぎて

〈お詫び〉 9月号で長野文庫氏の自選句を誤って〝川柳塔〟欄に掲載しました。お詫び申し上げます。

川柳太平記 (89)

川柳の群像

塚越迷亭

東野大八

前章で高須啞三味をとりあげたので彼の無二の親友塚越迷亭を語らねばならなくなった。

「川柳雑誌」(昭和39年7月号)に啞三味が「塚越迷亭を語る」—交友五十年の彼とボク—と題して二頁にわたりユーモラスな一文を寄せている。それをタネ本に、愉快な迷亭記を再現することにしよう。

啞三味の稿でもふれたが、啞三味と迷亭は「友情金婚式」と名づけるほどの半世紀のつきあいだという。

「むかしは人生五十年といった。その五十年間、綿々とつきあってきたということはなみ大抵のことではない。二人の間で〝友情金婚式をやろうか〟という話が折々でるのも、あながち冗談とは笑えないのである」(啞三味)

まず川柳家戸籍謄本ともいうべき宮尾しげを編「昭和川柳百人一句」から迷亭を紹介しよう。

塚越迷亭(本名正光)明治二十七年一月八日生れ

出生地　東京市芝区烏森町

柳　歴　大正三年投稿家として川柳を作ったが、大正九年五月「きやり」吟社の同人となり今日に至る

○金借りに勤め先まで訪ねて来　迷　亭

○勤め口ここにも裏の裏があり　〃

○退社する思案つめたき社の机　〃

「ところでここでちょっと迷亭の秘密?にふれてみると「出生地烏森」といえば、七十年前は東京三大歓楽境柳橋・新橋・赤坂で、烏森もこの中にふくまれる。そこで出生というのは言わずと知れた新橋芸妓の子というわけ。南千住で回漕業をしていた彼の父親の全盛時代の記念として彼はこの世に生れ出たので、彼の血(気質)の中に、そういう遊侠的下町気分が多分にあるのも決して不思議ではない」(啞三味)

迷亭が一時「南船二」の筆名で雑文をかいているのは、盛大に回漕業をやっていた父の許にいたからで、めでたく上の学校も出たいわば温室育ちの東京ッ子で、政治新聞を派手にやっていた啞三味の父の立場とよく似ている。この二人が気が合うのも根はこんなところにあったらしい。

「ラジオ新聞」編集部で机を並べたのが二人の交友のはじまりで、つづいて「毎夕」へそろって入った。ここでは矢野錦浪傘下の高輪クラブがあり吉川雉子郎、川上三太郎、近藤飴ン坊、佐瀬剣珍坊、藤田珍茶坊らがいてこのメンバーに二人も加わり昭和十年頃まで賑やかにやっていた。

大正九年迷亭は「きやり」同人になっているが、彼はその才能をかわれ編集を担当するようになってから「きやり」は菊判百頁台の東の大柳誌にのし上った。この実績は迷亭の手腕力量にもよるが、啞三味、三太郎、陣居らの支援に負うところは見逃せないようだ。

この迷亭のきやりといえば、啞三味の一文にはないが、筆者が最も注目した一件は、大正十四年八月号に次の社告がきやり誌上に現

れていることだ。すなわち

舌　代

本吟社村田鯛坊氏と特殊関係ある吟社以外同氏募集吟選評に対しては、相当選稿料請求仕る可く、自今選評御依頼は吟社宛お願い申上候　　川柳きやり吟社

つまりきやり吟社主幹村田鯛坊(のち周魚)のタッチする選評等の原稿・作品等については、それ相当の謝礼を支払え、というわけだ。この企画は誰がみても迷亭の仕事だと判断できる。筆者は大正期も末のそうした時期において、趣味娯楽の域を出なかった川柳界において、このような革新的なアイデアをうち出した迷亭なる人物に、いまもって敬意を惜しまない次第である。

「彼の迷亭というのは、漱石の「猫」から取ったときくが、どういう心境からか昭和九年四月から、突如彼は本名の正光を使いはじめた。そこでボクの企画で東都柳壇の主要柳人27人を発起人として並べ「塚越迷亭号を送る会」というのを、同年六月八日時事新報社交室で大々的に催した。

宿題選者は九人、彼の謝選がついて十題であったが、非常に趣向を凝らしたものであったから、それを紹介しておくことにしよう。

「変わりこそすれ〳〵」　川上三太郎選
「左様なら」　村田　周魚選
「瞼の母」　矢野　錦浪選
「シャボン玉門を出て行く」　前田　雀郎選
「怒りつつ許す」　吉川雉子郎選
「悟る」　三浦太郎丸選
「初婚とは限らぬという年になり」　品川陣居選
「憎まれ口」　竹田花川洞選
「江戸ッ子」　八十島杜若選
「酩酊」(謝選)　塚越　正光選

これ迷亭の全容を物語るもので、この題から迷亭そのものが浮かび上ってくるのを、多少でも彼を知っているものならすぐ感じてくれるのでなかろうか。言うまでもなく当日は東都柳壇まれにみる大盛況であったが、会場に備えつけた「迷亭箱」と名づけた罰金箱には、当時の金額にして一円余りが入っていて後の慰労会の資金の一部となった。その罰金制というのが、左の三ヵ条で

一、正光が自分の名を「迷亭」と呼称したとき
二、来会者が正光を「迷亭」と呼んだ時
三、それに対して正光が返事した時

一回五銭を徴収される制度だったが、忙しく会務をやっている連中が、ついこの制度にひっかかり笑いながら五銭玉を入れる情景はほほえましかった。しかしなんといっても平生から迷亭々々とつきあってきたボクが一番の多額納税者であったのは、後の笑いの種となった」(高須啞三味記)

しかしこの二人も昭和十三年啞三味が関東州大連の満鉄へ、翌年迷亭は台湾の新聞社に招かれて別れる日がきたが、奇しくも両人の門出が申し合わせたように五月十五日であったという。

台湾の台北に居ついた迷亭は、ここで昭和十五年台湾初の川柳社を興し、機関誌「国姓爺」を発刊するが、日本敗戦により昭和21年それぞれ二人は内地へ引揚げ、迷亭はこれを機に正光から迷亭に戻る。そして「全国浴場新聞」を経営するかたわら、きやり吟社顧問として村田周魚を助ける一方、川柳長屋連の重鎮としてまた川柳人クラブ委員長として東都川柳界に迷亭ありの実績を示していたが、昭和四十年三月十二日病歿した。享年七一。

啞三味も迷亭と同じ年に前後して死去しており、その年齢も全く同じとは、よくよくこの二人の友情の因縁はまことに深いものがある。啞三味も迷亭もともに小説作家を志して成らず

佗住居ペンでは食えぬペンを持ち　迷亭

の晩年の句が心に残る。

★次回は「**高木夢二郎**」

誹風柳多留廿六篇研究（二十二丁）

本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木　黄・石田晋一
南　得二・小野真孝・多田　光
故岡田　甫

365　**碁か済んで仕廻ふと杣ハつんのめり**

本多＝杣人、王質の故事を詠んだ句。

晋の時代、王質は石室山で数人の童子が碁を打っているのをみつけ、側に立って見ていた。童子の一人が幾日たっても飢餓をおぼえないというなつめの実のような物をくれたのでそれを口に入れた。やがて童子の一人が、長く見ていたから、もう帰りなさいという。王質は、斧を取上げようとしたところ、柄の朽ちているのに驚き、急いで帰宅したところすでに数百年が経っていた。その後、王質は再び山に入り、仙道をえたという。

句は、斧をテコに立ちあがろうとした所、柄がボロボロになっていたので、思わず前へつんのめったであろうとの穿ち。

だめをさす頃斧の柄を羽蟻立チ　五三・23

斧の柄が朽ちぬともっと居ル所　七六・6

多田＝賛。**岡田**＝同。

366　**雪打に口をすくする花の主**

本多＝「雪打」はいまにいう雪合戦。雪投げの遊び。「口をす（酸）くする」は口が酸くなるほど言う意。

庭で元気よく雪打ちをして飛び回っている子供に、「雪打ちはやめなさい、花に当ったらどうする」と叱りつけるが、子供たちは夢中で雪打ちをしている。

石田成＝賛。花は、梅、水仙、椿などか。

大屋＝春になったら花畑になるはずの所を。

南＝礎賛。盆栽の花の持主も同じ。樹の持主も同じ、限定したくない。それより「口をすくする」であるから花は梅である。

多田＝賛。私は梅の主と思っていた。

岡田＝同右。南氏の説の通り。

367　**らにしほになんぞと地下の歌学振**

本多＝「地下」は、いろいろな意味があるがここでは生半可な歌詠みを揶揄して呼んでいる。

句意は、和歌の道に精通していない歌詠みは、もっともらしく「らにしほに」などと古語をひけらかすものだ。一家言あるというところを見せるのが、生半可な歌学者にありがちなことである。

らにしをにのとなまかみな歌学者　四七・39

多田＝賛。**岡田**＝同。

368　**蒲焼のすじ迄息子穴を言ィ**

本多＝「すじ」は鰻の味のよいものをさす。「穴を言ィ」は、穴（内情、実体）を穿つこと。言わずもがなのことを言う意である。

句意は、「江戸まへのすじで息子ハぬらくらし」（四〇・35）で、親の意見に耳をかさぬばかりか、何かといえばあでもないこうでもないと理屈をこねまわし、蒲焼のすじ迄わけ知りを言うどら息子であるというのだ。どうにも手に負えぬ息子に、手を焼かされる親の渋面が感じとれる句

多田＝「穴をいふ」は「欠点、わるいところをあげつらう」という方が強いか。「しろうとになって女郎の穴をいい」（一七・22）息子へ口がぜいたくになって、「どこのうなぎは油がない」などと文句をいう――ととっている。

岡田＝通ぶって、悪口をいうのでしょう。

369　**太右衛門ハ獅子太郎兵衛ハ牛を飼ィ**

本多＝「太右ヱ門」は湯島の牡丹屋太右ヱ門。「獅子」は、「牡丹に唐獅子」の俗諺の利かせで、牡丹を暗示。

「太郎兵衛」は芝高輪中町の住人仙波太郎兵衛という牛飼。

主題句は、獅子―牛と縁語仕立てで詠んだだけの句。湯島の太右ヱ門は牡丹、太郎兵衛は牛飼としてそれぞれ江戸市中に名高い、くらいの意。

多田＝賛。**岡田**＝同。

370　**夕部から見へぬ茶わんに蕎あり**

本多＝正月七日、爪の切り始め。これを七種爪といって、邪気を払い縁起がよいとされた。句意は、七種爪をとるために、夕部から早々と茶碗に蕎を入れて台所へ置いておいたのを亭主が見つけて、「茶碗がねえと思っていたら、もう蕎が入ってやがる」といったところであろう。

石田成＝六日の夜蕎を茶わんに入れ水に浸しておく。

琴の音の止ム日七種爪をとり　二五・25

多田＝賛。

岡田＝同。

371　**又まりをつくかと医者の弟子ハじれ**

本多＝医者と蹴鞠は縁が深く、本篇1ウ九に「法眼ンのすすめ水ィ干ン急ワに出来」とあり、「法げんのすすめで四本木をうへる」（二三・23）で、病弱な人の気分転換や病後の運動に、すすめることもしばしばあったようだ。主題句の場合は、病気と直接の関連はなく、趣味娯楽として鞠好きな医者であろう。

御出入りの屋敷で、「いま主人と蹴鞠に興じておられます」と告げられ、師の鞠好きは承知の上だが、「ああ、また鞠か……、待つ身にもなってくれ」と供が心を焦らせてる、というのである。

八木＝賛。現代のゴルフ又はその練習場通いが連想される。

小野＝賛。蹴鞠をすすめた手前、お相手をしているのでしょう。

多田＝患者が医者からいわれたように――礎解引用句――蹴鞠をしている。その間は往診に来た医者も待たざるを得ない。それを医者の供は「この前来た時も待たされたのに今度もまた鞠か」といらいらしているととったのですが。

岡田＝同右。

江戸川柳に現われた八百屋お七 (三)

阿達義雄

〈いろは茶屋〉は、祖師堂のある谷中感応寺の門前にあった水茶屋で、『江戸砂子』には、「いろはと書いた暖簾して水茶屋数十軒ありし」とある。水茶屋とは言っても、要するに私娼窟に類したもので、この辺には寺が多くあった関係上、その遊客の主だったものは僧侶などであったらしく、従って、この辺の吉三くらいの寺小姓がはまり込むようなことが多かったのであろう。

いろは茶屋吉三くらいがはまる所　（「櫻の實」5）

但し、この句の前句が「いとしかりけり〳〵」とあるのを見ると、吉三がそんな所へ行くのを見て、お七が之に同情しているような気味もあるのであろう。

お七吉三の仲は益々深くなって行き、今は一日も相会わないでは居れないようになってしまった。

その頃、愈々お七の家の新築も成り、一家は吉祥寺を引払って、新宅へ立ち戻ることになった。お七は吉三にひかされて、何とかして、もっと永く寺に止りたいと思い、新築の我が家に対し、

なま壁はきつい毒だとお七言ひ　（『柳樽拾遺九・9）

などとけちをつけてみたものの、両親に叱られ、泣く泣く寺を後にして新しい我が家へ帰ったのであるが、今迄の楽しい一日一日を思い出し、明日からの吉三の居ないわびしい生活を考えると、胸の中に空洞が出来たような気がして、居ても立ってもおられず、ただソワソワするばかりであった。

火のついた様にお七は逢ひたがり　（柳多留八三・58）

それにしても、先ず吉三を寺から呼び出して、二人だけで会い、もう一遍心のありたけ掻き口説いてみたかった。胸にすがって思うさま泣いてみたかった。

(三)お七と吉三の媒曳

浄瑠璃や歌舞伎においては、お七と吉三の媒曳の手引をしたのは、下女のお杉ということになっている。お寺から新築の我が家へ無理々々引き戻されたお七は、今はもう花を見ても、鳥の啼声を聞いてもウツウツとして楽しまず、愛人吉三のことで胸いっぱいであった。

そして、ひそかに吉三へ手紙を書くことを仕事とし、何かの口実を求めて吉祥寺へ行くことばかりを考えていた。

齋米の中へお七は文を入れ　（一六六・23）

楽しみにお七仏の日を数へ

前表さ吉さままいるこがるゝ身　（一〇六・5）

この吉三に焦れる心こそ、やがて我が身を火に焦す前兆であった。このように吉三を慕うお七のことを、紀海音はその『八百屋お七』上之巻の初めの方に、

「縁は可笑しや仮初の、過ぎし火難に此の寺へ、親子主従厄介の、内のもや〳〵気も付かず、普請も出来て鴛鴦の、雌雄つれなき水離れ、立っても居てもあられねば、せめ

てお顔を拝みにと、親の跡追ふ寺参り…」と記している。

水晶のなま長いのをお七持ち　（七〇・19）

―前句は「うつりこそすれ〳〵」

長い数珠、特に房の長いのは、日蓮宗のそれの特徴であったように記憶しているが、この長い水晶の数珠がお七の振袖などによく映発する。すなわち、よく似合うという意味であろう。

折角、下女のお杉に導かれて、吉祥寺へと小姓の吉三を訪ねて行っても、二人の秘密をよく知っている新発意の辨長をはじめ、大分嫉妬気味の小僧共もいるのだから、

何用だ吉三は留守と毒づかれ

というような目に合う不首尾のこともあり、一方、吉三とて若い坊主共に、

弁長は吉三に逢へばだゞを言い　（宝暦十二・信1）

わったなと所化衆に吉三なぶられる　（明和三・櫻）

などと、相愛の二人も、この手合にかかっては散々である。

「わる」というのは「新鉢を割る」などという、あの割るの意味で、お七の処女性を鉢に譬えてのことである。

このように色々と周囲から嫉妬されるようになると、二人も何とかして、人目につかない所で逢う算段をしなければならず、そうなると、先ず手近な寺の境内の卵塔場の藪蔭などが媾曳の場として選ばれることになろう。

色即是空と洒落たわけでもあるまいが、水も滴るような前髪姿の小姓と緋鹿子との密会に墓場の蔭とは、まことに大悟徹底した背景であろう。

らんとうは藪蚊が喰ふとお七言ふ　（七〇・17）

恋の濡れ場、殊に二人が口吸いなどしている時、お七の白い脛などが藪蚊に刺されたりしても、「貴方ちょっと待って」とも言えず、その時のお七の顔の深刻な表情が思い遣られる。

ラブシーンに藪蚊を登場させるなど、さすがは江戸川柳の藪睨み的観察で面白いではないか。それにしても、此の句が「いとしかりけり〳〵」の前句に附けられた附句であることを思うと、なかなか巧く附けられた句と言われよう。

さて、卵塔場では、藪蚊が二人の陶酔境に横槍を入れるので、藪蚊のいない所を捜さねばならない。又、二人の噂もだんだん高くなる。そして、お七の頻繁なお寺詣りも親にせかれるようになって来た。

両親は日蓮信者であるから、谷中の祖師堂詣りなら許されるであろうと、今度は此処を二人の逢う秘密の場所と決めたのであった。

袴腰お七たんのうして当てる　（末摘花四・12）

此処なら先ず安心で、若い二人は何事もたんのうし、満喫できるわけである。ただ、この堂中の出入りには人眼につかぬようにと心を配らなければならなかった。

祖師堂をまづお七が出、吉三が出　（柳樽拾遺九・9）

この祖師堂こそは、嘗ては、お七の父母が子を授かろうとして日参した所であり、お七が十一歳の時、御礼の額面を書いて献じた所であった。

お七知らずや。今や、火焙りの運命が、聖殿を汚した罰として刻々とその身辺に迫っていたことを。

〔注〕

(1)『柳多留』の原本では、八十二篇と八十三篇との丁数（何枚目かということ）は通し番号であります。

(2)『柳多留』の編序名・丁数は、一々何十何編というのは省略して、例えば「柳多留四編十七枚目」の場合は、単に（四・17）とするようにしました。

(3)引用句の中に、約廿年前の私の力ではその出所を突き留めることのできなかった若干句ありましたが、今後もうこの種の古句解説の原稿を書くことの全くないことを考慮して、削除することなく昔の原稿通り、出所不明のまま掲載致しました。

（つづく）

訂正　八月号38頁の「八百屋お七の実現」は「八百屋お七の実説」の誤りでした。

60年度路郎賞

春ざわざわ
一級河川まだ眠り

松原市　谷垣史好

谷垣史好　柳歴
昭和35年入院中の大阪府立羽曳野病院で川柳を知る。どんぐり川柳会に入会、川村好郎先生に師事
昭和43年12月　川柳塔社同人

恋やっと実りほうほう蛍来い　原　独仙
〈準推薦句〉
何を盛っても許してくれる白い皿　春城　年代
うちの酒が美味しいなどと言いはじめ　小出　智子
〈推薦句〉
春ざわざわ一級河川まだ眠り　谷垣　史好

橘高薫風

新しい軍歌でしょうか野球場　仁部　四郎
風景画湖底の村によく似てる　野田素身郎
木守柿二階の窓は受験生　西森　花村
魚にも鳥にもなれず海に佇つ　新家　完司
飢えていた頃に与えていた母乳　川端　柳子

路郎賞候補作品

正本水客

降り出して電光ニュースもそう告げる　林野　甦光
少し威張り過ぎてはいぬか鯛の骨　越村　枯梢
長靴を穿けば男を蹴りたがり　西森　花村
したいこと山積みにして寒い部屋　雑賀　美世
大波の打つ日よこころ海に似て　林　はつ絵
触れられたことではじまる桃の傷　八木　千代

路郎賞準優秀作第一席

薬玉を迂闊に割れば核になる

倉吉市　渡辺独歩

同第二席

春風に可愛い嘘の二つ三つ

西宮市　奥田みつ子

うちの酒が美味しいなどと言いはじめ　小出　智子
陶枕展賢者の夢と愚者の夢　前川千賀子
義理チョコを食べる会などいたさんか　安藤寿美子
医者探し試食するようにはいかぬ　本間満津子

〈推薦句〉

薬玉を迂闊に割れば核になる　渡辺　独歩

推薦のことば

昨年も現代を詠んだ作品を推したが、今年も候補句に現代の種々相を捉えた佳句を多く推した。四郎、素身郎、花村、柳子、満津子、独歩諸氏のうち、渡辺独歩氏の作品を推薦句に決定した。船の進水式などで派手に割られる薬玉は繁栄の象徴であるが、うかうかしていると人間の創り出した怪物に、人間が滅ぼされてしまう結果になりかねない。現代、なおざりにして置けぬ不安が、そこここに存在する。

黒川紫香

正面にあいつがいると眠くなる　清水　健司
女房が笑顔で俺を迎えたぞ　林　荒介
看護婦の動く風だけ生きている　有働　芳仙
国道を無事に渡って来た毛虫　高橋千万子
掃除婦のマスク決して笑わない　春城　年代
影法師あなたも齢をとりました　西山　幸
芸の無い鳥です軒の下が好き　小野　克枝

〈準推薦句〉

野良犬に好かれて困るマルチーズ　稲葉　冬葉
素うどんを底まで吸って達者なり　樫谷　寿馬

〈推薦句〉

春風に可愛い嘘の二つ三つ　奥田みつ子

野村太茂津

小さい嘘ついて二人に春がくる　内芝登志代
さり気ない言葉で怖いことを言う　石垣　花子
本人の前なら悪口言うがよい　内海　幸生
神様の数え唄なら知っている　堀端　三男
似合うかと言われ似合うと答えとく　松川　杜的
かぎろいし野辺で交わさん相聞歌　前川千賀子
舌出した女が傷の奥に居る　土居　耕花
何を盛っても許してくれる白い皿　春城　年代
清姫になる自信なら持っている　西山　幸

〈推薦句〉

すべて皆夢でありしかすみ草　谷垣　史好

西田柳宏子

すみません言える夫婦になりました　松岡　三吉
干し竿に二男一女が揺れている　片上　明水
どん底が思い出となる日を信じ　江城　修史
父が居る凧がやっぱりよく上り　越智　一水
寄せ書きのように寝ている子沢山　木村はじめ
箸持てばよいようにして妻は留守　岩井本蔭棒
背伸びなどよそう塩つぼ砂糖つぼ　西山　幸
思い切り鈴を鳴らして神を呼ぶ　寺沢みど里
三つとも無事に帰った弁当箱　松本　文子

〈推薦句〉

かるがると蟹太陽を持ち上げる　小砂　白汀

谷垣史好

縁あって川柳という伴侶と連れ添い、いつの間にか二十五年が過ぎた。飽きがきたり、惚れなおしたり、世の夫婦なら銀婚を迎えるこの年に、図らずも路郎賞をいただくことになり、いささかの気恥ずかしさと望外の喜びをかみしめている。牛の歩みであろうとも私は、私の道を歩くしかない。これからもそうありたいと思っている。

ありがとうございました。

60年度川柳塔賞

順番に咲いて散るなら事もなし

藤井寺市　赤木和子

赤木和子　柳歴
昭和五十七年より
川柳塔誌友
ふあうすと誌友

願い一途リンゴの皮を長くむく　永田　俊子

〈推薦句〉
寝ておれと叱るが何もしてくれず　今西　静子

川柳塔賞準優秀作第一席

寝ておれと叱るが何もしてくれず

大阪市　今西静子

同第二席

定年を待たずに定期券が切れ

山口県　高崎雀声

川柳塔賞候補作品

高杉鬼遊

じゅげむじゅげむと言うてるうちに　藤井　高子
暮れなずむ　寺田　裕美
先頭が転んで運が向いてくる　高杉　千歩
花の種千の想いを裏返す　赤木　和子
野に山に花ある限り愛すべし　樫谷　郁子
文化とは冷蔵庫にある猫のえさ　清水　康恵
私を時どき忘れる人がいる　古川美津枝
北枕しても浮世は暑おます
よい思案ないが飯だけ済ませおく　秋元　てる

小出智子

鍬杖に見る夕焼の美しさ　池田　半仙
鬼よりも貧しく生きて鬼になる　神平　狂虎
病院もポストも近き佗住居　小畑よし子
人工交配終わり恵みの雨が降る　福士　トキ
自画像にまた誰か来て髭を書き　田中　叶
晴耕雨読まだうぬぼれを持っており　森山　英子
一列に並べばみんな胸を張る　奥　礼子
お互いに手頃な相手だと思う　山川　克子

〈準推薦句〉

どの家も岩湧山が見えている　植村　喜代

〈推薦句〉

定年を待たずに定期券が切れ　高崎　雀声

谷垣史好

泣く時に泣いて女になってゆく　寺田　裕美

人間の分別悲し袋下げて　永田　俊子

虚と実の谷間で少し寝ておこう　藤井　高子

労働歌ズックの底にガムがつく　田中　叶

二賞雑感

西尾栞

一昨年、昨年の路郎賞、川柳塔賞は、女性軍にしてやられたが、今年は男性、女性と仲良く分け合うて、素晴しい佳句を推薦することが出来た。路郎賞の獲得者の谷垣史好さんは、ベテラン中のベテランで常に巻頭組の一人である。受賞は遅きに失したが、タイトルを持っておられても邪魔にならないだろう。

川柳塔賞の赤木和子さんは、本社例会に赤ちゃんを連れて出席されておられた記憶がある。その情熱の積み重ねが今日の受賞となったのであろう。おめでとう。

血縁の町ひっそりと宿の下駄　高杉　千歩

胡桃割る天地を神が砕くごと　塩田新一郎

とても器用に卵を割って淋しいよ　神平　狂虎

夫婦喧嘩に猫が逃げ犬がくる　土橋　蛍

つかぬことお尋ねします仏さま　赤木　和子

〈推薦句〉

長短をきそってみても猫のひげ　横山　為子

板尾岳人

一本の糸をたぐって亡母に逢う　山本　玉恵

バラ病んで自画像無常冬の蝶　高杉　千歩

みの虫の私語をだあれも聞き留めぬ　前川千賀子

耐える事知りつくしている紙人形　堀江　純子

終着の駅に夫婦の湖がある　鈴木　良征

ある記憶鶏がいて母がいる　田中　叶

どんじりの味方がくれる傷ぐすり　田中　晴子

別れ道コントが一つ落ちていた　舟渡　杏花

釘打ったとこから洩れてくる噂　福田　礼子

〈推薦句〉

誰よりもなだめ上手な古時計　清水　康恵

河内天笑

にんげんが大好きなので家を描く　高杉　千歩

ちょっといい話リズムを狂わせる　八木　芳水

このたびは川柳塔賞を受賞させて頂くこととなり心より御礼申し上げます。

偶然に出合った川柳が生活の一部となって六年。オシメとミルクを持っての句会出席の時期は過ぎましたが、まだまだご迷惑をおかけすることの多い私達を暖かく迎えて下さる地元川柳藤井寺の皆様には、いつも感謝致しております。なおこの日まで私を育てて下さいました多くの方々に御礼を申し上げると共に、引き続き御指導下さいますようお願い申し上げます。ありがとうございました。

赤木和子

ブレザーとブラウスを買うフルムーン　松本　一郎

何不足ないが酸素が足りません　岸野あやめ

めんめんと書き足す母のかな便り　吉川　寿美

思い切りサンマが焼けるマイホーム　児玉　歌子

面白いとこへは少し酔うて行く　野村　静雄

願い一途リンゴの皮を長くむく　永田　俊子

〈準推薦句〉

ほほ笑んでいるから怖い仏の眼　朝倉　大柏

〈推薦句〉

順番に咲いて散るなら事もなし　赤木　和子

黒川紫香選

尼崎市　福田礼子

波に乗ってからの男はよくしゃべり
手相には遊び過ぎだと書いてない
イソップを語り続ける窓の椅子
イラストの蝶が自由になりたがる
冷奴男同士の裏ばなし

大阪市　清水康恵

お芝居の中で私はよく笑う
そばに居るそれだけで良い夫婦箸
知恵の輪を持って行きますひとり旅
何事もなかったような朝の膳
秋の日を軽いジョークの靴のひも

大阪市　野村京子

人をさす指は自分にはね返る
身におぼえ泣いてあげたい人ひとり
勝ち負けはとても嫌いな童話本
視界ゼロ女の愛を売りそびれ
櫛の歯のこぼれ女に潮が引く

熊本市　宇野昭代

Uターン決心させた祭笛
当然のように庭石ど真中
このへんがお別れ時か花時計
はち切れんばかりに母の宅急便
オーバーペース疲れをさとられないように

鳥取県　土橋螢

暑かった日記に汗を落します
気が合えば日傘も相合傘になる
焼石に水の水打つ忙しさ
向日葵の大きな花の絵が画けた
性急な個性がいつも先まわり

西宮市　紀市郁栄

強い者同士で少しも気が抜けぬ
償いが下手できれいな手をしてる
そうめんを供えて独りの昼がある
妻の部屋に表彰状がかけてある
眠ってるうちに心を入れかえる

死後のことながが語る昼の月　八尾市　高杉千歩
饒舌がしばし途切れるカキ氷
花嫁を探しあぐねて秋めぐる
昏睡がつづき童女に還る姉
合掌の手からぬけ出し星になる　藤井寺市　赤木和子

この膝でお睡りなさい旅人よ
駅前の像にごくろうさまと言う
出口にも頭を下げる人が居る
目の前のものしか見えぬ人が病む
この坂を越えれば虹の立つきざし　富山市　舟渡杏花

昔恋しくときどき逆立ちしています
酎うまし医者の寝言を聞き流す
わらべ唄のリズムまんだら織り続け
エアメール丸い地球へ蝶となる
二度縫いもついにほつれるおとこ運　熊本県　高野宵草

朝顔が咲いた咲いたと起こされる
雑草引けば草も大地へ必死なり
炎天の立看板は草の中
ためらっている間も地球廻ってい
慣れるまで郷に従う寄付をする　熊本市　永田俊子

自信ない話は笑いでしめくくり
日傘開いてから女隊を見せず
シェーカーを振って裏側読んでいる
標的にならずにすんだ順不同
ファッションに負けてる方がふり返り　熊本県　大川幸子

幸せになれる嘘なら許される
ゴミになる前に役割果さねば
間をおけば別に苛立つ事もない
咲かす雨散らす雨あり灯をともす
駒の音だけはプロよへ父苦笑　尼崎市　田中晴子

出口までとにかくいい顔して帰る
お人好しの胸にも五分の虫が棲む
晴耕雨読おふくろの筆達者
大きめの机で未来の地図を描く
紫の雲に届かぬ縄ばしご　長岡京市　木本如洲

つじつまを合わすそろばん妻がもち
病院の廊下も金の要る話
罠のある影階段を降りてくる
嘘すこし交ぜて母への返事書く
自画像の作り笑いは卑怯です　吹田市　栗谷春子

さっきからぼやきつづけている機械
蔦のセンスみんな斜めに這い上がり
この足がうっとうしいと蜘蛛のぐち

勝負あった向うの方から話しかけ
この日照り桔梗一輪咲いたきり　鳥取県　中原　みさ子

宝箱には少女の夢とサクラ貝
生涯を閉じる宴か蟬しぐれ
熱帯夜女の夢は地獄かも
線香花火へ私の死を思う
ステンドグラスに女の恋は揺れ　名古屋市　藤井　高子

秋風が私の泣き黒子をあやす
余命表へ笑い上戸がふと黙る
紙コップに明日を隠して酔うている
追伸に旨く小骨が抜いてある
閻魔はんはよう順番を間違える　高槻市　笠嶋　恵美子

待つことに慣れて金魚の昼寝かな
思わぬ方へ波紋広がる軽い嘘
こころまで変えてはいないサングラス
子の帰省汗のにおいも男らし
星くずの一つとなりて秋の天　熊本市　黒田　緑

跳び越えるはずみに力む水溜り
本閉じる前に小虫を吹きとばす
何となく好き近寄ってみたいだけ
うつつから夢へひらひら蝶の舞い

星を見よつよく光ってくれるから　鳥取県　中原　汲香

沸騰点に来て菩薩眼を開ける
親ばなれしてもおふくろ離せない
慧星を待つ少年の眼が光る　倉吉市　淡路　ゆり子

ひまわりは知る太陽からのメッセージ
死に態をもがいてならぬ爪を切る
自画像に一刷毛愛の彩を溶く
零ばかり積んで楢山行きの貨車　兵庫県　脇田　米朝

見映えせぬ男黙って貯めている
古里の祭りに帰った酢の香り
夢持たぬ男の明日があやぶまれ
傾ける傘に昔の傷がある　岡山県　伏見　すみれ

倖せの入る隙間を開けておき
浅はかな計画だった泥の舟
延び過ぎた寿命計画たて直し
ガタガタの自転車父サンだと分り　吹田市　西岡　豊

かき氷一匙ごとに涼を呼ぶ
長老のひとみに潜む強い芯
一ランクさげて和むとよく弾む
動揺を見透かれまいとタバコ吸う

伊丹市　山崎君子

風吹いてそっとささやく秋の声
鍵穴をやっと探した午前様
走ってはならない女と走ってる
あの人ともしも飲めたら炎えましょう

滋賀県　久保和友

曳船がビジネスホテルを朝にする
カプセルホテルで六十歳の篭の鳥
もう一本つけて広島弁をきく
比翼塚白い衣の蟬を抱く

米子市　茂理高代

野仏も虫のささやき聞く夜長
秋のばら触れた途端に血がにじむ
何事もなかったように虹は消え
不発弾抱いているよな友に会う

東予市　小山悠泉

霧晴れて拡がって行く海の視野
他人には見せぬ夫婦の隙間風
風車風に任せてあるリズム
無精髭そって再起の靴をはく

鳥取県　さえきやえ

ひっそりと終の住みかを山に置く
七人の小人のための木は売らぬ
つかんだ虹をそっと小皿へ盛ってみる
ひまわりが八方美人で気にかかる

滋賀県　安田志津

流れ星ああ思い出が又消える
さても見事な絞り模様の夏の空
喜びも悲しみも又菊の花
八月の湖にこだわり捨てにゆく

吹田市　茂見よ志子

道掃けば見知らぬ人に会釈され
遠目には帽子が若く見せている
大金を払った割に歯の不調
領収証歯科医すんなり書いてくれ

京都市　松川芳子

婦長さんにらみ利かしているベッド
例えばの話で一本釘を刺す
翔んでみてやっぱり蛙の子は蛙
手土産はおばあさんにと差し出され

尼崎市　丹下玉子

愛に飢え気まぐれ天使待っている
涅槃への道しるべと見る北の窓
詩人から貰うメルヘンの世界
花時計待ちぼうけを慰める

米子市　光井玲子

動かない空気に焦る置時計
夕焼の海に預けた願いごと
息切れをしながら廻る夫婦独楽
陽が沈みひまわり本心とりもどす

西宮市　松本一郎

悪友が菓子折さげてやって来た
どの部屋も妻の心が活けてある
自分史を書いて還らぬ悔いばかり
妻いない一週間は長かった

尼崎市　児玉歌子

面倒が嫌いで知恵を隠してる
無理をせぬようにと結ぶ嫁のペン
風鈴が言葉一つを和らげる
セールスへ疑心暗鬼の眼が光る

鳥取県　羽津川公乃

めでたい日無口な父の黒田節
飼主は三日坊主の金魚鉢
ああ人生兎小屋でもペット飼い
うっかりと妻の似顔に髭を描き

守口市　森川まさお

夏の朝和尚は殊の外機嫌
曽根崎で夏手袋のひとと遇い
七三に空を見ている雨蛙
寝姿はふて寝の如き子の昼寝

新潟県　高野不二

赤字型の人とカードに見抜かれる
金で解決してサラ金に悩まされ
案山子なら安心雀来て止る
セールスへ断り文句が通じない

尼崎市　吉永伊三郎

マンションの灯りどこかで不貞寝する
世渡りの下手な男に秋がくる
デジタルに馴染めぬ明治の腹時計
とげの無いうまい話が胃に刺さり

羽曳野市　田中隆二

無駄使いしない財布を母が持つ
風鈴の音に合わせる虫の声
本棚にずらり並んだ愛の本
鈍行のペース崩さぬ父の靴

尼崎市　鈴木良征

言いわけが下手でワープロ欲しくなる
派手好きな亡母の遺した猫目石
玉ぐし料欲しがる神がいて困る
アイシャドー落した素顔母の顔

西宮市　待田麻黄

新茶摘む喜び匂う赤襷
茶柱が立って一日安堵感
畦道の芹摘む母の後に添い
四国路を大師と二人づれの笠

岡山県　後安ふさえ

折々の花にひかれて遊歩道
団体の旅は忙しいスケジュール
チャップリンの靴から生れる人間味
マイカーでかき入れ時の盆の僧

京都市　森川春子

遠泳の満足感の髪をふく
町中で選手を送る旗がゆれ
入道雲トクサにとまる赤とんぼ
いわな釣れおどろきの声谷を越え

唐津市　浜本ちよ

冷え切った麦茶があって熱いお茶
早朝散歩心得顔に猫も来る
踏み台でかぼちゃの交配やっとすみ
踏みつけにされてたんぽぽ這うて咲く

弘前市　田中叶

結論は出ている栓が抜いてある
お開きにして帰したい人がいる
返事せぬ妻とその上この暑さ
親日派家族は国に残して来

豊中市　小畑よし子

おしゃべりの弾む雀に起こされる
雨宿り虫の好かない顔といる
我が家だけポツンと明かり消えている
お若いと言われて買った派手な服

羽曳野市　吉川寿美

融通のつかない老母の鯨尺
つんぼ桟敷がいっそ気楽な坐りだこ
思い上りの鼻が上むく夏帽子
人妻の謎を聞いてる遠花火

吹田市　井上照子

雷がこわくて受話機取り上げる
逝き給う厳しい父の名を呼びぬ
一番星義妹の涙思い出す
ライバルの瞳が澄んで称え合う

鳥取県　福田あや子

いつの日か船主が西へ向きたがる
ひまわりの複眼で見たきのこ雲
混乱の世に地球儀がきしみだす
日航機のアクシデントに神不在

羽曳野市　麻野幽玄

かわせみが来て釣しばし中断す
デジタル時計に何故か馴染めない私
一房のブドーにもある色のむら
ジョギングの決った所で息が切れ

守口市　結城君子

表札はなく夏草の繁るまま
手を拡げ総てを許している案山子
二十七回忌みんなワチャワチャ亡母のこと
好感を持たれて赤とんぼの驕り

岡山県　山本玉恵

紫陽花の一つ一つに雨の幸
夏帽子ゆれて女の瞳がぬれる
風化した苦労へ姑のまるい背
辻地蔵が別れのキッス見てござる

和歌山市　桜井千秀

窓しめてカーテンしめて人を恋い
手のうちを見破り駒が動かせず
草臥れた帯できつうは締められぬ
痩身法顔から痩せると書いてない

大阪市　古川美津枝

髪染めてたしなむ涼や今日サンデー
郷土色案内忘れぬ甲子園
ゆうれいの青い色気に涼をとる
生きている限り恋とは素敵だな

大阪市　山田妙子

日航機誤報を願う事故現場
バーゲンと見ると財布が騒ぎ出す
てのひらで夫のエゴを丸めてる
遠花火幼き友を連れて来る

兵庫県　東浦砥代

かごめの輪鍵っ子一人暮れ残る
ベランダで摘んだみどりが皿にのる
愛知ってから苦しい嘘が増え

旭川市　朝倉大柏

親の敷くレールに乗らぬ子が出世
妻の留守水道ポトリ洩れたまま
後続はあると信じている先頭

新発田市　上鈴木春枝

セールスへ愛想のない主婦になり
確認をせずに受話器は喋り出し
減量の成果を試したい水着

富田林市　松本今日子

追いかけて追いかけられて日が終る
宴果ててそれからきいた海のうた
風一杯そんな船出を待っている

高槻市　河瀬芳子

プードルにリボンをつけて子なし妻
孫の目に映る小さなゴミとても
抽出しに老後の構図かくし持ち

青森県　福士トキ

古里の山を仰げば津軽三味
三日三晩降って恵みも疎まれる
最果ての地へ来てカモメと語り合う

倉吉市　広本文子

ペンネーム逢いたい人がひとりいる
夏帯を解けば失せゆく絵空事
ひまわりの下で貧乏くじを引く

大阪市　亀井円女

みじか世を恨みもせいで蟬しぐれ
老夫婦お茶うけに出る古い嘘
郷愁にいつも揺れてる赤風船

米子市　川上より子

十二時を誰の時計も打った通夜
列車乗り替えて聞く雨の音

琴の音がますます冴える露の宿　岡山県　松本元江

合言葉忘れて秋の風に合う
追憶を忘れさせない風の音
今朝も逢う同じ所で同じ人　尼崎市　尾宮弘治

ライバルの母子に出会う展示会
一枚のガラスが悲し甲虫
昨日から課長の机向きを変え　出雲市　小玉満江

玉手箱明けておらぬに白髪ふえ
うれしいな今日のおにぎりまあるいな
首すじの汗に目ざめた熱帯夜　大阪市　井上白峰

大川に祭の彩がこだまして
暑い筈マネキンまでもビキニ着る
ミニ着たさテニスクラブに入会し　堺市　小西小雪

早立ちの客騒がしい登山宿
涼しさを呉れた夜店のつりしのぶ
夕焼けの瀬戸の小島へ立ち尽くす　岡山県　小林妻子

年金の通知も一度読んでおく
風向きを見て賛成はせぬつもり
自転車にしなと月賦の払えぬ子　大阪市　北川長

隣町お地蔵さんは皆馴染
知らぬ子にお帰りという通学路
盆おどりすんでいつもの町になり　米子市　小村てい子

うっとりとさせる名月ひとりもの
夕やみの空気が私をそっと抱く
二の足を踏んだ話がころげ出す　河内長野市　大西文次

恐妻に乾杯をする恐妻家
神様もギャルの御輿に乗りたがり
面白い方とマダムに言われてる　西宮市　秋元てる

何時見ても笑いの芯にいる娘
一つだけの餅に手を出すタイミング
このての顔に弱い兄弟　弘前市　真喜内實

僕一人居るとゴキブリ見にござる
シーソーにゆられながらう夫婦です
人のことほめてたのしくなりました　大阪市　稲本凡子

押入れが五つあるのに狭く住み
合格へ未来図がかけ廻る
赤いシャツ着て過去は振りむかず　今治市　月原つくし

記憶力良くて噂を消さぬ風
その訳は聞かずに友が遠ざかる
おはじきを手にメルヘンのきれい過ぎ
貝塚市　池田　寿美子

ファッションを意識している散歩道
泣き笑いテレビと話している一人
訪ね度い季節はずれのかくれ里
山口県　高崎　雀声

孫のため庭木の蟬を鳴かせおく
戦争で行ったグアムへ孫旅行
残ってる名刺を捨てる退職日
愛媛県　八塚　三五島

妻病んで氷を探す冷蔵庫
哀しい育ち作り笑いがうまくなり
エスカレーターどうぞどうぞと上へ行く
竹原市　石原　淑子

神話がみえる満天の星に酔う
何となし顔だちまでも似て夫婦
あたふたとなにもないまま陽が沈む
兵庫県　森脇　和子

股のぞき橋立だから覗けます
あきらめた日から日記は白いまま
汗かいてかいて小さなうそをつく
鳥取県　土橋　はるお

勿体ない一番前で法話聞く

帰省して開口一番水一杯
トクホンの匂いの集まる集会所
西宮市　飯森　泰世

南瓜は買ったがキャベツ見るばかり
親の気も知らず単車で走り行く
お茶を断ち母の寝顔をみるばかり
堺市　山本　半銭

盆三日お茶にもたれた仏さま
灰皿を一杯にして反古ばかり
カレンダー剝いでひと月過去にする
静岡市　渥美　弧舟

煙草の火借りて話が弾む旅
赤ちょうちんホラ吹く客の指定席
蟬脱皮ドラマの様に孫と見る
島根県　森山　英子

役付けて単身赴任もさせられる
立秋へ積乱雲がおとろえず
若づくりうしろ姿に隙があり
豊中市　辻川　慶子

山頂でひと味違う缶ビール
二人なら歩いて見たい星月夜
笑ってる遺影の前で愚痴を言い
兵庫県　奥野　テル

趣味持てば夜長も楽し眼鏡拭く
指笛がとても上手な無口な子

肩書きをはずし気軽に背広着る　竹原市　岩本笑子

たわむれる波へ十一文の足を出し
スイカ割り一巡してから切り分ける
これからが坂道親として歩む　高槻市　芦田静江

熱帯夜星に念じて兄見舞う
ボテジャコでよかった命救われる
夾竹桃花の木蔭で孫昼寝　尼崎市　佐藤美代子

九ちゃんが死んだと傘寿の涙
詩日記何か事情があるらしい
処方箋通り子は快復しない　鳥取県　津村八重子

ボランティア老いの呟き手話で説き
庭石も客出迎える水もらい
ほどほどに節度まもって老いを生き　大阪市　新井川青舟

泡のないビールに似てる正義感
女闘士おんなに戻る紅をひき
宴会を赤い顔してとりしきり　大阪市　野村八重

連れて居るチンと飼主瓜二つ
ふる里のうたが聞える旅の宿
茶柱だ今日のデートはVサイン　大阪市　桝本蕗児

追伸に本音が顔を出している
蝶とんぼ寄っておいでと地蔵さん
野仏をなでりゃぬくもりほんのりと　尼崎市　木下義嗣

波高い津軽の海に通い船
吊橋を渡れば妻の里がある
港町祭りに帰る大漁旗　尼崎市　的場十四郎

白球を追って八月あとわずか
悪かったすなおに言って打ちとける
幸せは花と緑の四季に生き　唐津市　相葉あき

新茶よりプロポーションとウーロン茶
夏休みプランは先に出来ていた
釣り糸の多くて魚餌につかず　愛媛県　西山えつ美

生存者信じられない空の事故
手離した土地へでっかいビルが建ち
手頃でも外材どこかもの足りず　大阪市　渡部さと美

投げ返す拾ったボールへ力こぶ
姿勢よい娘の親をふと思う
積みあげてほんまの秋売る果物店　八尾市　松下蕉露

便利屋で重宝生涯庶務勤め
そんなことあったかいなととぼけられ
金賞も銀賞もない菊花展

堺市　宮本かりん

地平線空と握手が出来そうな
扇風機一人占めする風呂上り
神様の思召かな夫といる

兵庫県　野々口悠也

揺れ椅子を囲む家族にある和み
翔んでゆく蝶を憎まず花は枯れ
嗜みもないのに茶席へ誘われて

鳥取県　灘尾民子

内緒ばなしに勝手つんぼの耳動く
家計簿のピンチは里の母に乞う
法を説く僧が山門通せんぼ

西宮市　山田喜代子

ペロペロと犬の愛情顔で受け
一ときの暑さ忘れて墓掃除
旅人の浴衣に軽く宿の下駄

島根県　堀江百代

心もちゆとりが出来て旅に出る
タイミング合ってまとまる旅話
一刻の心和らぐ墓参り

寝屋川市　立床晴風

草の蔓線路跨いで自殺する
禰宜と巫女欠伸を交す神無月
箱庭に追い詰められた痩せ蛙

泉南市　坂根流水

熱帯夜独り者です裸です
憎い奴江川であるがにくめない
神ほとけ墜落事故から少女救う

兵庫県　円増貞子

寝そびれて蚊の鳴き声に気がとがり
出稼ぎの浴衣溶けこむ踊りの輪
言う事はそれだけですかと蚊を叩く

茨木市　堀良江

あやしてた隣の子バイバイと降り
ベソかいて帰り金魚と遊んでる
西日射す壁にあり会葬御礼

鳥取県　乾喜与志

拍手沸くいきりにダルマ目を開き
祖父の名をもらい長寿にあやかろう
盆の朝鬼も仏の顔をする

弘前市　斎藤劦

西瓜切り隅の方だけ食べている
犬死んで猫と同じの墓に入れ
掘り上げた石に汗粒二つ三つ

出雲市　小白金房子

鎌握る暑さに負けぬ母の汗
ぶどう箱今年も貰う里の味

手におえぬ孫の作品賞めてやる　島根県　喜島ノブ

転院で触れ合う人も皆変り
七夕に星の数程願い掛け
ほがらかに口笛を吹く身障者　広島県　田村新造

生き造り大漁舟に乗って出る
女房どの連れて来たけど邪魔になる
孫の名をつけた柿の木実が一つ　島根県　園山世似

稚貝には情をかけて汐干狩
草臥れた鉢を憩わす水をやり
セミの殻草の葉がっちり握りしめ　唐津市　筒井朴竜

レーガンとて大衆アピールするジョーク
世知辛い世にも平和な風見鶏
汗流す庶民は湯屋で不満ぶち　広島市　望月はるひこ

予想外の石は打たないコンピューター
申告へ政治わずかな控除額
追い越せぬ人を避けてる廻り道　岡山市　河野青銅

蝸牛角を出すから詩になる
冬越しの風鈴が鳴る過疎の家
納税へ扶養家族にならぬ猫　唐津市　山口高明

宣誓の瞳に映える空の蒼
ささやかな庭へ隣の猫の糞
干潟からおいでおいでと蟹招く　八尾市　鷲見章

仁王門涼しいつもの乳母車
てらてらと運河真夏の陽を弾き
アメリカ村宇治金時もあるメニュー　豊中市　一瀬福一

食欲を叱られている恢復期
カラフルなカッパの家が建つ海辺
ポンポンと障子を叩く火取虫　西宮市　木村貴代子

情熱をかけたピアノが邪魔になり
あめ一つ溶ける間の立ち話　島根県　小田川智重子

見直せばカマキリ可愛い顔してる
女でも一人になれば横になる　益田市　里本たかし

鉢に敷く小石が無数に有る川原
相撲が終りつまらないと友が訪う　高知県　小澤幸泉

せまいへや一つひとつに区切りつけ
片づけたへやをしみじみながめ入る　橿原市　西本保夫

夫婦仲心のビデオに撮っておく
新宮市　田中国彰

正直に列を乱さぬ中に居る
デモ行進前のほうだけにぎやかに
三文判押せば書類が生きて来る
大阪市　北田秀月

大衆の酒場の酒は気がかるい
植木屋さん一服しては木をながめ
大阪市　川原章久

城空けた筈が横槍残ってる
無駄骨と知っても駅の迎え傘
島根県　高尾よし子

人呑んだ海とも見えぬ波のかがやき
花鋏心の迷い裁ちたくて
島根県　菅田勝子

母さんに借金したのは返さない
可愛がりすぎた息子が帰らない
大阪市　田渕晴子

熱い茶もよしクーラーの利いた部屋
大衆の中に小さな拒否もあり
岡山県　牧野秀香

趣味をもつ人生豊かに老いてゆく
ここからは越してはならぬ線を引き
米子市　金山夕子

石蹴りの中に流れる笛の音
富田林市　田原久子

せっかくの内緒の旅が食あたり
窓あけて明日の風を風にきく
大阪市　安西カネ

何時の日も騙され上手賢夫人
片蔭で犬も寝ている昼さがり
大阪市　神崎貴代美

うなり節今日も聞こえる大衆浴場
入れ方でデリケートなる茶のかおり
大阪市　山本炉斉

窓明けて風鈴にまず朝の風
川口湖一服の朝お茶の味
大阪市　末永芙久枝

お医者さんに内緒で食べる回復期
季節の茶心豊かに楽しんで
岡山県　戸田種子

故郷の海が私を呼ぶ季節
浮き沈みある人生をあきらめる
大阪市　北脇清治

娘には内緒と言ってばれている
老妻は茶殻をまいて掃除する
堺市　江辺天鳳

飛行機はもう乗るまいと思う朝
ほっとした気と淋しさで盆終る

和歌山県　北山凡太

ジョギングの声弾んでる朝の土手
本当は嘘の話と小声なり　茨木市　井上盛雄

酒マイク職場野郎の夜は更ける
網棚の虫かごも客夏の旅　大阪市　今西静子

飼主に似てこの犬もおっちょこちょい
こんな筈でない記憶へひく辞典　大阪市　朝田晃世

あの方は果物のような魅力もち
ティータイムいつものメンバー花が咲く　指宿市　渡辺伊津志

生水を飲める国力うらやまれ
窮屈だから小細工がしたくなり　唐津市　米倉彩女

夫と居てうるさいなと思う小半日
家ダニのテレビそれからかゆくなり　泉佐野市　大工静子

散歩さすペット時間厳守なり
三分の一の若さへ口が負け　米子市　宮本佳女男

孫たちの塾になってる祖父の部屋
生き甲斐に孫と勉強出来る幸　呉市　蔵重成人

反対の妻が入知恵してくれる
都会には虹がなかったUターン　八尾市　椎尾公子

郵便の見なれぬ文字に血がさわぐ
実印を押した後には酒が出る　和歌山県　森三枝子

風鈴もなりをひそめている日照り
口づけのチャンスにブザーなりひびき　岡山県　千原理恵

仲裁と言う真ん中で肩凝らす
上客の扱いされてかしこまる　河内長野市　植村喜代

夜の川真暗がりの音を立て
辛い日は辛いことが降って来る　鳥取県　西川和子

南風破れトタンが音立てる
手作りの花に埋もれてする暮し　大阪市　横山為子

雨洩りがこの家の歴史知りつくし
夏休み山の向うの海が好き　堺市　矢倉五月

恐い物一つずつ減る年を取る
ゴルフの日だけは夏ばて口にせず　藤井寺市　菊地繁男

行水の月としばらく遊ぶ子ら

海釣りへ期待されない竿を持つ　大和郡山市　岡田寿美礼

喜寿すぎて童心に返り夢の旅

ほおずき市赤い頬よせ人恋うて　奈良県　和田萬里

汗流しきつねうどんに舌づつみ

夕立は狂気の如く通り抜け　愛媛県　石手武

褌で祭り男を取り戻す

カラオケに客を預ける夜の蝶　岡山県　後安江山

人の気も心も知らず村すずめ

亡くなってたまにはほしい腕枕　高知市　北川竹萌

私の着ることのない宇宙服

波のりにかけるロマンの青い海　大阪市　山脇正之

真夏日に寝具干し終え西瓜切る

吾家にも不快指数の余波があり　大阪市　堀口欣一

上まむし食べながら終戦の日を憶う

生駒山から朝涼の風が来る　大阪市　喜多佐津乃

無花果が揃って笑う垣根越し

趣味一つ心の隙間埋めてくれ　岡山県　池田半仙

甚平が一番よいという盛夏

月だけが見てる河原の月見草　八戸市　島田昭治

考えごと夢中になって涎する

毎日の米があるから倖せさ　守口市　若林市郎

大衆食堂ふところ具合気にしない

茶柱に今日の運を賭けて見る　大阪市　松岡久留美

果物が好きで老いても美しい

桜餅香りも色も娘のよう　岡山県　杉本伊久栄

丸い背亡母に良く似た齢になり

玉の汗日陰が欲しいゲートボール　大阪市　服部頼一

虎キチが酒屋の付けに目を回し

掃除機が茶殻の用途奪い取る　岡山県　富坂志重

束の間の晴間をねらい靴を干し

夏休み泣き声笑い声しかる声　新宮市　山田平和

初恋の人も還暦すぎた筈

亀さんに緊急事態通じない　吹田市　山田里子

二日酔い熱い味噌汁だけは飲む
地滑りのホームの屋根に白い鳩　岡山市　中嶋千恵子

塩壺にやり手の亡母の顔がある
離婚して翔んでる女にある魅力　大阪市　富岡温子

ラジオ体操子に引っぱられ皆勤賞
ボケ防止言う程年はとっていぬ　大阪市　高森文子

茶の香り母の茶摘みを思い出し
街路樹も雨はまだかと空仰ぐ　兵庫県　平和茂一郎

山村の馳走漬物で茶をよばれ
ナイターを見ている子等と喧嘩する　和歌山市　三谷周三

夏やせが羨しいとビール腹
台湾の鰻で日本精が出る　島根県　岩田三和

山頂は一つ登るは千の道
つまずいたついでに一服して立とう　大阪市　田中節子

ラジオ体操孫が居るから続いてる
爽涼の朝一軒が焼け落ちし　兵庫県　伊沢午郎

高級茶よばれた夜が眠られず

大衆誌列車の中で拾い読み　堺市　本田草生

ファッションという名で稼ぐ際もの屋
虚しさは不義理で積んだ銭の山　新宮市　船越正

君が代を校歌と思った時代もあり
娘が寮に帰ればつくつくぼうし鳴き　大阪市　権安達一郎

病院の窓より見ゆる大花火
茶と言えば宇治静岡と思ってた　兵庫県　伊沢敏子

ゲートボール練習練習で老いさかん
新茶が届き母に不幸を詫びて飲む　堺市　富松潔

腕白な子も手を合わす神だのみ
風鈴が騒ぎ仮寝の夢破れ　大阪市　平井露芳

草魂も草が枯れては投げられず
電話帳もしもし金は要りませんか　枚方市　二宮摂子

ジュニアの部

気分だけ海のつもりでプールでも
宿題でどっさり重いわが机　枚方市　二宮正彦

父さんのせなかながしてハイおだちん
はっぴきてまつりがそこにきているぞ

愛染帖

橘高薫風選

西宮市　草刈堕駄
笑いぐせお面のように外せない
酒やめて真人間とは笑止なり
操りの糸の加減の泣き笑い

青森市　工藤甲吉
ダイ・インへ核廃絶の鐘は鳴る
ねぶた囃子志功霊位も乱舞せん

笠岡市　木山遠二
寝たきりへ坐らずに物言うて去に
猛暑今日孫から冷たいもの届く

島根県　小砂白汀
死刑囚のコップも水を充たされる
夏草のしつこさずしりと妻が病み

岡山県　土居耕花
一掛ける一の掛け算して暮らし
拾円を拾って電話かけてみる

和歌山市　神平狂虎
切り口を見た時負けたなと思う
クッションは男の椅子に似合わない

米子市　八木千代
少女たりし少年たりし秋の草
どうしてもうす墨でかく椿の絵

高槻市　笠嶋恵美子
乳くさき無花果なれば子を思い
渋柿の時節を待てというごとし

名古屋市　越村枯梢
壁画の中に一人いるのは待ちぼうけ
河童の皿に秋は多彩な草木染

富田林市　岩田美代
夕やけに染まれる生をいとおしむ
透明なひと刻に坐す車椅子

羽曳野市　田中隆二
勲章の代りに被爆手帖くれ
夏草に埋れてならぬ原爆忌

大阪市　小出智子
こんなわたしに十五夜の月満ちてくる
三日程あたためてから出す手紙

吹田市　栗谷春子
物言わぬ木々の手入れは先にする
瓔珞がみんな揺れてる山の寺

寝屋川市　岸野あやめ
聞き役にされて見ている壜の底
情熱の女と呼ばれ子を生さず

鳥取県　新家完司
賢人に仕えて星の動き知る
契約のしるし大きな虹が立つ

羽曳野市　吉川寿美
丹念に亡姑の姿で梅を干す
大根の白さに嘘はつけませぬ

吹田市　後藤火鳥
紹介の宿親切な田舎膳
文明は一夜眠らず街白む

米子市　青戸田鶴
燃えきって影絵になったひまわりだ

弘前市　田中叶
古い恋電車の通る下を行く

高知県　赤川菊野
演説を背中に聞いてネギを買う

藤井寺市　赤木和子
狼になりたや満月の夜は

島根県　堀江正朗
一雨もこず焦げそうな白い杖

島根県　堀江芳子
老母逝って七日七日は駆け足に

唐津市　浜本義美
番号が幅をきかせる世の移り

米子市　菅井とも子
貧相な皿が卑弥呼を知っている

島根県　松本文子
無精ヒゲ亡夫は何処で剃るのやら

山口県　高崎雀声
天下りその顔だけが欲しいから

富田林市　藤田泰子
追い越してゆく若者に道譲る

大阪市　亀井円女
狐とたぬき互いに尻尾はつかんでる

西宮市　奥田みつ子
少年の目は魚眼レンズか

尼崎市　春城武庫坊
本塁の手前に大きい落し穴

米子市　光井玲子
その日からひょっとこになる女面

寝屋川市　平松かすみ

ゆったりの間取りゆったりしておれず　今治市　月原宵明

話題見つからず檸檬浮いている　守口市　結城君子

ひまわりが大好きだった娘の日　弘前市　波多野五楽庵

輪廻転生もしや今朝鳴く鶯に　米子市　林瑞枝

友だちの魔術を暫し見ていよう　茨木市　井上盛雄

牧場のクマ遊んでる稼いでる　鳥取市　さえきやえ

父と子の対話みごとな虹が見え　浜田市　佐々木裕

上げ底の女が居ますハイヒール　米子市　林荒介

戸を開ける時にも兄は身構える　伊丹市　樫谷寿馬

遭難者名簿カシタニを凝視する　和歌山市　西山幸

茶番劇の順を間違えてはならぬ　和泉市　岡井やすお

票田をちらちら眺め靖国へ　高槻市　河瀬芳子

風鈴を年中鳴らせてひとり者　松江市　竹内寿美子

千代紙の筒で貴方を見ています　和泉市　西岡洛酔

水中花子に縁の無い妻と居る　寝屋川市　宮尾あいき

キッスして私を起こしてくれる猫　八尾市　松下蕉露

嬰児抱いて今年踊りの輪に入らず　小松市　小森靖江

散りぎわの花がおとこを狂わせる　尼崎市　伊藤春子

生きている証拠の爪を丸くつむ　今治市　野村京子

銀の匙磨き女の薄い幸　高知県　曽我部裕

望郷のじっとひぐらし聞いている　西条市　片上明水

本堂の縁は一日風が吹き　堺市　山本半銭

満願の夜は神木もざわめいて　指宿市　渡辺伊津志

一壺に納め愛憎風化する　岡山県　清水悠貴女

数え唄十でやさしくなる峠　高槻市　田崎あき子

椰子流る海の国境線を越え　静岡市　渥美弧舟

蟬脱皮ドラマの様に孫と見る　兵庫県　野々口悠也

嫁が吹く笛を謙虚に老いも聞く　岸和田市　武俊春

勇退の年で中流流される　大阪市　朝倉利義

病む妻が他人に見せる見栄笑い　米子市　金山夕子

頬杖に冬の話を矯めておく　堺市　矢倉五月

敵ながらあっぱれ余韻残し去る　兵庫県　脇田米朝

僧兵は今も謀反が好きである　守口市　森川まさお

造成の街でたべもの屋を探し　益田市　里本たかし

中流の意識で白い花が濡れ　名古屋市　藤井高子

猫が見てて呉れるが証人にはなれぬ　堺市　高橋千万子

案外なウソが通った日の不安　吹田市　西岡豊

一滴の雫肌さす鐘乳洞　新発田市　上鈴木春枝

歯の数にあわせコトコト離乳食　京都市　松川杜的

我が家にも窓際という席がある　岸和田市　芳地狸村

どこからか祭ばやしの音合せ　宝塚市　丸山よし津

長い文書き終え心安らぎぬ　和歌山市　坂部紀久子

職業欄無職になった世帯主　八戸市　島田昭治

僕よりも倖せ薄き人も生き　西宮市　松本一郎

還暦を米寿の母に祝われる　京都市　森川春子

生と死と樹海を包む雲の影　岸和田市　古野ひで

それぞれが語り部になろう原爆碑

出雲市　坂垣夢酔
淡色に淡色を注ぎ恋生まる

米子市　茂理高代
みの虫よ視野を拡げに出ておいで

大阪市　川原章久
鉾が行く香り花背の笹粽

名古屋市　大林曲ん手
末席の顔へ仏が話し掛け

弘前市　真喜内實
ただいまに番犬らしゅう席かえる

鳥取県　土橋蛍
風光る少年の瞳にトンボいる

高槻市　笠松高子
満開の花散り山は元の青

出雲市　園山多賀子
紫を着て見るゆとり欲しい日に

唐津市　浜本ちよ
つぎ当ては見せずアップリケしています

唐津市　久保正敏
双方を立てる敬語がむずかしい

堺市　本田草生
山の宿ロビーで綴る旅日記

岡山県　川端柳子
戻れない若さを想う先を想う

唐津市　山口高明
籠城の書斉コソとも音がせず

唐津市　田口虹汀
風鈴を買いに行くのも二人連れ

島根県　木村はじめ
石蹴って生爪をはぐ反抗期

吹田市　井上照子

恋心知ってか童踊り好き

大阪市　古川美津枝
新盆のつとめおさおさまだ女房

唐津市　浜本久仁於
先生の水着眩しい夏季キャンプ

岡山県　福原悦子
抹茶たて心の満つる老夫婦

松原市　小池しげる
ゴキブリに身構えている居候

岸和田市　原さよ子
ママになる自覚かがとの低い靴

愛媛県　石手武
網戸から涼しい風の子守唄

豊中市　田中正坊
真紅の陽やがてオレンジ色の月

河内長野市　植村喜代
宿題が重なって来たアルバイト

広島県　田村新造
鈴蘭が咲いて北満思いだす

笑岡市　松本忠三
得手勝手神と仏のせいにする

橋本市　岸本木魚
ロボットに労災保険の日も来そう

寝屋川市　堀江光子
退職後今年も届くビールあり

西宮市　山片紀雄
荒れ庭にこおろぎが来てなぐさめる

大阪市　桝本露児
そよ風と太陽恋し水中花

大阪市　上江洲勝子
清掃婦軍手の甲でぬぐう汗

大田市　藤田軒太楼
提案は五十歩百歩の域を出ず

豊中市　額田明吉
手花火で孫賑やかに盆送る

豊中市　上田登志実
茶柱が立つと機嫌のよい姑

大阪市　渡部さと美
その上のぜいたく海が近ければ

和歌山県　南恵美子
何よりも優先させる孫の事

茅ヶ崎市　山上元孝
ロボットは運不運など気にしない

鞍馬にて　大阪市　山田妙子
清流も値段に這入って京料理

★

投句先　〒560　豊中市中桜塚三丁目13—15
橘高薫風宛（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課題　「走る」　選者　**森中恵美子**

締切　**10月10日**
（ハガキに三句以内）

投句先　大阪市東区馬場町3—43NHK
大阪放送局〝さわやか広場〟係

発表　10月27日（日）ラジオ第一放送
午前11時5分から

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

谷垣史好

字あまりをもてあそんでる梅雨の午後
岩田美代

正直言って最初は単純に読み過ごし、二度目にハタと胸をつかれた。作者はいま辛い闘病生活を強いられている。他人には言えぬ苦労のあと、漸く平安な日々をとり戻したと思えた矢先の病苦。ままならぬ世のさだめを、〝字あまり〟と、さりげなく表現した作者の心情を思うとき心が痛む。

ピンセット傷の深さに触れたがり
中川滋雀

優しさの裡にひそむ残酷さ。私にも無いとは言えない。それがむしろ人間性の本質かも知れぬ。私の旧作に「見てはならない虚無僧の顔」というのがある。

ロボットの許可をもらった夏期休暇
玉置重人

アメリカ映画「未来警察」には殺人ロボットが登場する。家事ロボットが或る日突然、家人を攻撃する。人間とロボットの関係が逆転するのは決して絵空事でないのかもしれない。

地蔵さん傍に座ると眠くなる
土居耕花

ちょうど豆秋句集「ふるさと」復刻版の編集を終えた時で、「地蔵尊犬殺されるのを見ておわし」の句を思い起した。世の移り変りを見尽し、歴史の中で風化した地蔵さんには穏やかな安らぎがある。作者はきっとタイムトンネルを通って懐しい夢を見ることだろう。

雪ふわり国境のない空がある
森田熊生

〝国境〟という言葉にロマンチックなイメージを持つのは、多分、日本が四面海に囲まれ国境がないからだろう。ヨーロッパでは、ワルシャワ条約機構軍とNATO軍が対峙する国境線に二万四千台の戦車が配備されている。この結構な祖国に改めて感謝しよう。

田に水を満たせば旅がしたくなる
中島正博

大事な仕事を一つ済ませた満足感と解放感。「田」「旅」と韻をふみ、軽ろやかなリズムで句も心も弾んでいる。

砂利船の闘志吃水すれすれに
羽原静歩

能力の限界ぎりぎりまで荷を積んで往来する砂利船。やがて迎える引退のその日まで、これが砂利船の生き方なのだ。古稀過ぎて、なお闘志衰えぬ作者らしい一句。

泣き笑い笑いの方が悲しくて
福本英子

そういえばあの江川投手の泣き顔というのを見たことがない。巨人のエースたるべき男が、今年は〝六回戦ボーイ〟〝百球肩〟と酷評され、大事な試合に幾度となくファンの期待を裏切ってきた。KOされてブラウン管に映し出される彼は、かすかな笑みを浮かべている。これも悲しい笑いである。

少しずつあなたに溶けてゆく砂糖
神平狂虎

狂虎さんとは堺の夜市川柳大会で初めて会い、言葉を交わした。その夜の印象そのままにナイーブな感覚の句。

孤独では溶ける他ないかき氷
松本ただし

こちらは「かき氷」。同じように溶けても幸せな砂糖と、淋しいかき氷と。両下五どちらも動かない。

風鈴よ今夜の風はふざけてる
松本はるみ

弱い者同士で遊ぶ甕の底
林荒介

表札は隠居の顔をしておらず
神夏磯道子

シュプレヒコールいい年をした男達
大原葉香

ステーキが美味いきっと優しい牛だった
樫谷寿馬

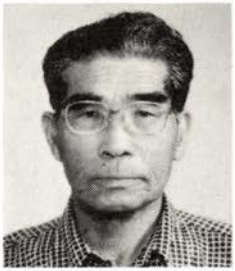
チョキばかり出さねばならぬ雨の指
波多野五楽庵

自選百句

直原七面山

遺産は臍の緒
薬もカラフル
才女の酒好き
自信が喋らせ
拗ねてた娘が媚び
打算で信仰
頓死を羨み
農家もパン食
話せば同病
僻みで片付け
逢曳へ磨く肌
石女の柔き肌
型紙に似た女
行間に匂う愛
唇が君を恋い
手話での饒舌
胎動へ弾む胸
晩年を母信じ
人前は夫立て
謝っておけと母
労りで癌と知り
効いて来た鼻薬
斛かく釈迦寝像
影見せぬ父の愛
過去隠す濃化粧

舵取りは妻任せ
髪黒く染めて恋
彼と来て旅豊か
口先で飾る過去
娘の恋を妬む母
殺してと火の女
正直に生きて貧
辞表手に居丈高
受胎告ぐ声細し
酔狂も人が居て
妻杖に喜寿の席
主避けて飛ぶ噂
平仮名の母の愛
仏力を説く尼僧
また金に操られ
夢煽る夢二の絵
夢持たず寝正月
利口程黙ってい
笑えない腹上死
逢う為に途中下車
請け判へ残る悔い
売る嘘を飾り立て
怒ったら負けと妻
音も無く迫る老い
顔よりも才を誉め



片意地の肩を張り
構えれば蠅が逃げ
金出来て死を恐れ
金やって裏切らせ
感じ合う掌の温み
着飾ってクラス会
決め球はやはり金
功成ってから孤独
古稀越えて坂は急
漕ぎ出せば向い風
拘りが語尾を染め
淋しさを酒に逃げ
仕合わせを知る枕
死を悼む通夜の雨
叱る子も無くて秋
師の影は踏まぬ質
主役食う芸の冴え
焦れて待つ隠し芸
抱き付けば女は火
妥協して恩を売り
無い袖を振るも愛
抜け駆けも若い故
ネジ巻けば踊る人
肌を這う愛撫の手
春なれや土の香も

振り向けば女の目
惚れていて年は別
また明日逢う別れ
見えぬ目に涙溜め
許したらとは他人
藁葺きの村で老い
あり過ぎて困るエゴ
言い勝ってから不仲
折れて出たので困り
涸れて来た痴話喧嘩
義理すでに死語の中
口下手にしてやられ
古稀の背に母を負い
左遷地で伸ばす趣味
拗ねてみる愛もあり
都合よく風邪を引き
泣いてても嫁折れず
飲め飲めは策があり
腹割って付け込まれ
ボスらしく策に長け
退き際の良さを褒め
義理欠いで浮かす旅費
義理の子へ歩を合わせ
娘は拗ねて気を引く気
句碑訪えば亡し師のお声

自選百句

藤村〆女

美しく嫉妬している三面境
苺つぶす女の嘘が美しい
美しい嘘を日本語知っている
海までの流れる川の物語り
運命の川に昨日の罪流す
委すとは言わず合鍵渡される
委す気になって女の目に戻り
ここだけは紫の雨あやめ咲く
耳立てて花の言葉を確かめる
北風の噂を耳が確かめる
父の忌の雨は紫色に降る
コーヒーの底に沈んでゆく自由
強がりの仮面とりたい泣き黒子
勢力を持たぬ悲しいふところ手
栄光の蔭の塩つぼ母が抱く
一生を子に賭け車輪の軸となり
とめどなき涙追慕の瞼閉ず
平凡に生きる世間のむつかしさ
泣く時は瞼に亡母の声がする
この窓も入試の子が居る灯が消えず
美しく光る涙にそむかれる
冬の花白く女がひとり住む
母さんが一番小さい影法師
温かい友情に逢う落ちこぼれ
あの人も待たされている時計見る

騙されてからの心へ鍵をかけ
下町の育ち根性と意地を持ち
泣かぬ子の根性広場の石が知る
花開く雨はやさしい音で降り
古寺めぐる女に煙る嵯峨の雨
山焼の古都から春の詩が出来
花びらを風にまかせて春走る
ああ無情きのうの花が散り急ぐ
欠点も魅力に見えている若さ
女ひとり静かに沈む酒の量
風雪に耐えた塩つぼ母が抱く
経本をめくると父母の声がする
心うつろポトリと落ちし紅椿
定年のそれから妻が強くなり
実権を妻が握っている疲れ
へそくりをがっちり貯めてもう妬かず
骨抱いて漸くためいきから醒める
母の忌や手繰れば透ける愛に泣く
一周忌母に煙の絶えぬ墓
ジャスミンのほのかに母の身だしなみ
シャネル五番やがては敵として背く
怪物がラーメン食べてるひとりぼち
怪物が夫婦茶碗の中にいる
星祭り母の童話が胸に棲む
旅枕遠く潮騒聞く残暑

皿一つ一つに母の情が住み
満願へ続く一歩の百度石
一喝で後を残さぬ父の愛
居眠っていても煙たい父が居り
ぬか袋父が磨く床柱
なんとなく父が好き仁義礼智信
見栄があって少し大きな石を積む
ポケットに男はみんな嘘を持ち
仕事着の似合う男で頼母しい
夏の恋は握手して終り
団地静かに秋の夕陽が落ちてゆき
いつからか夢にも出ない遠いひと
やがて秋月も私も細りゆく
秋はむらさきの情に流される
坂道のドラマ峠に埋めておく
なだらかな女の肩に秋匂う
別れても風の噂を気にかける
あって無いシルバーシートというルール
ささやかなぜいたく柚湯の香に憩う
フルコース私の胃袋小さすぎ
風花に老母と連れ立つ宵戎
同じ夢二日続いた気の疲れ
如月の夢あたためるシクラメン
少しずつ風が変って春の音
花冷えに老母ひとりの春炬燵

わらべ唄囲炉裏が匂う芋が焼け
あやとりの糸のもつれの姉妹
カレンダーの格言私をなぐさめる
恵まれた老後は過去を振り向かず
風流な御趣味と皮肉な顔がほめ
終電車星がきれいな甲山
大原女の竹篭かつぐ娘がきれい
ふるさとの小川唱歌のまま流れ
言い勝った胸の鼓動は鉛色
雨の日の花の鼓動が遠くなる
何事も聞かない耳のない地蔵
他人にはなり切れぬ血がまたうずく
ひぐらしが鳴くから夕焼け美しい
ちぢんでる母の乳房に残る夢
訃報しきり母の終章ふと思う
ふるさとの月がかたむき母が逝く
極楽へ旅立つ母の鈴の音
輝いた星を私の母と呼ぶ
母偲ぶ涸れて溢れる涙つぼ
孝行を少しさせて母が逝く
亡き父母と話のつきぬ盆の月
少しずつ母に似て来たほろ苦さ
秋祭り今年は鯖寿司もうこない
水車冬には淋しすぎる音
霜柱土が鳴ってる朝の靴

座談会『川柳塔』過去・現在・未来

〈下〉

〈語る人〉

西尾　栞　　黒川紫香　　西田柳宏子
高杉鬼遊　　河内天笑　　小出智子
橘高薫風（司会）

薫風　川柳塔創刊号の表紙の絵、覚えていますか。

鬼遊　川柳雑誌が川柳塔に昭和四十年十月号から改題になって、この時から表紙が直原玉青先生になった。最初の表紙は、あれ鷺だったと思います。松の木に止っている鷺。

薫風　その鷺は羽を拡げてなくて、しかしらんらんとした眼でした。そして、その後十年以上も経ってやはり鷺を表紙に描いて下さってますが、これも羽を拡げていない。玉青先生には二十年間ずっと描き続けて頂いてるのですからほんとうにありがたいことです。そのうち、羽搏いている鷺、飛翔している鷺を描いて頂きたいね。

鬼遊　眼が物凄く鋭いのです。というのはあの時分はね、これから翔ばんとする姿勢だと今から考えられるわけなんです。眼の鋭さというものは二十年後の今日まで見通す眼光するどいものがあったのです、この第一号誌には。

川上三太郎さんがエッセイを送って下さってます。「踏んづけちゃう」という題だけれど、その中で、路郎の句は「君見たまえほうれん草が伸びている」「雲の峰という手もありさらばさらばです」の二句に尽きると言うてられます。第一句は、これからということを表現し、第二句はこれまでのしめくくりやないかと。川柳塔に拠って出発する人たちは路郎先生の追慕だけでは意味がなく、路郎の求めて得られなかったもの、また求めさえしなかった領域まで求めて行くべきだと。私などをかまわず踏んづけちゃって、さあ前へ。

智子　一流の人はその場その場で生きた言葉、いつまでも生きている言葉を残して下さいますね。

鬼遊　ただ創刊号を飾るというのやなしにこれと思うものをハッキリ分りやすく書いて下さいました。

薫風　私は座右の句に「雲の峰という手もありさらばさらばです」を挙げたのですが、何も路郎先生の一番の傑作というのではなく最後の句ということで挙げたのです。そして自分はここから始まるんやぞとの自覚を常に持つようにしたいという意味で。その気持を三太郎先生は、すでにはっきり示されたわけね。

鬼遊　川柳塔創刊号は、この時分すでに川傍柳の研究も二十九篇に達してるのです。われわれ川柳を始めて、柳樽を読んだり川傍柳というのがあるかないかも知らずに、古句を勉強するようになったのはずっと後になってからのことです。当時、古句が沢山沢山あるということは聞くにとどまり、今自分のしている川柳は、それとは別のものであるという意識でいたのですが、今の川柳のルーツというのを勉強しなおす時期に来たと思っています。

薫風　今度は智子さんのお始めになった頃

のことを…。

智子　私は四十二年四月位から。

薫風　鬼遊さんとさして変らん頃ですね。

智子　雑詠に投句し出したのが四十四年からです。一年経って四十五年に川柳塔賞いただいて。

薫風　えらい早いなあ、皆さん賞をもらうのが。

天笑　私は四十二年九月から。

初心時代の頃

薫風　その頃の思い出とか印象を。

智子　私の場合は、とにかく川柳界そのものがこわい、本社句会など特に、なんで私どもがこわい所へ行かんならんのかといった感じで、行っても抜けないという意識、それは敵陣へ乗り込むような気持でした。

薫風　文秋さんの指導ですか、一三夫さんの励ましですか、続いたのは。

智子　私の家の二、三軒先のお寺で句会があり、南大阪川柳会と書いてあるので、好奇心からお寺のおばさんに聞いて入らせて頂いたら、文秋さんが居られたのです。

鬼遊　近所の本屋のおやじが坐ってた。

智子　それから毎月文秋さん、私が夕方キッチンで片付けものしていると、「今晩句会でっせ。おいなはれや」と窓から声かけて下さるのです。半年ぐらいして玉造句会へ行き出して白柳先生を知ったのです。

本当は私は短歌がしたいと思っていたのですが、川柳にご縁があった。たまたま川柳の会が開かれていましたので川柳の方へ。

薫風　その頃はまだ女だてら川柳をという感じが大いにあったでしょう。

智子　私の場合、短歌がどうの川柳がどうのということじゃなくて、女というものは短歌のような、あの抒情に興味を持つもので、ノートに短歌の真似ごとを書いて、誰か見てくれる人いないかなという気持でいたのです。今でこそこんなこと申し上げられるのですが、南大阪の句会へ出始めて実は少しがっかりしてね。こんなんだったら止めようかという気持で二年ほどした時、ある人の句集が出まして、川柳でこういうものが表現出来るのだったら川柳に身を入れようと、そんな気特になりました。

栞　川柳塔賞受賞されましたのは何年目。

智子　句会に出て三年目、雑詠に投句しはじめたのは昭和四十四年です。

薫風　翌年にもろてはるのですね。

栞　河野君子さんと二人ね。

智子　そうです、そうです。前の双葉の方やペン皿のグループに奨めても、私の初心時代と同じで本社句会へは出たいと思わないと言われると同情してしまうのです。息の長い川柳をしてもらいたいので強制出来ません。

柳宏子　それは大事ですね。

智子　だっだだっだとあちこちの句会へ行って、それで何か行詰りみたいなもの、家庭の中でとか、川柳作品の上でとか、時期的に来るのもこわいように思いますし…。

鬼遊　私は病院で無理やりに連れて行かれたわけです。おだてられたわけです。

薫風　だけど今の川柳塔を背負うて、というと言い過ぎになるだろうが、酔々さんは死んでしまったが、谷垣史好さんにしろ鬼遊さん、吸江さん、岳人さんと、羽曳野病院のどんぐり川柳会OBを育てて下さった川村好郎先生の指導を思い起こします。

鬼遊　そうですわ。川村先生その時分から信念持って指導されてました。延百何十人です。二、三人に減っても続けられた人を育てる根気は大変なものです。その中から川柳に賭けるような者が出て来てるわけです。大きな足跡ですね。

薫風　それから枝葉が分れて増えます。後に続くものを育てる大切さです。

栞　お話も上手やったね。やっぱり金光教布教に通じる信念でしょう。

薫風　こんどは天笑さん、初心の頃の摩天郎さんとの出会いは。

天笑　僕の場合ね、さっきから鬼遊さんの話聞いていて、八尾の木原蓮夢という方に誘われたのです。得意先の慰安旅行のバスの中で。常識という句を、生れて初めての句を作った。「常識もミニスカートにより切られ」「ヒット曲常識にない歌手が受け」など三句

を、これ五・七・五になってまっしゃろ言うて出したのです。次の集金に行ったら、えらいこっちゃで、君の句が番傘の榎本聰夢という偉い先生の選に、佳作と天と平抜きの止めに三つとも抜けた言われたんです。平抜きの止めてなんや、帯止めのようなもんかと思うほど何も知らない時ですから…。（笑）

鬼遊　なる程、なる程。

薫風　それから病みつきになった？

天笑　新谷笑痴さんに句会へ連れて行って貰った。兼題「握る」が白柳さんの選で、その物の言い方がとても感じのいい人で、印象深かったです。また、「水」の選をされた摩天郎さんは、えらいおじん。（笑）

薫風　皆さんから初心時代のことから伺ったのですが、この辺でしめくくりとして、これからの川柳塔というもの、あるいは後輩に望むというような事に触れて頂きたく思います。

紫香　袴を着た川柳を作ったらいかん。この間も鳥取へ行ってよく分りましたけれど、誰彼なしに伝達性のある川柳を作って行かねばと、感じました。また作者の間でも、先輩やのどうのこうのいうことなしに、句会場に入れば、やはり袴をつけないでほしい、そう思います。

柳宏子　小中句会の場合は割合い目が行き届くのですが、本社句会ともなると、初めて来た人に声を掛けることも少ないようです。新人が一人で来るということは、まあめったに無いとも言えますが…。

智子　私の場合、川柳塔賞を頂くまでそんなに本社句会へは出ていません。賞を頂くというので君子さんと二人で行ったわけです。物を言うにも誰も知らないし、誰も何も声を掛けて下さらない。もじもじしただけでした。

やっとして、二年ほども経ってから酔々さんが「智子さん、あんたつきあってみたら案外話せるなあ」。（笑）

薫風　川柳雑誌時代、自安寺でしていた本社句会へ一人で表の旗を見てふらりと入って来て、いきなり路郎選の天を獲得した天正千梢さんなどは、その点ズブの初心者ではユニークな方ですよ。

天笑　句会部も工夫をして新人を受け入れるムードづくりをしなければと思います。

薫風　先程も触れたように、川柳塔欄・水煙抄欄の選者が一人に定着してすっきりしたが、本社句会の最終兼題の選も、一年を通じて、栞主幹にして頂き、川柳塔創刊の混迷から路郎時代の形に戻したいと思うのですが…。

天笑　一寸、今一つ発言させて下さい。少し前から考えていることですが、本社句会の下部組織のようなもの、例えば、私が受持っているカルチャーに来ている人達、それだけでなく、栞先生のカルチャーの方、薫風先生のカルチャーのメンバーという風なグループの有志で会を持ちたいのです。二十人ほどでもよし、その他の人が参加してもよい。それで本社の事務所では現状のままだと狭いのです。

薫風　私は二十年程も前に川柳のサロン的な集りが欲しいと言ってましたが、酔々さんと一緒に作った翠洋会もその試みです。サークル檸檬も同じことです。

柳宏子　事務所ももう少し広い、いいところをお互いに探しましょう。

鬼遊　本当に最初は何もないところからあれだけの事務所にして、それで今贅沢を言える時期に来たわけですね。

薫風　鬼遊さんが今、今年度の決算を整理して出しておられることと思いますが、それの結果でまた相談をすることにして、本社事務所をサロン風にもっと利用すること、顔ぶれを固定せずに集まって頂いて川柳の話をするムードづくりを試みたいと思います。

天笑　是非お願いします。そのような所から、川柳塔をよくする提案が一ぱい生れてくると考えます。

薫風　今月から七百一号となり、川柳塔に改題して二十一年目の一歩を踏み出します。今日は有意義なお話をありがとうございました。

（**おわり**）

七月十五日於河内天笑居
録音・整理／藤田泰子

昭和60年度唐津市民文化祭
「川柳塔」唐津支部結成3周年

記念川柳大会

日時 **昭和60年10月13日**(日) 10時開場
11時半開会

会場 唐津市文化会館3階大会議室
唐津市西城内 電話 2―8278

柳話 西尾 栞

兼題 城下町 浜本 義美選
遠征 岩本雀踊子選
いたずら 真島 清弘選
舌 酒谷 愛郷選
柱 高杉 鬼遊選
熟れる 大坂 形水選
茶碗 橘高 薫風選
喜寿 黒川 紫香選
各題2句・事前投句

会費 投句料一、〇〇〇円(郵券可)
当日分一、〇〇〇円(昼食・大会誌呈)
◇投句は**9月20日**まで左記へ
〒847 唐津市栄町二五七〇―四
「川柳塔」唐津支部 久保正敏

唐津観光の旅ご案内

〈日程〉

10月12日(土) 新大阪発ひかり一号10・10→博多経由筑肥線唐津着15・17。唐津焼窯元見学→「洋々閣」泊。

10月13日(日) 文化財「曳山」見学10・00→川柳大会・観迎懇親会→「洋々閣」泊。

10月14日(月) 観光(マイクロバス)9・00→虹の松原～鏡山～七ツ釜～呼子～名護屋城趾～昼食・海中レストラン「萬坊」博多発ひかり28号15・45→新大阪着19・06

〈費用〉 五万円。

■ご希望の方は川柳塔社高杉鬼遊宛お申込み下さい。

川柳塔
川柳塔唐津支部

川柳塔社常任理事会(9月2日)

出席者=栞・形水・紫香・太茂津・薫風・柳宏子・鬼遊・萬的・文秋・重人・天笑・寿馬・凡九郎・笛生・智子・史好

〈議事並に報告事項〉

▽9・29の大会まで後四週間、万遺漏なきよう細部に亘り改めてチェックを行う。事前投句は予想を上回る数である。

▽60年度路郎賞・川柳塔賞の選考を行い、別稿の如く決定した。

▽新同人五名(81P参照)の推薦了承。

■**10月**の常任理事会は**1日**(火)

《カラーブックス》

川柳にみる大阪

藤沢桓夫・橘高薫風共著

■文庫判 152頁 ■定価 500円

発行所 株式会社 保育社
〒540 大阪市東区上町一―一七
電話(06)762―1731(代)
振替口座 大阪 6―12346

秀句鑑賞

—水煙抄—

—前月号から—

小林　由多香

一人一党どこで死のうと生きようと
赤木　和子

一匹狼の生きざまが、女性の作品とは思えないような力強い表現で詠まれている。

おみくじの凶へ神様変えてみる
宇野　昭代

なぐさみのおみくじであっても凶とは気がかりである。神様を変えて吉を期待する。

言い訳をする唇が乾き切り
小山　悠泉

言い訳にも咄嗟のものと、考えておいてのものとある。この後者しどろもどろ。

金魚さえ器量よしから掬われる
舟渡　杏花

こんな川柳もたのしい。笑いも湧いてくるが、哀しみもこもっている。

男名で来ても字体が承知せず
北川　一進

結論は女の文字である。おもしろい表現でうまくまとめられている。

女も吸う煙草を男買いに出る
田中　叶

川柳家の鋭い目でとらえられた情景がズバリ描写されている。

輸入品買えと言うので豆腐買う
鈴木　良征

豆腐の原料である大豆はほぼ輸入品である。諷刺のきいた川柳。

噴水に二人で触れてさようなら
土橋　はるお

たくらみのない軽い表現で仕立てられた味のある作品とみる。

愛のムチなどと本当は腹を立て
朝倉　大柏

ズバリ吐かれた作者の本音。そういえばそうだなとうなずける。

税金の額は中流かも知れぬ
羽津川　公乃

税金の額で中流を考えた発想は大変おもしろい。たのしい川柳。

スーパーの軒でつばめの巣に出合う
西山　えつ美

「巣を見つけ」ではおもしろくない。「巣に出合う」がこの句を成功させた。

残高をながめて暮らす余生なり
桝本　露児

「なり」はあまり好まないが、この句の場合の「なり」は適切であろう。

あの世には落し穴などきっとない
池田　寿美子

ひどい目にあったであろう作者の心情が下五ににじみ出ている。

酒二合飲んで二合を喋り出す
北川　竹萌

たのしい叙法で成功した川柳。悪い酒ではなさそう。

植木屋は遥か遠くで煙草喫う
小玉　満江

句意はよくわかるが、中七の「遥か遠くで」は作り過ぎの感じがする。

そうめんの長さに合わせ息をつぎ
尾宮　弘治

発想、表現とも実感として生々しさを感じさせる。そうめんのうまさが伝わってくる。

清貧の抵抗鍋を光らせる
今西　静子

清貧と鍋の光りがぴったり結ばれて、味の深い作品としている。

形だけ座禅痺れがきれただけ
石手　武

よほど修練を積まなければ座禅の妙味は悟れないらしい。ユーモアのある句。

お裾分け又裾分けの目刺焼く
渡辺　伊津志

「目刺焼く」に古さを感じるが、裾分けの裾分けに庶民的な暖かみを覚える。

台所母の性格置いてある
森　三枝子

台所を覗けば奥さんの性格がわかるといわれる。この句からは几帳面さが窺える。

実感の盛られた作品を取上げてみました。

〈句集紹介〉

豆秋句集「ふるさと」に寄せて

中尾藻介

口髭を生やして猫の子が生れ
骨立てたまま二次会へついて行き
行くあてもなく傘をひろげし
白骨ともならば涼しからん
火葬場は火をつけてから夕涼
けなげにも家主の犬を噛んで来た
葬式で会いぼろいことおまへんか
お月さんざんねんながら負けました
こんな時えらい坊主も出んかいな
煌々とすしがぎょうさん売れ残り

須崎豆秋さんの代表句とされる句の二つや三つを知らない川柳人はいないだろう。ユーモアが川柳に少なくなったと歎かれるとき、定まって引き合いに出されるのもこの人である。だからといって豆秋さんの全部を私たちは知らない。須崎豆秋川柳句集〈ふるさと〉が昭和二十九年に刊行され、再版を経て、昭和三十三年の三版以来、二十七年間を距てるのだから、愛蔵者以外は片鱗を僅かに知るに過ぎない。句集を借りてノートに全部写したという話はしばしば聞くことだが、誰でもが出来ることではない。

川柳塔社が七〇〇号記念事業の一つとして句集〈ふるさと〉の復刻を計られた意義は大きい。親しみ深くて近寄り難い川柳の名手を自分の手元へ引寄せられるからである。解剖できるからである。先ず、句集の印象から語ろう。一番にその簡素さが好ましい。昭和二十九年という時代もあろうが、句集とは、句を活字で並べて間違いなく読んで貰えば足りる——がよく出ている。〈非売品〉とあるのは身内といえる限られた人たちを対象にされたのでもあろうか。川柳人口が当時と比べものにならない位増大した今日、句集以後の作品も加え、かつ、川柳界唯一純正の批評家といっても過言でない高鷲亜鈍氏の〈須崎豆秋論〉を併せて一冊となし、廉価をもって刊行された意義はいよいよ大きいと言わねばならない。それは三十年ぶりに豆秋作品の多くに接することができるというだけでなく、味読することによって、川柳が川柳である道を無意識に踏み固めるに違いないという点にある。或いは読後「この句には脱帽した」という同じ口から「もう、こうした川柳は古い」と言う人が多いかもしれない。六大家をはじめ、秀作家の名をほしいままにした人たち（その中に須崎豆秋の名は一際高くあるのだが）の作品もまた時代の産物であることは当然である。そして、その幾つかが古典として永遠に残る。時代を超える。それだのに「時代は変っている」ことを自分の手柄かのように、先人の作風、作品を小バカにする人もいる。熱心である限りむしろ見込みのある人たちであろう。そういう人たちにこそ、この句集は読んでほしい。自説はそれからである。

豆秋作品の紹介、自分ながらの鑑賞をと思いながらペンを握ったのだが、ペンを走らすうち、却ってそれはしないほうがよいことだと気付いた。読んで川柳の神随に触れていただこう。句集が沢山売れてから、書ける人に方々で鑑賞文を書いていただこう。

ユーモアも愛も殊更意識することのなかった人間観察者須崎豆秋。私には川柳はこうとしか作れませんとつぶやく須崎豆秋。せかず慌てずさわがず大正昭和を生きた常識人須崎豆秋。あやかれるかな。

■句集「ふるさと」に寄せて

須崎豆秋さん

橘　高　薫　風

柳壇の一茶と言われた須崎豆秋さんの句集「ふるさと」が、「ふるさと」以後の百句とともに復刻版として出版されたことは、高鷲亜鈍氏の解説に代る須崎豆秋論の掲載とともに欣快に耐えない。

作品は、作者と選者の協同作業から生れるものだというが、豆秋作品も、麻生路郎の導きがなくては、個性の花は開かなかったに違いない。路郎は生前、「豆秋ほど佳句をものする作家はいないが、豆秋ほどにまた、頼りない句を多数提出する者もいない。」と言っておられた。路郎のよき剪定を得て、ユーモアのバラは大きな花を咲かせたのである。

開巻第一の句は、

秋風の中で乞食に拝まれる

である。8頁には、

寒いとこよって乞食の子は坐り

が掲載されている。読者は、この二句を較べ器量の差を吟味して欲しい。

骨立てたまま二次会へついて行き
降りる客いとのんのんと続くなり
あゝ大空生れては死に生れては死に
長靴の中で一ぴき蚊が暮し
児が追へば鳩は歩いて逃げるなり
ドロドロと貧民窟へ陽が落ちる
けなげにも家主の犬を噛んで来た
ようかんをいただいてると地震かな
ちちははにめぐりあいたや靴みがく
みの虫のなんぼ匐うても壁だった
恋人の坐ったとこへ坐って見

豆秋作品の代表的なものである。豆秋さんの句はいろいろなカテゴリーに分類出来る。例えば、①動植物を藉りて人間を詠んだ句。②大阪弁の特徴を駆使した句。③見即句、聞即句、感即句というふうに、日常生活の何時いかなるときも、川柳の触覚をひらひらさせていた作家特有の句。

①の句は、

貧しさを猫の顔して笑ろて見た
つばくろの帰って見れば家も無く
南瓜の花かや小大丸にて候

②の句は、

葬式で会いぼろいことおまへんか
守り札もろともチボにとられたり
折詰をあんじょ女給にいかれたり

③の句は、

第19回東大阪市文化祭参加
第13回　市民川柳大会

日　時　昭和60年10月13日(日)正午開場
会　場　東大阪市社会教育センター
近鉄布施駅北へ五分。長堂小学校横
兼題と選者
からだ　河内　天笑選
頼　む　古川　一高選
夫　婦　鍋島　十歩選
編　む　伊藤　定子選
早　朝　西田柳宏子選
枯れる　永田　帆船選
故　郷　奥田　白虎選
席題は当日発表
各題二句（出席者に限る）
〆切一時半
賞　各題秀吟賞
会　費　千円（大会報呈）

主催　東大阪文化連盟
東大阪川柳同好会
後援　東　大　阪　市
東大阪市教育委員会

ピョイ〳〵とうなぎを大中小にわけ
ストップがわからんのかと怒こりゃはり
春うら、はさみほうちょうかみそり研ぎ

豆秋さんは生前、「自分は雨という題が出ると、雨の日に実際に傘をさして道頓堀辺りへ出かけて見る。」ということを書いている。

川柳雑誌の本社句会が文楽座の階上にあった頃、私がトイレで用を足していると、隣に立った人が、「文楽へ来て小便をして帰り」とぶつぶつつぶやいているのだ。それが豆秋さんだったので、豆秋さんの句作りを私は、その時垣間見たわけである。

豆秋さんの挿話は、豆秋さんの人柄を余すところなく伝えているのが多いので、そのうちの二三を紹介したい。

冬のある夜更け、不朽洞（路郎居）の表戸を叩くものがいる。出てみると豆秋さんだ。居間へ通すと、「先生、飲み仲間とふぐで一杯やっていましたら、手足や口がしびれてきました。間もなくあの世行きになるやも知れぬので、急いでお別れに来ました。」というので、路郎は、「しばらく冷えた廊下で横になってりゃ、すぐ元に戻るよ。」と言ったという。やがて路郎の言葉通りになったので、「どうや、飲み直しをしようやないか」と、笑ってすます結果になったという。

また、光明寺の本社句会へ出席した豆秋さんを見ると、白い大きなマスクをしている。マスクは口にするものだが、豆秋さんは、口とは反対の首の方にマスクを掛けているのだ。事情を聞くと、首筋の上に瘍が出来たので繃帯では頭をぐるぐる巻かれて大そうなのでマスクを利用したのだと言う。その場には私も居合せていたので、豆秋さんの、このすっとぼけた姿に笑いを押えかねたのを覚えている。またもう一つおかしいエピソードがある。

豆秋さんが昼寝をしていたら、月詣りの寺の和尚さんが来てお経をあげはじめた。すぐに目は覚めたが、今さら起きるきっかけをつかめずにいると、お経はどんどん進む。まるで、枕経をあげて貰っている新仏さながらに経の終るまで辛抱を続けるつらさ、聞くだにあほらしい滑稽譚なのであった。このように人柄そのものが、川柳のユーモアの権化みたいな作家だった。

句集「ふるさと」以後の約十七年間の句をユーモアの味の佳句をものする谷垣史好さんと私とで選をして百句選出した。生活の軌跡がありありと偲ばれ、病を得てからの句には心をゆさぶられた。

よし来たと博士が踊る奴さん

の句は、大萬川柳「博士」のときのものだと当時の私の初心時代を逐一思い出させた。酒の句の多いのも豆秋さんらしい。

杉になりたやや千年という樹齢
赤電話ぐずぐずせんと来んかいな
奥さんを恐い同士が飲み歩き
十七字わが情熱は火の如し
暮れてゆく如き往生したいもの
短冊のけいこでもして死をまとう

私は、豆秋さんの絶唱は、

院長があかん言うてる独逸語で

の句だと信じていたが、

狸より短かい寿命とはさみし

の作も、豆秋さんらしい味がにじみ出て深い句境を示す。

豆秋さんは、昭和三十六年五月四日に亡くなった。葬儀は翌五日だった。家から斎場に向う霊柩車を見送りながら、路郎が述懐した言葉は印象的だった。

「豆秋らしい葬式やなあ。日の丸の旗に見送ってもろうて…」

■川柳塔七百号記念出版
須崎豆秋川柳句集
「ふるさと」復刻版
B6判・136頁
定価一、〇〇〇円
（送料三百円）
発行所　川柳塔社
大阪市阿倍野区三明町2－10－16
ウエムラ第2ビル
振替口座　大阪8－33368番

自己の表現法

前川千賀子

盆過ぎとも思えぬ酷暑の午後、手すさびに立原正秋の小文集を開いていたら、河井寛次郎の名前に出会った。二年余り前、京都の近代美術館で河井寛次郎を見たことがある。陶器の知識は持たないままに、三色の辰砂の作品や、大らかな丸みのある柄の作品を見ていると、その中に、詩を書いた陶板がいくつか置かれていた。それを眺めていた友人が「これは川柳やな」とつぶやいた。（この場合の川柳とは、俳句でも短歌でもなく、人の心を最も端的に述べたものであるという意味に解した）

○二つならべてあしのうらに月を見せる
○花を見ている　花に見られている
○仕事をしている自分という自分

当日の日記に残っている詩。また、昨年は一人で菅井汲展に行ったが、そこでも、近代画家の近作に詩が書かれているのを発見した。

陶器も絵画も自己表現であり、本来ならば、その作品によって自分を表現しなければならないはずである。なのに、その作品に言葉を添える、というのは、どういうことだろう。作品だけで、その表現を受けとめられる鑑賞者が居ないからだろうか。あるいは、陶器、絵画だけでは表現しきれない自己を、言葉という直接法によって訴えようとするのだろうか。立原正秋は、陶器を通じて、製作者が視えるという。俗人の私には、残念ながら、その鑑識眼はなく、言葉を日記に書きとめていたのだ。それならば、言葉だけで作品を作る川柳は一体どうだろう。最もストレートに表現し、読みとってもらうことのできる言葉に頼り過ぎたり、あるいは甘えたりしていないだろうか。陶器や絵画とは逆に、言葉という表現の奥に、それを作った一人の人間としての姿が見える、そんな句を作りたいと思う。

つぶやき

松村総七郎

川柳を単純に良いとか悪いとか評することはやさしい。特に、その評が恣意に（甚しきに至っては）感情的になされることはもっと易しい。

しかし、川柳が庶民詩でありながら、その低俗性を脱するためには、そこに、一つの基本的な態度がなければならぬ。その基本的態度とは一体何か。

いわく(1)哲学性、(2)文化性、(3)詩性である。

(1)　哲学性とは

川柳の詩因に矛盾相剋と、それを超脱しようとする人間の努力があること。この矛盾相剋は、二律背反を感じさせるものほど奥行きは深くなる。

(2)　文化性とは

川柳の詩因の採り方と、川柳句表現の仕方、特に、後者が誰にでも共感、受容されるものであること。換言すれば、その句の特殊・具体性が一般的・普遍妥当性を持つものであること。時間的・空間的（国の内外を問わず）に広がりを持てば持つほど、川柳の文化性は高くなる。

(3)　詩性とは

多くの人に語り尽されているので、改めて主張すべきことはないが、少なくとも次のようなことだけは再認識されてよいだろう。

㋐　詩因の吸引―圧縮・凝縮―爆発・展開という短詩の基本

㋑　音感にせよ、内在的な意味の関連にせよ、リズムがあること

㋒　深い感動と余韻が残ること

さて、ここで注意すべきことは、ここにいう「詩性」とは、いわゆる「詩語」でないことはもちろんのこと、右の哲学性、文化性、または詩性がばらばらにあったとて、それだけでその川柳の程度が高いわけではないということである。川柳の評価は視点によって異なり、総合的に鑑賞すべきことなので、特定の句を軽々に決めつけるべきではない。

私の主張は、ただ「庶民詩を広い間口のまで、前述の哲学性、文化性、及び詩性等を拠りどころに洗練すれば、川柳は無限に、より高いところへ到達するだろう」というだけである。

そこで私のこの主張を、昭和六十年度路郎賞・川柳塔賞候補作品中間発表の各名句にあてはめてみる。（川柳塔No.693号より）

どの句が賞をかちとるのか、私には皆目見当がつかない。そして結果として、これが受賞作品だといわれても、それを充分に理解するだけの知識、経験が私にはない。私は、私の考えを初心者なりに、名句にぶっつけてみるだけである。私には権威というものがないから、こうしても失礼には当るまいと思う。

1　哲学性　A（矛盾）

階段の一番下を踏みはずし　藤村　宏子
言訳が下手なお陰で許される　野呂　右近
喉までの言葉の中にある本音　安平次弘道
ケロイドの腕をかくして長い夏　塩満　敏
たよりない男で皮をむいてくれ　田中　叶

2　哲学性　B（矛盾―超脱）

濡れ衣を干すあたたかい風を待つ　小林由多香
どん底が思い出となる日を信じ　江城　修史
ゆるす目でうな重ふたつ運ばれる　田中　晴子
虚と実の谷間で少し寝ておこう　藤井　高子
聞くだけは聞いております母の耳　山川　克子

3　文化性（普遍性）

とんとん拍子あしたの風が怖くなり　若宮　武雄
正面にあいつがいると眠くなる　清水　健司
二二ンが四そこで善人安堵する　矢野　佳雲
一歩二歩同じ歩幅の懺悔録　深田ふさえ
ストレスが溜り本音を皆喋り　戸田　種子

4　詩性

曼珠沙華燃える彩した乱れ髪　藤田　泰子
漁火は動かず煙草ながく吸う　森川まさお
この島の慟哭赤い花が咲く　田中　晴子
血縁の町ひっそりと宿の下駄　高杉　千歩
みの虫の私語をだあれも聞き留めぬ　前川千賀子

むすび

川柳の見方は、前述のとおり哲学性、文化性及び詩性をばらばらに見るべきでなく、総合的にみて一つの句の価値を判定すべきものではあるが、ここでは、私の一つの見方からそれぞれの適句を選択するに留める。

後記　川柳は、名句に接して新たな感動を受けるごとに、いつも、川柳道の門口にたちどまっている自分をみつける。

そよ風に

栗谷　春子

ある日の国語の時間のことでした。

その日の授業は現代文学で、夏目漱石の「夢十夜」の第一夜を誰かが立って読まされていたのです。

ある所まで来た時、教室内にちょっとしたざわめきが起こったようでした。

その短い時間を私は今日のような爽やかな窓辺の風の快さについうっとりとしていたのでしょう。あわてて本を読み直してみました。

それは

「真白い百合が鼻の先で骨に徹えるほど匂った。そこへはるかの上からぽたりと露が落ちたので草は自分の重みでふら〳〵と動いた。自分は首を前に出して冷たい露の滴る白い花弁に接吻した。」

第一夜の夢の最後の所だったのです。生徒達にため息をつかせたのは。

それだけの言葉にも動揺をかくし切れない今ではちょっと想像も出来ない程ねんねえなものでした。そしてとに角きびしいばかりの校風なのでした。

それでも若い私達は放課後のひとときを、その頃一世を風靡していた名画モロッコ、主役マルレネ・ディートリッヒのすばらしさやら、当時憧れの名テナー藤原義江氏のロマンス等に下校を促す鐘も耳に入らぬほど夢中になっているのでした。

五十数年も昔の花の女学生時代。

風が運んでくれた忘れられない大正生まれのスーベニアに暫くは浸っていたいような気がして…。

悼　浦野和子さん

野村太茂津

夜の底辺がんじがらめになる私
月の暈あしたのことは思うまい
病窓へどうして来たの雨蛙

病床で点滴を受けながら、姉妹のような友坂口公子さんに吐露した句である。そして一日おいた八月十九日午前二時、静かに永眠した。枕もとのメモ帖とペンも付き添い婦に匿されたらしい。切除も不可能なポリープ、ご本人には無論知らされていないが、あと僅かな命の患者から、生命を賭けた川柳を取り上げる非情、付き添い婦が憎い。

それでも病床のシーツにまで書いていたという話を公子さんから聞かされて、私の胸は張り裂ける思いで、このペンも涙でかすむ。

和子さんとの出会いは、十余年前に遡る。私たちの村の出身者の親睦会で、登志代さんが誘い川湯温泉で同席した、その頃の私は、誰彼なしに川柳を勧めた。今も変わらぬ川柳狂だが、観光バスの中で説明しながら句箋を配り、強引に書かせた。

宿に着いても親睦会長である立場も忘れて登志代と二人で勧誘したのを覚えている。

無論、川柳以外のことも話した。そのとき和子さんから返る答が、他の人とは一味も二味も異った閃きがあった。不思議にフィーリングが合うのである。川柳わかやまに入会後暫くして、彼女も『あの時、太茂津さんと御縁が出来る、と感じました』と述懐していた。

豊かな感受性に恵まれた人だった。最近は好んで抽象化した表現で、生活の基盤にしっかりと立ち、知性に包まれた女の性が漂い緻密に計算された表現力には、思いの深さが感じとれた。これは物を見る目が深いからだろう。スランプの時はいつも相談に見えた。

欠陥だらけの私を兄貴のように慕ってくれた。無邪気な明るい女学生気質もあった。かと思うと時には厳しい忠告もして優しい姉のように、私の悩みも聞いてくれた。そんな和子さんが好きである。

入院を決心する数日前のこと、胸中を聞いてくれというので、二人っきりで郊外の山道をドライブした。木陰で休み、谷川のせせらぎで話しあった。生い立ちから現在まで、和子さんは吐き続けた。私が言葉を挿めぬほど熱っぽく川柳を話した。私もそれに答えた。

肯定も否定もして、衣着せず遣り取りした。そして理解し合い、確かめ合い、そして感謝しあった。

端折った頁に言いたいことがある　和子

この句の説明を求めたのも私である。

男同士ならば、ぶんなぐり合い、つかみ合い、血みどろの手で肩を抱きあい、酌み交わす歓喜の雰囲気である。誰にも明かさぬ二人だけの融け合った秘密である。

色即是空　痴は融けた愉悦哉　太茂津

亮空和香禅定尼　合掌

俳句数だん〳〵高く月を上げ

―木塚素石さんを悼む

仁部四郎

木塚素（すなお）さんを識ったのは、昭和五十年頃であったが、私の勤務する高校のPTA副会長と学校側の幹事という間柄であった。二人とも、まだ、川柳の道には入っていなかった。

木塚さんは、昭和三年に佐賀師範学校専攻科を出て、唐津の満島尋常高等小学校を振り出しに、昭和三十六年には長松小学校校長になられた。明治四十四年のお生れであるから若い校長と言ってよいが、昭和四十五年に唐津第一中学校長として退職されるまで、それぞれの年代において唐津・東松浦地区の義務制の学校のリーダーであった。

貧乏人の子沢山、というのは、戦前の社会では、いわば当然のことであったが、小学生の頃から家計を助ける働きがあったと聞いたし、南海ホークス黄金時代の遊撃手・木塚忠助さんは実弟だが、中学の学資を支えられたとも聞いた。

「素石」は、書のうえでの号であった。五十歳の頃から使いはじめられたらしいが、木塚さんの教育者としての実績、質朴で明朗な人柄が、公民館、青少年センターなどで活き活きと光彩を放ったのである。書道のお弟子さんも（謝礼をとって教えたのではない）ふえて、日曜日は公民館などのかけもちであったし、囲碁も好きであった。

川柳塔の唐津の句会に、かねて顔みしりの田口虹汀さんの紹介で登場したのは、昭和五十五年の四月で、六月号の〝川柳塔〟には、次の三句がある。

初給食いやなものまで箸をつけ
寿楽の日奉仕おしゃべりゲートボール
ねだられる色紙短冊老い愉し

七十歳近くになってからの川柳入門で、うまくなろう、沢山入選しようというイロケはなく、悠々として楽しむというところで、素朴といえば素朴な句が多く、また濶達で張りのある字で、川柳会の仲間に、ご本人が気に入った句を短冊に書いてくださるし、書き方も教えてもらった。

素朴な句といったが、むしろ、七十年の全人生の体験から沁み出る、素直な感慨というべきであり、時折、鋭い諷刺の句も吐き、また俳句の世界をも共有する透明さがあると言い換えるべきであろう。この小文の標題にさせていただいた一句は、その典型であり、ご本人もお気に入りの句であったろう。

春頃から肝臓が悪いということであったが公表された句としては、六月号の「川柳塔」五句が最後となった。

昭和六十年八月七日歿

「好学院磨鏡素石居士」の冥福を祈る。

立秋や遺墨片手の偲ぶ貌　あき
炎昼をかきわけて逝く蟬しぐれ　義美
荒海を多彩に越えて素石逝く　四郎
死を悼む立秋の陽の蟬しぐれ　正敏
文化祭前に巨星のおちる音　虹汀

初歩教室

題 ― 葉 ―

阿萬萬的

「葉」という課題になると、どうしても叙景の句が多くなるのですね。それとも私が日頃川柳は文字のスケッチであると言っているので作者が当てこんだのでしょうか。

夕月夜葉越しに見える川向う　草生
（木の葉越し川向うの灯は絵となりて）
ダイヤかと夕立青葉からキラリ　周三
（夕立の青葉の露に虹の色）
葉桜の下でスケッチ余念なし　千代女
（葉桜に風あり父子の画架を立て）
公園の日溜り老婆へ舞う枯葉　山久
（銀杏散る老婆の猫背も絵のひとつ）
落葉掃く秋がひそかに忍びより　昭治
（落葉掃く尼僧が絵となる京の秋）
文字ずり草支えるように寄り添う葉　ちよ
文字ずりは振擢と書くのが本当のようです。可憐なこの草も最近見かけなくなりましたね。百人一首の忍ぶもじずり誰ゆえに…。

作句の時期と発表との間にずれがあるのは致し方ありませんが、それなりに

梅雨あめに洗われ木の葉夏の色　久留美
（梅雨晴間木の葉はすでに夏の色）
梅雨のあと折鶴蘭も飛躍する　はる子
下五飛躍するを芽を伸ばし位にしては。
抜ける蒼空そよぐ葉先と調和して　弧舟
（抜ける蒼空桐の若葉がよく以合う）
広いおうちの長い塀葉っぱも人も知らん顔　悦子
（長い塀葉っぱも他人行儀なり）
草々の葉のつやつやと上り坂　節子
山里は青葉に包まれ涼をとる　晃世
（山里の涼しさ青葉の風がくれ）
葉桜や「静」を想う吉野路　寿美子
（葉桜の吉野路「静」をしのぶみち）
葉桜も又よし旅の無名寺　山久
（葉桜も又よし無住の過疎の寺）
葉の茂みかくれて蟬の声ばかり　新造
（葉の茂み名もない寺の蟬しぐれ）
また食べ物にも葉は顔を出していました。
すしを巻く葉には老舗のコツがある　保夫
（柿の葉すしの葉にさえ老舗のコツがある）
料理法聞いて舶来葉ッぱ買う　里子
（栄養価聞いて中国野菜買う）
大葉添えお造りの味引き立てる　芙久枝
（青もみじ添えて京都の味となる）
お粗末な椀種木の芽で引き立てる　はる子
（木の芽蓴菜京都の味のお吸物）
このほかに

しその葉に包みましょうよ母の愛　劔
しその葉の裙で引き立つ嫁の味　千恵子
病む人の膳へもみじ添えておき　久留美
中七一字足りませんね。もみじ葉とか青い葉にして見てはどうでしょう。

木の葉や落葉には土と故郷の匂いがするものです。

杉の葉を燻す蚊遣りの帰省風呂　章久
帰省風呂は固いので〝くにの風呂〟では如何。
笹舟が流し灯篭を先導する　繁男
（灯篭流しの先導となる笹小舟）
葉を切って髪飾りなる菖蒲の湯　白峰
（葉を抜いて髪飾りにする菖蒲の湯）
昔々の銭湯を思い出しました。
桑の木もあわれ蚕もあわれなり　義男
お蚕さんもこの頃はナイロンや中国産の絹に押されて……だんだんみじめに。
（桑の木も哀れに過疎の村となり）
子供の科学する眼の句ですかねえ。
孫蒔いた種子双葉出てVサイン　輝月
（孫の蒔く双葉の形もVサイン）
枯れた葉に似せる蝶々の生きる智恵　義男
葉の先のてんとう虫にも明日の意地　たゞし
明日の意地とは何を意味しているのですか
（手を出すと葉裏へ逃げる虫の知恵）
旅や思い出にもいろいろの葉があります。
友からの押し葉に旅情誘われる　春枝
押し葉は何でしょう高山植物かしら。
読みさしの本へ銀杏の葉をはさみ　麻黄

色あせた四つ葉に思いの古日記　サワ子
（色あせた四つ葉に思い出ある日記）
ようこそとフェニックスの葉が手を拡げ　輝月

新婚、日南海岸の思い出ですか。
街の寸景を一つ二つ。
公園の落葉集める奉仕婦　正之
（ＰＴＡ落葉集めるにぎやかさ）
廃品回収街巡回す朽葉散る　斉々
（廃品回収のマイクへ枯葉カサコソと）
家庭園芸、家庭菜園の句もあります。
朝の水緑が冴える植木鉢　博子
観葉樹愛の加減で葉の緑　悟郎
（観葉樹愛知っている葉の緑）
黄金の葉が出るという観音竹　やすお
（観音竹の葉に丹精の黄金の筋）
朝顔の双葉が老いる日を叩く　たかし
〝日を叩く〟私には解しかねました。
葉がきれいコリウスあちこち植えてみる　千代女
（コリウスあちこち植えてちょっぴり少女趣味）
茄子の葉の虫をとるのが老いの日々　ちよ
害虫はよくつきますね。いやになります。
薄緑去年の芋から芽が伸びて　はる子
我が畑は葉だけ立派とほめられる　やすお
（葉だけは立派と私の芋畑）
秋から冬へ葉は色々と感じさせます。
トウキビの葉すれ爽か今日立秋　斉々
（立秋へ唐黍の葉が絵にされる）

台風の近づきを知る木の葉ゆれ　白峰
（ひと雨来そうな風へ木の葉がちさく揺れ）
老いの手に枯葉の心しみじみと　温子
役目終えた安らぎ枯葉地にかえる　よし津
成程。私達老兵には厳しいですね。
晩秋を燃やし尽して散る枯葉　麻黄
（燃えつきて散るもみじ葉のなお赤く）
街路樹の葉が散りはじめ人惜しむ　高代
（プラタナスの落葉カサカサ人を恋う）
ハラハラと散る葉は風に逆らわず　てい子
落葉の散りてはかない世のさだめ　千恵子
私の古い句にこんなのがありました。
（幾星霜落葉も花も土になる）
黄葉見てくれ銀杏身構える　露芳
身構えるはちと行き過ぎ、叙景だけにしては、これも私の古い句に
（銀杏散る／／黄金の小鳥の舞う様に）
雑草と枯葉が語る紅い愚痴　たゞし
紅い愚痴とは飛躍し過ぎか、それとも自分達のグループへの自己批判ですかねえ。
丸坊主葉のない木々貧乏めく　昭治
（葉の落ちた街路樹冬へ急ぐ道）
枯れた葉へ虹を描いたかたつむり　劔
虹を描くとはちと言い過ぎ、私なら
（葉の下で冬を越す気の蝸牛）位かな。
泣いて泣いてまだ泣き足らず掃き足らず　悦子
余り長いので何とかしたかったのですが。
高野槇葉っぱに心経の声しみる　勝美

（般若心経聞いてるような高野槇）
病葉も押して形身の品となる　新造
（葉のいのち生かして母の草木染）
ここで葉でない葉の句
一枚の葉書が夢をつなぎとめ　国彰
（一枚の葉書生きてる年賀状）
ワンマンのふかす葉巻に平和見た　明吉
（ワンマンのふかす葉巻が見た平和）
さて最後は文句なく戴いた句です。
散りそうな葉っぱが揃う桐畑　草生
針葉樹無惨な姿　山崩れ　サワ子
いやな事もう忘れよう目に青葉　実男
八つ手の葉手相を見よと言うように　繁男
蓮の葉が懺悔の涙溜めて居る　悟郎
合歓の葉の憂を聞いた昼下り　てい子
夏落葉手にした訃報まだ若い　てる
葉をもたず燃える淋しき曼珠沙華　高代
結論を先に言わせる若葉道　たかし
寡婦ひとり葉蘭見事に活けて住む　よし津

◇

題　「夢」　**10月10日締切**（12月号発表）
ハガキに5句以内
宛先　「松」　11月10日締切（1月号発表）
〒598
泉佐野市中庄一〇八一—九九
阿萬萬的

大衆

小幡里風選

大衆の意見も分かる台所　木魚
大衆のその端にいてよく眠る　てる
暴走もある大衆の縄電車　枯梢
人だかり覗いてみればロケーション　久留美
大衆の風呂で会議の婦人連　カネ
いいじゃないかいいじゃないかと人が増え　晴彦
大衆の味がこぼれる縄のれん　雀踊子
大衆の独楽は思わぬとこで舞い　大柏
大衆に推されダルマに目が這入り　虹汀
大衆の涙は色がよく変わり　四郎
大衆の中の一人に君がいた　義美
勝って泣き負けて泣いてる甲子園　高明
新聞の隅で大衆の声まとも　悠也
大衆の下駄が音して盆踊り　正江
大衆の雑誌裸でよく売れる　雀声
大衆の一人人垣おしわける　蕗児
大衆の中で泳いでいるタヌキ　豊
戎橋にんげんくさい風に遇う　あやめ
肩書の無い大衆で生き伸びる　洛酔
大衆の中の一人に弾丸あたる　義男
大衆の銭を集めるコマーシャル　勝美
後から押すのは大勢だから負け　与呂志
大衆のくつろぎ風呂屋の湯が溢れ　道子
大衆へ丼めしがよく似合い　忠三
バラバラにすれば大衆おとなしい　宵明
大衆を前に辻説法が悦に入り　寿美
大衆の中ではこんな小さい僕　本蔭棒
大衆の一人になって抵抗す　七面山
大衆と共に生き度い職に就き　春日
大衆におもねる週刊誌の見出し　素身郎
大衆に眼鏡違いが独り居る　代仕男
この顔は大衆むきという笑顔　貴代美
大衆を味方と思うた日の誤算　重人
四苦八苦せぬと大衆らしくなし　弘朗
大衆の真ん中にいる安堵感　はじめ
ひとり言大衆聞こえぬ貝でいる　秋峰
大衆の味方も椅子が欲しくなる　可住
大衆が皆右向けばどうしよう　ふみ
大衆の秘密は知らぬ遠花火　規不風
大衆のどよめき逆転劇を見せ　玉恵
大衆の雑踏にいる孤独感　喜代子
大衆をマンガに漬けて置く平和　高子
大衆の中に爪研ぐ鬼が居る　千賀子
地
大衆に四季の彩あり詩があり　文平
天
大衆の目が黒幕を許さない　芙久枝
軸
大衆も嘘つきばかりで世は平和

茶

原独仙選

お茶の間に皆んな集まるいい話　あやめ
お茶だけの筈のお客が腰あげぬ　蕗児
茶のスーツ似合う年齢です倦怠期　芳子
茶ぶくさの色に感ずる静と動　達子
お茶漬けで流しこんでる妻の留守　忠三
茶一杯よばれて愚痴を聞くつらさ　七面山
新聞少年母の温味の緑茶呑む　高明
後添えの茶呑み友達酒が好き　幸一
お茶漬けがこんなにうまい旅帰り　大柏
こんぶ茶へ言葉を飾る大安日　雀踊子
もう燃えぬ二人気楽な茶呑み友　優
お番茶の香り庶民の味がする　秋峰
茶の道は禅に通ずるものと聞く　春日
新茶の香今年は畳も替えました　素身郎
埋れ火を吹きふき茶飲み友が出来　軒太楼
一畳を歩く掟のある茶室　弘朗
せせらぎを焚火で沸かすお茶の味　悠也
湯ざましに秘訣玉露の舌に溶け　代仕男
決断へ少し濃い目のお茶にする　洛酔
掃除機が茶殻の用途奪い取る　頼一
ウーロン茶健康ブームの波に乗り　正之
ほんとうの話が出来るお茶の仲　与呂志

齢を経て夫婦もお茶の友でいる　多賀子
宴会の後は茶漬けでしめくくり　米朝
手作りの番茶故郷の味がする　倫子
ゆっくりとお茶を出されて断わられ　紀女
退院を囲み茶の間が温かい　冬子
結構なお手前嫁ぐ日は近い　雄々
お手前へ青い眼の客かしこまり　どんたく
茶柱の立った話がこじれ出し　久仁於
お茶で済む客は羊羹厚く切り　はじめ
この客は番茶で済まぬ義理があり　兼次郎
お茶の席みなゆとりある顔で来る　〆女
茶室とは正座の足の痛いとこ　妻子
茶も花も師範良縁恵まれず　悠泉
滝を見る茶店で決めねばならぬ事　規不風
いい話はずんでお茶を入れ替える　重人
佳
手作りのお茶で門主は話し好き　可住
落語家の手はうまそうに茶を啜り　義美
炎天下着物で急ぐ茶の師匠　よし津
茶のかおり自家栽培の母の味　貴代美
雑念を捨てて茶室の孤に座る　文平
人
宅急便解けば聞える茶摘歌　右近
地
茶断ちした母に反抗など出来ぬ　佳雲
天
スナップを効かす茶筅のリズミカル　伊津志
軸
白足袋が畳を辷るお茶の席

勢い

大林　曲ん手　選

河内音頭に変ったとこから活気づき　さと美
勢いに逆らう足並揃わない　雀踊子
勢いで買って半値と妻の愚痴　かすみ
句読点打って勢いたしなめる　ただし
鉢巻きでデモの勢い見せて居り　はじめ
少年の勢い今日も背が伸びる　重人
善人の反抗酒の余勢借る　宵明
ライバルの勢いグラフ伸びてくる　山久
勢いを見定めてから腰を上げ　素身郎
勢いに乗ればツキまで味方する　素身郎
老いたれど勢いのある筆の跡　春日
ギネスブックに載る勢いで父は生き　和友
優勝の勢い本音が伏せてある　可住
勝名乗り勢いのよい玉の汗　新造
下り坂になると加速がついて来る　高子
勢いに乗れば女神も惚れて来る　本蔭棒
威勢よく切った啖呵で書く辞表　幸一
天を突く勢いのある筆の先　米朝
ブレーキの利かぬ勢いにも困り　弘朗
よい話勢い込んで姉が来る　よ志子
勢いを小便小僧に盗まれる　正敏
通知表孫勢いを携げて来る　あき
行き先は勢いだけが知っている　紀雄
勢いに乗って仏滅気にならず　文平
勢いが波にのってる追加点　寿美
勢力を結集ここぞと打って出る　軒太楼
佳い知らせ文字も走って躍ってる　ちよ
勢いに乗った仲間の三次会　豊
二番目に従いて勢い矯めて置く　規不風
駅前の流れで街の伸びを知る　明水
いい話向うが勢い込んで来る　三五島
応援も勢いづいた逆転打　悠泉
水かけ不動老いの勢い試される　悟郎
修羅越えた足の勢いおとろえず　玉恵
勢いがあるから少し貸してやり　里風
勢いを支える女の汗がある　砥代
佳
勢いが今日の勝利の窓にする　木魚
台風の勢い電波に乗って来る　兼治郎
勢いを増幅したきカメラアイ　どんたく
勝運に乗ると木馬も風を呼び　大柏
勢いに乗じ一気に攻める城　公一
人
紅一点交え勢いづいてくる　佳雲
地
完走をする勢いを貯めておく　忠三
天
勢いは本家を抜かぬことにする　雄々
軸
王手飛車かけて勢い取戻す

柳界展望

集録・板尾岳人

★川柳人協会主催　昭和60年文化祭川柳大会並びに第20回川柳文化賞授賞式
日・11月3日11時
所・赤坂公会堂（地下鉄丸の内線・赤坂見附下車）
雑詠1句（旧作可）
宿題（第1部・出席者）
希　望　山本宍道郎選
前　列　藤原時化緒選
　　狐　浅田扇啄坊選
リラックス　竹本瓢太郎選
深　い　野中いち子選
拾　う　堀口　北斗選
兄　弟　佐藤　正敏選
特別課題　野村　圭佑選
会費　千五百円
第2部（投句者・締切9月30日）
未　来　藤島　茶六選
後　列　磯部　鈴波選
　　虎　和田遠矢太選
ストレス　関　水華選
浅　い　荻原非茶子選
捨てる　鈴木　泉福選
姉　妹　臼倉　寿夫選
★第八回神戸川柳大会
日・60年10月10日午後一時
所・神戸市立総合福祉センター5階（湊川神社西門前すぐ）
兼題と選者
人　気　浜辺稲佐嶽選
振　る　光森　良選
　　羽　藤田　紫石選
　　奥西　弘昌選
笑　う　小松原爽介選
歴　史　去来川巨城選
続　く　平山　繁夫選
　　船
★第18回みのお虫供養川柳会
日・60年10月6日午後一時
所・みのお・法林寺
　　箕面駅滝道百米
兼題と選者
変　人　杉本一本杉選
商　売　石川　勝選
弁　当　田中喜代志選
こころ　岩井　三窓選
　　虫　神谷娯舎亭選
主催・番傘みどり川柳会
★第14回四国番傘川柳大会
日・60年10月20日AM10時
所・高松市総合福祉会館
約　束　坂下　久子選
電　話　若草はじめ選
帽　子　松岡十四彦選
看　板　谷口　幹男選
脱　線　竹村　温夫選
別　居　安井　久子選
ジンクス　田中　好啓選
濡れる　片岡　湖風選
主催・四国番傘クラブ
★第15回川柳「路」誌上全国川柳大会
課題「水」
選者＝石井有人・佐藤正敏
杉野草兵・山村　祐・定金冬二・吉岡龍城・関　水華
二句吐・同一句を7組提出
出句料千円
締切・10月20日　投句先〒250小田原市鴨宮472―2・川柳路吟社誌上大会係
★緑第6回誌上競選
課題「川」・「雑」各5句
選者＝内山雅子・奥野誠二
小林瑠璃

昭和60年度大阪文化祭
第37回　川柳大会

日時　昭和60年11月16日（土）11時開場
会場　大阪中央公会堂中集会室
地下鉄・京阪「淀屋橋」下車
講演　「口伝えの文芸」　坪内　稔典
「時事雑詠」　広瀬　反省選
宿題　「紙」　北川アキラ選
「反射」　永田　帆船選
「ひらく」　鍋島　十歩選
「雲」　梶川雄次郎選
「灯」　西尾　栞選
席題　当日2題
各題2句・締切1時
出句は出席者に限ります。
賞　秀句に大阪府知事・市長・府市教育委員長から「川柳賞」贈呈
会費　五百円（作品集代を含む）

主催　大阪府
大阪市
大阪府教育委員会
大阪市教育委員会

投句先＝〒470－21愛知県知多郡東浦町森岡字下今池5　渡辺和尾方＝川柳みどり会編集室あて

★新刊紹介

佐藤桃子川柳作品集「花あかり」桃の木からたんぽぽの花を咲かせた著者の花の香り豊かな作品集

★「川柳八百羅漢」日下部舟可、編集。著名人、ドラマの中の人物などを川柳に生かし、うなずかせる八百句

嘘をいう枝雀が顔をかがやかせ（岩井三窓）

★岸本信江（岸本水府夫人）8月11日心不全にて逝去。享年85歳。

★先輩・友・仲間・同志の情愛は認め合うということで、年と共に、誇れるものでなければならぬ。

ふあうすと・去来川巨城

★すぐれた作家意識や使命感とともに、「横のつながり」を大切にすることこそ柳界全体の融和を生み、川柳作品の若々しくて正常な発展向上につながるのではあるまいか。

川柳新京都　北川絢一郎

★この頃の川柳界は、総てがそうだとはいえないにしても、作品よりは組織の上に乗っかって、それを上手に利用している人、上の人が早く消えるのを、じっと辛抱強く待っているのではなかろうか。

一枚の会　定金冬二

▽**同人消息**△

★兵庫県芸術文化祭県民川柳大会で、西口いわるさん（同人）が毎日新聞社賞を受賞された。「農業を継ぐ決心の祭り笛」いわる

★浦野和子さん（同人・和歌山市）が8月19日午前2時、腸癌のため逝去された哀悼。

★第39回青森県川柳大会（9月15日）は青森市の東奥日報社本社ホールにて開催特別課題「星」を東野大八氏（相談役）が、「捨鉢」を工藤甲吉氏（同人）が選をされ盛会だった。

★青木惜春氏（岐阜県）の奥様が、7月30日に他界された。

▽**お便り**△

■25年前の自動二輪免許が生きていたので、思い切ってスクーターを買った。これも若返りの一つ、もっぱら安全運転御身大切に頑張らねばと、ハンドルを握っている。

山内　静水

■今（8月11日）黒海沿岸のオディサにいます。地中海を回りイタリア、フランスに行きます。

田中　正坊

■四国一週の旅をしました。赤川菊野さんと中国旅行以来の出合いに喜び語らいました。

平野百合子

■最近すっかり足腰が弱ってしまい寝たり起きたりの生活をして居ります。

傍島　静馬

■山陰海岸の眺めと涼しい風を送ります。

小林由多香

新同人紹介

土橋　蛍
―紫香・由多香・洋々推薦

中原　汲香
―紫香・由多香・洋々推薦

中原　みさ子
―紫香・由多香・洋々推薦

淡路　ゆり子
―由多香・独歩・菩句推薦

広本　文子
―由多香・独歩・菩句推薦

本社　九月句会

メンズファッションセンター（MFC）
九月七日（土）午後六時

ひる過ぎ激しい雨があり、さしもの酷暑も漸く終りに近づいた気配だ。

会はまず、先日亡くなられた浦野和子さんを悼み黙禱を捧げる。また一人、惜しい女流作家を失った。

西田柳宏子氏のおはなしは、経験の尊さ、大切さについて。若かりし頃の軍隊での思い出話は、私などの世代には懐しいものであった。川柳も自分の体験から生れたものは人の胸を打つ。句は作るものでなく、生まれるものだとの持論で結ばれた。

呼名賞は岩内外吉、西口いわる、金井文秋の三氏。

今月の月間賞は氏林洋敏氏が獲得した。

（S）

（受付―年代・月子）
（記録―射月芳・亜成・山久）
（進行―天笑）

出席者―凡九郎・重人・隆二・登志代・寿美子・章久・美代子・金太・三十四・史好・鬼遊・洋敏・春蘭・柳伸・美房・外吉・トメ子・頂留子・弥生・景子・蕉露・三男・形水規不風・岳人・寿美・山久・栞・英子・悦郎笛生・一郎・寿馬・紀雄・狸村・紫香・白渓子・雀踊子・柳宏子・薫風・満津子・道子・天笑・月子・勝美・冬葉・武庫坊・年代・萬的・千代三・喜風・幸・太茂津・庸佑・節子正坊・いわる・みつ子・白兎・弘生・射月芳文秋・久子・英壬子・楓楽・度・季雄・亜成作二郎・泰子・吸江・寿子

席題「本」　墨　作二郎　選

本を枕に雲が流れているベンチ　亜成
本屋から出ると市場へ足が向く　年代
阪神が負けて古本屋をのぞく　英子
ライバルの読んでる本が気にかかり　庸佑
すこし不安で積木くずしの本を読む　幸
本棚のうしろにかくしてある知識　武庫坊
原書読み疲れてマンガ読んでいる　幸
パートなら秋は本屋に勤めたし　史好
また逢える本を一冊借りておき　外吉
片っ端から忘れる本を積んでいる　年代
泣くも笑うも本一冊のドラマかな　寿子
お料理の本が眠ってる共稼ぎ　道子
中国語の本に日本語書いてある　太茂津
本棚に全集登ねしたまんま　いわる
行きずりの本屋で忘れた字を調べ　柳宏子
老眼鏡疲れたとこで本を閉じ　笛生
本置いてきっちり決まる応接間　庸佑
リルケ詩集二十歳の僕がそこに居る　みつ子
天牛で汚れた本を買ってくる　紫香
よれよれの本をならべて生字引　度
処分するつもりの本で座りこみ　いわる
ライバルがいつも本屋にいる怖さ　雀踊子
新刊書秋の夜長を予約する　いわる
熟読玩味せよと恩師が歎異鈔　三男
跨がれるとこにビニ本置いてある　天笑
お惣菜の本を夫が買うてくる　景子
犯人がわかるページで客が来る　外吉
本何冊読んだら馬鹿になり切れる　楓楽
恥ずかしい本で表紙をつけ替える　外吉
火事にでも遭わんと整理つかぬ本　天笑
同じ本買って友情確かめる　洋敏
トルストイすえた匂いで父と棲む　白兎
詩集読むこおろぎの髭乾くとき　作二郎

席題「レタス」　岩内外吉　選

牛が草食う人間はレタス食う　太茂津
敗けた日の苦いレタスをたべ残す　幸
パーティーの大皿レタスだけ残り　みつ子
レタスみたいな妻が家庭にいてくれる　景子
レタスならママの分まで平らげる　久子
血圧がレタスレタスの日日にする　寿馬
レタスばりばり朝のコミック幕があく　武庫坊
レタスよレタスむなしく恋は消えました　年代
野菜サラダの上底つとめてるレタス　柳宏子

新鮮と書いてなくとも買うレタス　千代三
きっちりと子供はレタスだけ残し　柳宏子
レタスよりパセリを好む栄養価　柳伸
山菜の宿でレタスとソーセージ　寿馬
温室で育つレタスに冬は無い　狸村
食卓をリッチにさせるレタス盛る　三男
主役にはなれぬと知っているレタス　寿美
レタス一枚上手に嘘が隠せない　幸
値上りを待ってレタスは出荷され　美代子
市場かご軽い財布を見たレタス　いわゑ
まだレタスに馴染まぬ父のお晩菜　美代子
食パンとレタスの朝に飼育され　一郎
マヨネーズレタスにかけてやもめです　一郎
豚カツをぶあつく見せているレタス　鬼遊
レタスにも女心を見せて盛る　紫香
レタスのみどりわたし只今ダイエット　萬的
レタス畑日日の相場へ泣き笑い　登志代
レタス半分独り暮しに馴れてくる　英子
細い首君はレタスを食べ過ぎだ　度
レタスばかりつまんでいますばててます　弥生
当然のようにレタスを盛る平和　千代三
グラマーの悩みを知っているレタス　正坊
腹が出て女房のレタス攻めに会い　蕉露
キャベツからレタスに変る歯のぐあい　柳伸
毎日のレタスに揉めている夫婦　勝美
水栽培レタス疑問の栄養価　度
好きな女がレタスすすめるので食べる　規不風
老夫婦レタス薬のように食べ　道子
レタスどうするお見合いのおちょぼ口　外吉

兼題「亀」　江口度選

亀の夫婦に待っている坂ばかり　妻子
温泉の余熱でスッポン育てられ　美代子
日照り続きで亀はゆっくり石になる　作二郎
ぐずだから亀ののろさは笑うまい　文秋
産卵の涙で亀が昇華する　柳伸
ひたすらな歩幅を亀として守る　幸
うらみつらみを亀は眠りの中で聞く　白兎
龍宮の亀いつからか失語症　白兎
亀の首誰も信用しておらず　月子
玉手箱亀は中味を知っていた　笛生
過保護には絶対しない亀の母　英子
偏差値が亀の逆転許さない　正坊
亀の眼にせっかちすぎる人ばかり　洋敏
風向きを思案している亀の首　英子
亀の池亀の数だけある祈り　楓楽
つまずいて亀の歩みを笑えない　月子
産み終えた亀にやさしい浜の砂　英壬子
飛行雲亀ものって見たくなる　いわゑ
出世する亀で表情くずさない　英壬子
海亀の涙は北の星になる　武庫坊
ふるさとは子亀が海に帰る頃　吸江
甲羅干す亀も夕立ち待っている　勝美
ばあちゃんも亀もお彼岸待っている　久子
甲羅干す亀は浮世と別に居る　紫香
好奇心少し出すぎた亀の首　節子
海亀の涙は明日を見るために　幸
逆流へ亀の一歩は負けていず　寿子

第32回八尾市文化祭
市民川柳大会

とき　昭和60年10月10日(祝)正午開場
ところ　八尾市商工会議所3階大ホール
近鉄大阪線八尾駅下車南300m
八尾市役所向い側

会費　一、○○○円(呈作品集・鉢植花)
お話　田中好啓氏
題と選者　(席題)
「軽い」　山本翠公選
「藁」　土田欣之選
「人形」　河内天笑選
「橋」　卜部晴美選
「泡」　亀山恭太選
「知恵」　中尾藻介選
各題2句・締切午後1時半　西尾栞選
◇投句だけの方は〒581(八尾局私書箱第9号)八尾市清水町1丁目1－6八尾市立公民館川柳係へ。9月30日締切。作品集代郵券500円同封。

懇親会　三、○○○円(当日受付)
主催　八尾市
八尾市教育委員会
八尾市立公民館
後援　八尾菜の花句会

銭亀の緑と祭りの紅い灯と　寿馬
先頭の亀はラッパを吹きたがり　隆二
亀の甲羅が乾き切ってる神の庭　年代
龍宮を恋う亀月夜の海へ出る　形水
二十一世紀来ようが亀はマイペース　形水
亀の背にお伽ばなしが風化する　滋雀
美しい話が好きな亀の耳　柳伸
母になる亀の涙は透き通る　美幸
浦島を重いと思う帰り道　外吉
宵の海亀産卵場所を読んでいる　度

兼題「器用」　樫谷寿馬選

錠開けてくれた器用を考える　滋雀
不器用を看板にして人頼み　幸一
不器用な男に安心せぬように　天笑
とても器用な白い指から水がもれ　いわゑ
脱サラの器用転々職をかえ　喜風
聖徳太子器用な耳を持っていた　度
私ならもっと器用に逢いに行く　久子
不器用に器用の方が使われる　弘生
落書きがとても器用に書いてある　節子
不器用な愛が幸いした夫婦　年代
不器用な男で女が離さない　規不風
別れても器用に絆ははなさない　弥生
よその事なら器用にまとめて来る女　規不風
ファスナーの背中へ器用な手が伸びる　亜成
不器用な夫に従いてゆく安堵　登志代
竹細工無骨な父の指捌き　寿美
ライバルが器用に鮎の骨を抜く　幸
不器用なくせに味付格別で　武庫坊
車座のひとり器用に舵を取り　冬葉
不器用な方の男を信じよう　重人
自慢だけのせる器用が棚を吊る　紀雄
爪を染めると器用に折れるだまし舟　幸
器用な男で便利に使われる　雀踊子
無器用な女が鈴をつけにくる　隆二
不器用だけれど結婚だけはする　千代三
不器用な指にこめてる千羽鶴　太茂津
子沢山器用に羊羹五等分　勝美
ちと器用なばかりに熱が湧いて来ず　萬的
けったいな顔して器用な指を持つ　登志代
釘ひとつ打っても器用と分る音　白渓子
まごころで不器用なりに花咲かせ　満津子
ほめられて一つ覚えの皿まわし　鬼遊
不器用な夫婦ポツリと月をほめ　吸江
なまじ器用で全力投球などしない　楓楽
祭笛父の器用をゆずれずに　作二郎
器用さに定年過ぎた定期券　柳宏子
器用さに溺れて建てた兎小屋　美幸
作ったと言っても信用してくれず　紫香
不器用でいつも貧乏しています　鬼遊
無器用な血筋を笑う竹トンボ　寿馬

兼題「干す」　板尾岳人選

まっ白に洗って干して母帰る　紫香
借り傘を干して情を温める　寿美
よくしゃべる女の口が干してある　弥生
稲の穂が干されて秋が深くなり　洋敏
絵日記にふとんを干したことも描く　作二郎
虫干しで女系家族の彩となる　秋峰
裏切りのゆうべの嘘を干している　美幸
恥ずかしい物はずかしく干してあり　鬼遊
洗濯機と琵琶湖の水位など話す　弘生
爽やかに少年が干す濡れ雑巾　白兎
真白に干して女の自負とする　泰子
仙人が留守薬草が干してある　雀踊子
幸せな女で白を白く干す　楓楽
白旗もときどきは干す鬼である　幸
お手柄の様に襁褓を嫁が干す　耕花
ハワイまで行って背中を干して来る　三男
むし干しで女の過去が消えるのか　寿子
十階の高さで布団干してある　笛生
赤ちゃんが居るのにおしめ干してない　満津子

60年本社句会全出席者（9月迄）

松本一郎・藤村亜成・宮園射月芳・飯田悦郎・北勝美・橘高薫風・高杉鬼遊・玉置重人・岩本雀踊子・二宮山久・長谷川春蘭・黒川紫香・松下蕉露・吉川寿美・野村太茂津・春城年代・板尾岳人・稲葉冬葉・高橋白兎・吉岡美房・金井文秋・北野久子・西出楓楽・松原寿子・辻白渓子・神谷凡九郎・阿萬萬的・奥田みつ子・高田美代子・堀端三男・春城武庫坊・西田柳宏子・津守柳伸・芳地狸村（34名）

悪いこと考えている甲羅干し　鬼遊
夏帽子干して私の秋にする　美幸
透明な空大根を干してある　射月芳
堂々と干せぬパンツを何故洗う　幸一
性格の形でタオルが干してある　節子
物干しに子の成長が干してある　あいき
早々に洗濯干して今日がある　久子
干し草の匂いにむせたかくれんぼ　みつ子
借り傘の情を妻が干してくれ　雀踊子
一徹の芯を支える干し鰯　紀雄
男ひとり人目につかぬとこに干し　史好
雑巾を干したら昼寝する女　天笑
休日に干すわたくしと言う他人　幸
干し物に君は試されないように　凡九郎
網干して父冷房のパチンコ屋　太茂津
景気いい話も無くていかを干す　笛生
窓際に干されて欠伸ばかりする　千代三
賭に敗けた男がシャツを干している　作二郎
羽衣を干したい松が見当らぬ　美代子
白を干す時の女は美しい　三男
敷布もう乾いています赤トンボ　度
雑巾を干して未練を振り切ろう　幸
干し魚いくさはさほど遠くない　鬼遊
二重橋渡ると下着が干してある　岳人

兼題「無事」　黒川紫香選

今日も無事何も書く事ない日記　与呂志
雪中登山無事と思えど気にかかる　綾珠
無事祈る家族へ容赦ない報せ　妻子
飛行機に乗る程金が無くて無事　耕花
千鳥足上手に曲って無事帰る　秋峰
一日を無事に過した終い風呂　幸一
何ごとも無かったらしい娘の笑顔　英子
毒舌がまだ衰えず無事な日々　幸
一枚のハガキに無事がこぼれそう　規不風
着地して機内思わず手を叩き　外吉
無事な顔見るそれだけを喜ばれ　雀踊子
無事な声聞かせて犯人金のこと　冬葉
皆無事と書ける幸せ噛みしめる　武庫坊
保険金むだに終った空の旅　鬼遊
無事着いた電話がないので気にかかる　亜成
夏休み無事に終ったカレンダー　節子
無事な声とたんに叱りつける母　頂留子
無事ならばいつかは逢える空の青　いわゑ
余りにも無事に終った離婚劇　寿馬
無事と知るときから腹が立って来る　頂留子
柘榴が一つ白壁の前で無事　白兎
無事だから今日もかけてる長電話　幸
まわり道一番無事な道を選る　節子
ユニバ無事終り警察ほっとする　度
無事な夜は夫婦静かに箸を置く　美幸
深呼吸今日もたしかに無事である　吸江
無事だけを知らすに年賀状を書き　天笑
皆無事に着くと思った日航機　久子
札所めぐりのバスが無事とは限らない　史好
無事だから便りはせぬと筆不精　一郎
無事でいることにしてダイヤル廻さない　重人
無事だった報せに馴れた山おとこ　笛生
八ッ裂きにしたい男の無事祈る　太茂津
無事産めるなら男でも女でも　文秋
台風一過うちの看板無事だった　形水
無事だったから語れます冒険記　泰子
三百六十五日無事に過した飯茶碗　寿美
無事の日がずっと続いている不安　正坊
一日の無事へ静かに香を焚く　道子
無事な日々我が家朝顔咲いてます　萬的
無事着いた電話は学資代のこと　白渓子
浄土まで無事に着いたか夢も見ず　楓楽
タラップを続々降りる無事な顔　寿馬
トラブルを無事に治める顔を借る　文秋
洗濯物の白さへ無事な日々つづく　萬的
四十年無事に務めた足洗う　隆二
無事故の日明るい話題も出るニュース　満津子
茄子も胡瓜も無事に漬かって母の夏　作二郎
無事な顔見るまで母は起きている　洋敏
汗拭いて無事に終った手術台　紫香

（清記・楓楽）

■**訂正**

☆8月号79P　席題「タオル」の第一句「しんじ湖に今日はタオルの舟を漕ぐ」の作者は**規不風**氏でした。

☆9月号4P下段　舟本与根一は舟**木**与根一の誤りです。お詫び致します。

花地柳壇

締切毎月20日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。
担当・清水健司

川柳サークル卯の花　辻　白渓子報

耳に栓して聞いておく負け惜しみ　白渓子
負け惜しみばかり人生コップ酒　越子
負け惜しむことも無くなり破れ傘　秀男
負け惜しみ言っては見ても負けは負け　一郎
負け惜しみ娘とペアで厚化粧　高子
負け惜しみ涙はそっと拭く強気　明代
唇をかんだおんなの負け惜しみ　眉水
生き甲斐は毒舌だけと負け惜しみ　みつ子
財産は無いが自由に生きてきた　河瀬芳子
負け惜しみ人間言うときっと来る　凡九郎
美しい素足ばかりでない海辺　里子
信仰の素足のまんま火を歩く　杜的
シンクロの日本の素足メダル取る　さと美
引く波が素足のうらを嘗めてゆく　陽露子
花道を素足が走る名女形　多賀子
風紋をすまなく踏んでいる素足　百合子
下むきな素足に出逢う百度石　静江
偽善者の素足は黒いかも知れず　和友
畳替え素足が知っているむかし　年代
お田植の素足に神も見とれてる　求芽
妻の素足きちんと爪が切ってある　笑雪
夏が好き半袖が好き白がすき　逸
半袖にルンルン気分でペダル踏む　享子
半袖に肘の置場を思案する　武庫坊
半袖に上衣が欲しい喫茶店　よ志子
半袖の汗が手につく満員車　花代子
半袖をちょっとまくって着る息子　スミ子
お悔みを言う半袖を見詰められ　水客
半袖へ海は素直な風になる　如洲
半袖で言い度い事を言うて去に　鼓城
半袖の部長に制服叱られる　紫香
先頭が受ける覚悟の強い風　盛雄
いじめっ子家に帰っていじめられ　四郎
気まぐれな風が囁くスキャンダル　松川芳子
遠花火別れの便り読み返す　恵美子
外ばかり向いた花にも水をやり　暢子
子の電話なければ無いで又案じ　あき子
積木くずしの星もいるだろ天の川　志津
冤罪の重さ知ってる梅雨の空　もも子
色即是空坊さんフォーカス買うて行き　とおる
中の下でいつも耐えてるおじぎ草　千歩
夏風邪に負けたか鬼がおとなしい　鬼遊

川柳高知　川竹　松風報

鍵なんかいらぬ平和な町に住み　登舟
幸せは心に鍵のない夫婦　和興
鍵の束人間不信ぶらさげる　草風
合鍵を渡す男のミステリー　節子
身に余る弔辞を聞いている柩　佳風
冒険もしたらと女真面目すぎ　康子
ワンテンポ遅れる妻と恙なし　千鳥
気まじめの男が困る旅の宿　竹萌
鍵かけた心へ男遠く住む　菊野
早起きの秘訣なんでもない早寝　朱坊
とまり木でひとり飲んでる泳ぎ下手　幸泉
まえうしろ居るから蟻の疑わず　弘生
夫や子の話そのまま日記書く　春枝
天秤にかけた恋です離婚沙汰　松風
功労賞あげたい妻の定年日　三吉

東大阪川柳同好会　斉藤三十四報

裸一貫綱へ執念もやしてる　三十四
すれすれ迄脱がせて美人コンテスト　右近
赤裸々に言うが悪気のない上司　公一
湯上りの裸見ている簾ごし　愛論
湯上りの肌まだまだ艶があり　美子
すっぽんぽん孫大声で逃げ廻り　喜一郎
ブロンズの裸婦へ一閃稲光り　孤舟
素っ裸になると言いたいことが言え　柳影
アメリカで裸外交する力士　弘生
西成で今日いちにちのはだか銭　湖風
路地裏の気楽さ裸の時世論　滋啓
妻と子の重さに堪えている裸　信治
逃げまわる裸手をやくバスタオル　頂留子
食中毒減らす冷蔵庫の普及　綾珠
冷蔵庫漬物桶も入れてある　勝美
熱帯夜青息吐息の冷蔵庫　章久
ただいまと一直線へ冷蔵庫　春蘭
冷蔵庫を何度も開けている暑さ　文秋
夏休み孫と仲良い冷蔵庫　良京
冷蔵庫満たして徴を見た不覚　喜風

城北川柳会　野呂　右近報

大衆の中に私も知らん顔　静子
スペイン語ペラペラの友羨まし　ふみ

お茶の味しみじみなつかし老いの坂　寿美礼
八月の雲に祈りを忘れまい　静　歩
季節の茶心豊かに楽しんで　芙久枝
お茶席の雰囲気が好き忙中閑　千世子
大衆に天皇帽子で応えられ　右　近
一人来て孫孫なりに気を使い　テルミ
雑音はそれぞれに根が生えて居る　悟　郎
足許にあった四つ葉のクローバー　満津子
茶会でははねっ返りも膝揃え　晴　子
花火消えると余計に闇が深くなる　綾　珠
おうすが出作法知らずが汗を拭く　久留美
お茶会に銘ある陶器顔揃え　晃　世
ティータイム嫁と姑の仲を持ち　達　子
死者生者それぞれ悲しい山くずれ　倫　子
単身赴任上手になった目玉焼　山　久
席ゆずる暇なく居眠りして仕舞い　佐津乃
後援をさせられファンにやっとなり　新一郎
日焼けてもやっぱり女化粧する　星　斗
大衆は弱い者に味方する　達一郎
大衆の意欲をそそるジャンボくじ　正　之
葉鶏頭秋の佗しさ知らぬげに　道　子
熱帯夜不眠の裏で実る稲　頼　一
嫁が捨て姑が拾う古火鉢　麻　黄
晩酌が旨い何でもない日だが　ただし
泡一つ大河に浮いて七十年　喜代子
高級茶よばれて夜が眠られず　午　郎
山村の馳走漬物で茶をよばれ　茂一郎
難題をまとめ飲み干す冷えたお茶　市　郎
夕顔に面影偲び手を触れる　康　世
わが影をじっと見つめて歳思う　八　重
茶柱に夢だけは見て人は来ず　カ　ネ

麦茶一気炎暑の舗道歩み来て　節　子
勝ちゲームビールの味もぐっと冴え　温　子
二十一世紀の夢を育てる柿の種　公　一
お茶にする汐時知って居る内助　弘　生

川柳後楽　井上柳五郎報

それぞれの持ち味がある夫婦独楽　玉　水
持ち味は優しい母から教えられ　博　友
持ち味を生かせば男の顔になる　桃　風
整形をして持ち味の笑顔消え　青　銅
それぞれの持ち味出してひとつの輪　信　善
プレゼントするあてもないチョコ買い　敏　昭
プレゼント老いは心で手を合わせ　吟　平
母の日のプレゼント選る初サラリー　勉
我が撲つ素手のいたみに愛をそえ　進
そして又じっと耐えてる母の素手　健　一
魔がさして素手で摑んだのは火の粉　たけ志
幸せをつかまえました素手だから　草　風
大臣も道連れ三光倒産し　佐加恵
走り書き太い絆となった遺書　幸　好
人類に神は翼を与えない　哲　郎
寿し飯をさますうちわに汗もとび　美智子
美術的価値で細ぼそ団扇生き　柳五郎
持ち味を出す間も無くて寄り切られ　進　平
二人して持ち味生かす人生譜　照　路

南大阪川柳会　中川　滋雀報

折れるとこ折れるさすがに苦労人　恒　明
そこまではさすがに聞けぬ母娘でも　文　秋
さすが奈良でかい仏に仁王さん　善　信
セールスの舌は流石に練れている　庸　佑
陶工の手には素直な土である　弘　生
目分量さすがは母の味加減　寿　美

父の背に仕事がきついと書いてある　楓　楽
いい仕事した日の父のはずむ酒　隆　二
手配師に笑顔が戻る雨あがり　柳　伸
すばらしい顔だ仕事をしてる顔　重　人
忍従の女に休めぬ水仕事　眉　水
アノ人にさせる仕事を考える　凡九郎
父の日に父の仕事は休みなく　春　蘭
仕事とは言えぬ仕事で世を送り　しんじ
税金の無駄穴を掘り穴を埋め　一二三
寸借の情が残る路地の裏　洋　子
寸借がでっかい夢を持ってくる　勝　美
寸借の情が仇にしてしまう　悦　郎
寸借に少し肩ひじ張っている　節　子
寸借の嘘がだんだん行き詰まる　秋　子
催促がしにくい程を借りてゆき　公　一
元豊田とだけで肩身を狭くする　柳宏子
強引に進むと道が狭くなる　浩一郎
眼帯でごまかす狭い視野である　白　兎
狭いめをさせまんなあと割り込まれ　頂留子
狭くともやっと別居という笑顔　久　子
兎小屋便利が良いと痩我慢　章　久
狭い家棚が痛そう程に乗せ　雅　風
狭い故掃除が楽な我が家です　ハル子
兎小屋狭いせまいと住んでいる　綾　珠
狭い部屋ダブルベッドにあるドラマ　喜　風
抱きぐせを知ってる育てられている　作二郎
他所の子は育ちが早いはないちもんめ　智　子
貧乏神にも育ててくれた恩がある　滋　雀
子育てが済んだ女の若返り　覚然坊
子育ての地蔵を囲う曼珠沙華　慶　三

三幸川柳教室　桜井　千秀報

山河あり終の住みかと決めた土地　靖子
住みなれて土地の言葉も板につき　千香子
四十過ぎ主婦という座を翔びたがり　隆行
家族への愛惜しめない主婦の汗　ふく代
四苦八苦仕上げてウエスト入らない　当代
戦をまだ引きずって孤児が来る　静
やりくりのうまさ苦労が生きてくる　千秀
マル優の枠は猫まで動員し　智水庵
舌三寸上手に泳ぐセールスマン　かなめ
あの頃はめだかも鮒もいた小川　幸子
五輪への夢はでっかい浮き袋　みね
百万の鯉泳がせて主病む　文子
何処をどう泳いだ中元舞い戻る　愛子
順番も知らず生簀で泳ぐ鯛　桂香

聴障川柳　稲田　豊作報

母の日に声の便りをする息子　文古
神棚に息子を祈った事もある　一晄
長生きが息子に逝かれた不倖せ　承平
自慢の子婿には惜しいし金はなし　みつる
観世音息子に代り親救う　鉄火
塾は二の次男子練磨の青い空　八恵子
長男の肩へ重荷がのしかかり　和江
齢重ね父の容姿に似る息子　たみ
ドラ息子よそ行きの顔習いだし　峰生
親父には判る息子の胸算用　潔
初孫の息子のマーク鯉のぼり　行江
息子にも息子が生まれ三代目　珍顔
相続の息子も貧乏揺すりする　豊作

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

人様の齢を気にして原爆忌　薫風
平和像横目に核が空と海　福一
僕の名と一字違いの遭難者　博史
あり過ぎて困る今夜のお惣菜　明
峠見えたわが人生の安らけし　隆
核心に触れると話そらされる　慶子
全神経耳にしており眼の手術　房子
核家族になって気ままな夕仕度　美爾子
鳳仙花みなはじかせて叱られる　きく子
核汚染ノアの箱舟つくらねば　満女
清貧の遠い日子等と語りあう　富子
反核のピラポケットにある散歩　寿美子
雨上り只紫陽花に魅せられて　千恵子
戦火くぐったリュックに見入る終戦日　明吉
誓書まで書いたお金がもどらない　登志実
風道に大きな身体でんと居る　春子
核炸裂蛸に背骨が生えてくる　武庫坊
気に入りの嫁は遠くに住んでいる　よし子
衿元の方から入る秋の風　花村
海底に遠いいくさがまだ眠る　作二郎
旅立つ日用もないのに娘に電話　正坊

川柳ねやがわ　高田　博泉報

雨宿りした交番で茶をよばれ　創吾
こころなく反対したい男親　松庄
反対へ白紙用意の風みどり　勝美
主義主張なくて国旗を軒に立て　一菁
山の中テントがわいわいさわいでる　正彦
雨やどりしてる所は傘屋さん　摂子
行儀よく盲導犬も雨宿り　壮之助
雨宿りここにも阪神ファン居る　新泉
明治気質今更俺が変れるか　速水
ワンマンの父がバランス取っていた　藍子
つゆ草の玉にやすらぐ雨宿り　菜月
反発も角抜き政治押進め　定子
子等のため梅漬けたのし老いの身は　とし
足引っぱるつもり握手が笑ってる　章
反対の出口へ出てはうろたえる　春子
階上と階下半分ずつの城　君子
実績をみよと反対派に市長　青波
傘持った人も一緒に雨宿り　まさお
酒になりマージャンになる雨宿り　シマ子
商いはもうあきまへんと蔵を建て　あやめ
ワンマンがペコペコしてる棒グラフ　かすみ
ワンマンが独りで部屋に籠る夜　光子
反対の椅子が冷え込む四面楚歌　静江
嫌なのがひとりだけいてバスツアー　一途
これ以上反対出来ぬ岩田帯　山久

佳句地10選（前月号から）

西村早苗選

投げられた石をおろそかにしない　年代
おとし穴きれいな雪を乗せておく　てる
譲られた席が温いと限らない　柳宏子
人間の目では覗かぬカメラマン　倫子
びっくりした後に本音の顔がある　武庫坊
やさしさの反面を脱いでも同じ顔　寿美子
犯科帳繰るローソクに風がある　柳伸
妻の手帖にかけ込み寺の地図がある　牧郎
気の多い蝶が選ってる紅い花　紫香
蟻の列冬の遊びを貯える　紀久子

焼肉の匂い漂う雨宿り　淳朗
反対も妥協もしつつ夫婦愛　晴風
灰皿に思案残して父帰る　一笑
波紋よぶ小石がほしい午後三時　てまり
孫をだく顔ワンマンが消えている　頂留子
燃え尽きたリング静寂に包まれる　亜成
表札の名前が一緒雨宿り　天山
ワンマンを尻にしくほど強くなり　亜也子
好きなのに乙女心の白と黒　英壬子
クイズ席へ坐ると悪役の顔でない　杜的
反対をじっと聞いてる馬の耳　度
握手した手が固かった過疎の人　右近
落書きのようなサインを嬉しがり　敬山
ワンマンのミスロボットに笑われる　三千子
父の日の顔にされてるだけのこと　亜鈍
炎天に水打って石を睡らせる　麗水
父の日を知らぬふりする父で好き　小路
握手してだんだん絆が遠くなる　静歩
ワンマンの夫に見せたい若夫婦　あいき
ワンマンの社長で似合う菜っ葉服　紫香
先ず犬がしびれを切らす雨宿り　薫風

駒つなぎ川柳会　里　小路報

中年の恋雨男雨女　萬的
好きなのに男心はあまのじゃく　東雲
中年の恋は紅蓮の炎抱く　楓楽
本当は弱い男の強がりで　雀踊子
借景の庭が我が家の自慢です　柳宏子
一人旅が好き仏像と対話する　花仔
同権を叫ぶ女の大ジョッキ　文秋
耐えることばかりネクタイ締め直す　春蘭
捨てて拾って熟女の恋は華やかで　寿美
うれしくてうっかり我が家通りすぎ　頂留子
一人旅あの杉の子に会いとうて　円女
泣き上戸の女と知らず飲みにゆき　凡子
向い風ならば挑戦してみよう　美津子
中年の恋臆病な曲になる　国公
雨もりが止まる我が家と思えない　健司
かも知れぬ期待で終る一人旅　規不風
泥酔はあなたに妻も子もあった　史好
痛恨の涙男は耐えて居る　真砂
中年の恋はそろばん先に立て　甘平
父の芝居を黙って見ている我が家　美幸
一人旅一日海を見て飽きず　月子
男心知らずに女酔うている　勝美
男心が秤の上ではねている　律子
中年の恋は五色の戎橋　善信
七色に描けぬ我が家の彩がある　信治
独り来て一と味足りぬ旅の膳　弘生
ほろ酔いの女が怖いことを言う　邦晴
七転び八起き男のラッパ鳴る　柳影
中年の恋を育てた鈍行車　翠公
母さんが叱らない日がない我が家　恒明
ひとり旅どこが楽しいかときかれ　外吉
酔う程に女の嘘が美しい　美代
バラの刺男心をそそのかす　射月芳
中年の一途な恋をもてあまし　素灯
嫁も娘も酒を飲むなと言うわが家　雄次郎
一人旅宿で詮索されている　雅風
慰めを待っているよに女酔い　笛生
女系家族に男心はわからない　冬葉
男ざかりそんな時代もあった恋　以兆
船を送って女はひとり酔うている　作二郎
男心が少しわかって花を買う　智子
大正にとても愉快なメロドラマ　幹斉
風みどり一人の旅の懺悔録　重人
男泣きする盃を酌きこぼす　浩一郎
マムシゲン飲んで四十の恋漁る　千代三
三つ指の鬼がいつでも待つ我が家　柳伸
近所では養子に見られてる我が家　小路

菜の花句会　高杉　鬼遊報

静を解き雷鳴は遠退きぬ　曲ん手
炎天に風が小さい秋を連れ　昭子
オアシスはパチンコ屋と言う小市民　右近
雷の止むまで行水待たされる　枯梢
親子電話二階で聞いてるとは知らず　蕉露
根分けよりみみずがおちた炎天下　一
ふるさとに老母ありオアシスは枯れぬ　弥生
炎天のページに残るキノコ雲　柳伸
オアシスはあなたとうまい事を言う　三男
雷が雨を忘れた遊び過ぎ　シマ子
炎天に耐える言葉は聖書から　悦郎
まちがえし地下鉄出口炎天下　春蘭
かみなりに話のつづきはうどん屋で　頂留子
ほどほどに音たてておく二階借り　幸生
雷鳴よ戦は遠い日の記憶　章
どどのつまりそんなに甘くはない女将　萬的
雷よニューミュージックの時世だよ　凡九郎
神様に祈る甘えがすこしある　射月芳
そうめんを食べて雷やりすごす　美幸
オアシスは村の鎮守にして弾み　喜風
遠雷へ少しあわてる女下駄　雀踊子
炎天をものともせずに逢いに行く　鬼遊
歩が金になる迄世間甘くない　勝美

雷を落して血圧高くなり　栞

川柳しんぐう　川上　溪水報

流れくる校歌へ足を止められる　まさ子
灼熱の太陽校歌を聞いている　国彰
思い出と校歌は胸の奥に住む　三千代
試合終了校歌ひときわ高く澄み　輝子
証書手に涙で歌った日の校歌　えつこ
アイロンに愛の重みが乗せてある　緑良
アイロンの余熱を背負い朝を出る　金太
難しい客をアイロンは知っている　柳宏子
アイロンの折り目は妻の愛だろう　雀踊子
アイロンの温み知らずに着る野良着　正博
数学をすいすい解いて悩みなし　とよ子
数学はともかく母の目分量　八千代
数学の教師も迷うサラ金利　十郎
数学も覚えロボット恐しい　喜酔
数学は苦手だったと言う社長　正子
言い訳も額の汗で見破られ　利次
汗かかぬ順に給料多くなり　大輪
プロポーズただひと言へ玉の汗　富子
冷汗は出たが答えは出てこない　小六佳菜子
優勝旗汗も涙も知っている　渓水

わかあゆ川柳会　小砂　白汀報

一人者ひとり言しか言えません　ヒデ子
口髭が待っておりますコンセント　敏明
不仕合わせ命をかける職がない　三和
コンセント外れていたとは電気釜　智重子
コンセント抜けば隣のテレビ消え　侑正
かたつむり家を背負うは何の罪　世似
熱戦を止めてしまったコンセント　鈴江
わらべ唄優しく担うかたつむり　悦良
さすらいの旅を楽しむかたつむり　美栄
瞑想にふけっております蝸牛　英子
へそくりの場所を忘れたひとり言　清泉
枝先で落ち着けませぬかたつむり　かつ子
ひとり言ひとり返事をして独り　民子
81わしの向うにわし独り　天痴人
虹の橋渡りたいかもかたつむり　歳栄
あの虹をいつか渡ろうかたつむり　はるみ
かたつむり登って降りただけのこと　白汀

富柳会　藤田　泰子報

夕やけのような余生を夢にみる　富久一
日航事故会議が分けた生と死と　荘次
金持に見られるような顔をする　文次
炊飯器民のかまどに煙なし　勇
幸せな顔につられて旅に出る　美房
大胆な煙で裸婦を抱きかかえ　岳人
倒産が大臣の顔ぬりかえる　柳太
好きな顔心の奥で遊ばせる　美代
仏のような顔にも鬼が棲んでいる　花梢
森に出逢って風がやさしい顔になる　森子
夕やけにふと頬染めた合歓の花　美緒
夕やけは今日一日を焼す炎　泰子
夕やけが真赤に染めた空の色　ミツエ
金持ちになって顔付きまで変る　弘生
夕やけがあんなにきれいな肩車　山久
顔さして歩けぬ赫い昼の酒　章久
極楽の浄土で脱いだデスマスク　優
あなたには深刻な顔似合わない　千代女

サークル檸檬　田形　美緒報

掘りすぎた墓穴の中であえいでる　泰子
雉鳩の番い飛び立つ比翼塚　美房

岸和田市文化祭参加

第35回 市民川柳大会

日　時　昭和60年10月27日(日)正午開場
会　場　岸和田市民会館地下会議室
おはなし　西田　柳宏子
兼　題　「押す」　梶川雄次郎選
「穴」　野村太茂津選
「首」　森中恵美子選
「粒」　榎本　聰夢選
「無」　橘高　薫風選
「正体」　西尾　栞選
席　題　当日発表　久保田元紀選
各題2句・出句は出席者に限る
〆切2時
会　費　五百円（大会誌呈）
賞　市長賞ほか
〈連絡先〉岸和田市土生町一六九―八
高橋操子
電話〇七二四(二二)〇〇四九
主催　岸和田市文化協会
後援　岸和田市教育委員会
岸和田川柳会

嫁姑墓の前では睦まじく　美緒
骨すらもかえらぬ兄の小さな墓　久子
離婚式墓前に報告するもよし　智恵子
生きる人にもの言う如く墓洗う　千代女
猿島の仲間はずれに投げてやり　雅子
ユニークな仲間でハヤシライスが大好きで　美代
もの言わぬお墓磨いて懺悔する　三四子
気丈夫の肩が泣いてる墓詣で　美子
仲間からはずれた鬼も里帰り　今日子
墓守るように一本松が生き　薫風

翠洋会　中西兼治郎報

妻がまた堪忍袋ぬうている　いつを
判別のつかない時は裏がえし　綾子
青春を奉公袋に入れたわれ　兼治郎
人文字の裏方さんの苦は見えず　良江
配る子の紋切口上ほほえまれ　君子
裏金を使って渡る虹の橋　為子
久しぶり寿司でもちょっとつまもうか　登志美
裏表ない程やけて新学期　照子
紙袋旅のおわりをしめくくり　春子
舞台裏のぞけば気がねばかりする　宏子
裏切りは知らずピアノを弾き続け　みつ子
その裏に棘が見えそう美辞麗句　楓楽
シャッターが降りて裏から入金帳　風童
寝袋の夢山頂を征服し　光子
安心をさせる尻尾を握らせる　鬼遊

尼崎尾浜川柳会　春城武庫坊報

波風を多少は立てて親子です　昌子　いわお
核のチリ残った国も凍え死ぬ　清太
嘱託になって中流グッドバイ　よしお
へそ繰りを子のスパイから教えられ　貞吉
口軽でスパイの役は勤まらぬ　良征
死神がウインクしてる飢餓の国　十四郎
母さんの味方がふえる夕げどき　夢之助
味方だと思っていたのが毒を盛る　すみ
妻だけを味方に入れて四面楚歌　歌子
どうしてもそれ以後夢が育たない　すえ
悔しさが以後の私を戒める　よしつぐ
あの時の念書が以後も生きている　礼子
あれ以後は男嫌いで押し通す　武庫坊
遠雷が女の過去を語らせる　弘治
子を生んで園児見る瞳に艶ができ　佳秋
五分前家裁で落ち合う元夫婦　牧郎
五分前足袋のコハゼがかからない　紫香
駅長が帽子を被る五分前　亀甲

にた川柳会　西村早苗報

ゲートボール老化防止で仲間入り　晴月
菜園はミニストレスの解消に　邦子
よく回る独楽にもあった終着点　裕
一分の祈りみじかき原爆忌　宗光
グラウンドの汗逆転の川となる　弘朗
中立の立場でいいたい事が言え　夢酔
後ろ手をして妻老いを見せはじめ　景子
大湧谷の吐く息を吸い黒たまご　雪代
風鈴が土用の風とたわむれる　雄々
乱れても如来の顔が汚さない　舞吉
育て甲斐どの子もみんな親思い　紫吻
死にとうない欲ばりをなぜ笑う　雀踊子
父の森抜けて女になりに行く　〆女
ついて来る影を抱きたい日の孤独　花子
紅皿を持てば女になる役者　宗弘
打込める心うしない忙しい　多賀子
脱皮した蝶にもあった里心　幸一
脛の疵忘れた顔で子に意見　湖楽
暑い盆豆腐に添える紫蘇を摘み　独仙
涼は呼ぶ皆んな裸で来いと海　寿美子
物干しの高さぐらいの幕しです　孝華
星空へ鬼面かぐら最高調　登美也
着道楽どれを召してもパッとせず　きみえ
炎天下せみも疲れた声でなく　早笛
ほんとうの涙だ女酔ってない

川柳ささやま　脇田米朝報

診断の椅子で結果を待つ不安　美代子
仲のよい夫婦に椅子が一つある　とみ子
白炎の下で老いらく朱に染まる　ゆう也
抵抗もなく夫の好みに染まる夜　貞子
大望の彩に染めたく汗を積む　静子
熟年と言われ染まらぬ意地を抱く　靖子
寒中も見せ場に生きる海女の肌　百合子
チビッコのマイク見せ場を知って居り　ひか平
ウルトラC決めて祖国の旗を揚げ　修司
踏み消せば残り火悲しい音を立て　越山
素足から女は春の音を聞く　テル
音もなく楢山行きのバスが来る　文平
約束も其の場逃れの軽い口　照子
約束を信じて待てば売れ残り　千代子
約束を忘れて敷居が高うなる　和子
約束へ子の肩幅を信じよう　可住

岸和田川柳会　植山武助報

他人から見れば気のつく良い夫　礼子
カルテもう二枚目となり医者に馴れ　冨志子
絵の中の少女に心救われる　幸代
弱いのを寄ってたかって皆いじめ　勝晴

温室のカレンダーには四季がない　白光子
旅行先踵を返す訃の報せ　こう
踏まれても美女の踵は許しとく　狸村
能舞台踵の白を追うている　寿美子
ママになる自覚踵の低い靴　さよ子
八月の砂を踵で走る海　春栄
盆近く墓前でベルト締め直す　希久志
ポイントをベルトに置いた夏の服　武助
数年を耐えて三日の蟬の声　楽天
大切な鬼門へ今日も犬のふん　ひで
サングラス娘が大人主張する　射月芳
カッと照る暑さに偲ぶきのこ雲　甘平
赤い靴はけばリズムにのる踵　操子

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

核兵器あまりに生命軽すぎる　多駄子
天災か地滑り無情老いの犠牲　掬治
凄まじく引いた魚拓の鱸の目　虹汀
サツキ一輪水銀灯へ狂い咲く　あき
闇夜かな六法全書の高いびき　四郎
満腹へ正義も情もかすみ去る　ちよ
梅雨あけてうなぎの厄日近くなり　義美
やらず雨女が厨で歌唄う　高明
日向路を辿り岩戸の神楽舞　朴竜
先生の水着眩しい夏季キャンプ　久仁於
白紙委任馬鹿げたことはよしなさい　正敏

川柳化粧櫓　植村客遊子報

趣味のない男がのれん肩で切り　実男
女の愚痴聞いて貰ってそれで済み　大鷹
高笑いしてライバルを意識する　岳詩
石投げてみたくなる日の浜に佇つ　葉香
夢よもう一度と言わぬ女になっていた　越山
人生を織る横糸は派手にする　悲子
青空へ乾杯をする紙コップ　拓味
言い過ぎて仲間外れの一人酒　拍秋
横車理屈を積んで押してくる　さとる
それ見た事かと妻の瞳が笑う　紅月
嫁と娘の輪からはみ出てテレビ見る　みつ子
ツバクロが巣立って淋しい軒の下　サワ子
一歩退き温いくらしの嫁姑　みね子
青空に投げキッスする梅雨上り　輝月
二十一世紀をのぞいて見ようつくば博　とし
停年で又故郷の野良にたつ　永楽
胡瓜皆異った顔で伸びている　まさ子
父に似ずこの悪筆はだれの子か　孝栄
確実な足音立てて老い迫る　喜代志
花道が出来て職退く事にする　客遊子

川柳たけはら　森井　菁居報

はなびはシューシューきれいだな　五歳　昌之
かきごおりおいしかったよ土よういち　小三　聡子
つゆ明けてすぐきつくなるひの光り　小三　由博
漢字には一つ一つに夢がある　小四　方昭
部屋の中クーラーきいて眠くなる　小六　鉄二郎
白い雲のんびりのんびり動いてる　小六　美保
さて何を買おうか百円にぎりしめ　小六　亜貴子
そうめんはやっぱり夏だ母のたれ　中一　早代
カレンダー夏の試練を教えてる　中二　仁昭
何時か来る入試へ心引きしまる　中二　恵子
希望とは違った方へ鳩が飛ぶ　高一　希世子
テーマは夏イメージチェンジしたくなる　高一　紀
テスト前何とか時間をひねり出す　高二　真弓
強がりの父に見せたい余命表　菁居
曲ってもうちのキュウリのうまいこと　淑子
次男坊負けてはいない面構え　靖子
中流の意識に揺れるマイホーム　白狐
何もかも天に任せてやすらぎぬ　敬子
カタツムリ今年の梅雨は手ごわいな　房子
梅雨晴れ間きれいなパンツ並んでる　鈍舟
画用紙へ子は子の色をぬりたくる　比呂子
かもめなら飛んで帰れる島暮らし　節夫
夕焼けへ心の澱を浄化する　笑子
妻のうしろをゆっくり歩くのも男　蘭幸
道はるかシルクロードの旅つづく　静水
転校の子にブランコの順が来ず　一声
だまされる金がないのも哀れなり　政己
倖せはどの子も親を越えたがる　令子
職がある限り男の顔の艶　貞子
パンタロン国策に沿う姿なり　美佐雄
原爆忌政治はサジを投げている　のばら
鎧脱ぐゆとりが欲しい四十坂　康子
遠き日の想い出いつも母がいる　博子
ネクタイを弛めてほっと出た本音　一路
短命を精いっぱいに蟬時雨　シゲヨ

京都塔の会　松川　杜的報

竹藪をすぎるとわが家の風になる　葉子
幸せはやっぱり家族に囲まれて　栄
愚かにも信じて晴間待っている　はつ絵
往復ハガキ無住寺の戸を開けさせる　和友
丁寧な挨拶やっぱり裏切りか　武庫坊
梅みれば梅が漬けたく亡母を恋う　年代
満月へやっぱり祈ってみたくなる　芳子
欠点のない妻なんて阿呆らしい　水客
皿まわし汗は見せない白だすき　求芽
静物のトマトへ少うし白残す　杜的

とれとれのトマトつるりと水はじき　孝江
迷い犬囲み少年が五、六人　麗水
あの頃は飴で囲んだ紙芝居　冬子
寄せ鍋の湯気を囲んだ笑い声　明代
線香花火みんなが囲む風があり　紫香
ほどのよい抜き衿うなじ引立てる　巨詩
抜き衿も小粋ネオンの街に生き　美穂
御ひいきの抜き衿並ぶ夏芝居　花村
抜き衿へ京都の夏は暑おすなあ　鼓城
ぬき衿の女絵になる蛇の目傘　〆女
抜き衿に姉さんという意地がある　弘生
弱々しい抜き衿夢二の絵と解る　白渓子
ぬき衿へ散り込む野点の桜吹雪　花代子
抜き衿へ男を忘れさす女形　飛鳥

むらくも川柳会　藤井明朗報

ウインクをされても本人気がつかず　明朗
飾り壺そっと指先ふれてみる　みどり
久しぶり大きくなったとびっくりし　武衛
湯上りの妻の素顔に一寸ほれ　文子
勉強嫌い入試合格びっくりす　千里
ウインクへ明治生まれは遠くいる　孝華
貧しくも我が家は愛と和のぬくみ　はじめ
働いて古木のような祖父の指　林蔵
好き同士ウインクすれば事足りる　百代
八十年素顔で通し厚い皺　竹乃
素顔からまるい人柄見えてくる　一葉
ピチピチの素顔の孫の美しさ　光子
素顔がとても素敵と恋愛中　秀子
喜寿傘寿妻の素顔を連れて老い　はる代
素顔では言われぬ酒の酔いを借り　富子
ウインクの自信は鏡からもらう　正朗
和を保つ術は無言の劇と知り　延子
この指の一本ずつにある使命　よし子
ウインクに火種ほこほこかきたてる　ヤス子
急停車ひ孫とび出し肝潰す　吉野
ゴメンネの一言夫と和をもどす　芳子

川柳塔まつえ八月例会　恒松叮紅報

玉すだれ娘の部屋ナウイ風を招ぶ　多賀子
簾一枚西陽が背中押している　妻子
冷房をきらうすだれの母の居間　正朗
中流のすだれの奥でメロン切る　三和
すだれ越し見られる人と見る人と　愚童
生ぐさい話は嫌いな青すだれ　鳳人
すだれ越し母が見守る児の熟睡　玄艸
花火咲き浴衣が走るすだれ越し　南風
取り出した簾に去年が染みていた　渡
京すだれかけた扇の艶っぽさ　長三
お化け小屋破れ提灯生かされる　友子
亡母に逢う盆提灯のうすあかり　肇
それぞれの思いで点す盆提灯　三男
盆提灯くるくる亡母の声がする　芳子
夕やみにゆれて客待つ赤提灯　孝華
盆提灯ゆれて精霊迎え入れ　弁治郎
初盆の供養に提灯電化すぎ　翠星
提灯をつけて行列した悪夢　幸一
退職した日から時計が狂い出す　静江
狂人といわれ頭脳をおしまれる　雄々
狂うてはならぬ男の腕時計　昭二
もう狂ってもいいですか母の塔　寿美子
狂おしい想いがつのる熱帯夜　きみえ
趣味にしては少し狂っていませんか　貢範
点と線狂って捜査に行きづまる　みえ
朝の靴猛暑に狂いはせぬように　秀子
宇宙のメッセージ地球が狂ってる　美治
人間が操作電算機も狂う　代仕男
終章の写真は笑顔から選び　孤呂二
スナップで素顔を上手く盗まれる　与根一
アルバムの中を旅する旅人よ　荒介
原爆の写真子の目にどうつる　舞吉
ライバルの秘密をスナップが知っている　鶴丸
水槽に哀しき玩具金魚の朱　瑞枝
金魚の餌結局世話を任される　叮紅

川柳わかやま　堀端三男報

山里の朝へ切り絵の夢を見る　公子
犬死んだ日に少年の夢崩れ　紀美女
天神さんの細道で夢捨ててくる　千寿子
快調に噛む歯車の朝を出る　天彦
爪を噛むおんな寂しい過去がある　正子
此の椅子の座り心地噛みしめる　忠
唇を噛んで明日へ燃えるもの　光代
ぶらんこ揺れて次の世紀の夢を見る　幸
ティーカップ夢の続きを聞いている　稚代
口惜しさに耐える奥歯を噛みしめる　栄美子
王様は低い身分に憧れる　武雄
ふるさとの低い家並みは愛だろう　芳朗
誰よりも私の花火低く散る　千代
腰低い男で影が見当らぬ　萬的
低次元を叱ってみじめになっている　太茂津
雲低く明日のドラマが待っている　一二三
満ち足りて奢りの知らぬ低い鼻　信秋
欠点がこんなにみえる低い位置　凡九郎
背は低いけど誇りは高く持っている　克子
花咲く日信じ根っ子のままで生き　桂香

背伸びやめると一番低いのは私　英子
根ほり葉ほり聞くから嘘でぬり潰す　裕美
球根を買う中年に夢がある　三枝子
仲直りしたいし根っこまだのこり　忠雄
根の深い話はちょっと熟ませとく　凡太
血を巡るその相剋の根の深さ　白光子
遺産分け争う仲も根は一つ　正博
根掘り葉掘り聞いて出方を考える　紀久子
曼陀羅の裏で夫婦の根が絡む　緑良
浮草の根にたわむれているメダカ　紫香
根廻しがあったと本人だけ知らず　柳宏子
美しい花を咲かせて根は満ちる　登志代
根をおろすあたりへ迷い埋められる　寿子

西宮北口川柳会　奥田みつ子報

くすり指たった一人を想いつめ　笑女
踊り疲れたはずの心が炎えてくる　年代
本物の笑いを幼児からもらう　いわゑ
孫の引く紐の向うにある虚像　柳影
肩書きで踊って男老けて行く　伊三郎
生ビールオールドミスはよくしゃべり　しげお
さっぱりと部屋かたづいている不安　はつ絵
ゴム紐を伸ばすとんでみたくなる　礼子
靴の紐切れて不安の朝を出る　一郎
この辺に茶店がほしい蟬しぐれ　白渓子
遠花火長い人生噛みしめる　和友
寝ころんで指図するのが紐である　郁栄
さっぱりですわと大阪弁の声をきく　春蘭
妻の掌の紐の結びをとく灯り　(伊)春子
踊り場から踊り場へ行く踊り好き　半歩
破局への心を繋ぐ紐さがす　園歩
人間という名の長い進化論　正一
長かった看病でした眼をとじる　静子
短くて憎いは長い一生記　紀雄
かたくなに拒みとおした紐もある　隆子
得手のない子だけど長い目で見よう　幽香
主婦の座にシートベルトがきつすぎる　かすみ
ここという時立ち直らせる独楽の紐　求芽
駅前ががらりと変わり郷里の風　よし津
丸坊主さっぱり過去をすてている　(山)君子
打ち水をすると自分がさっぱりし　江美
五十回忌亡母のおもかげ遠くなり　冬子
人生きるドンナ踊りもして見せて　凡九郎
びっくり箱の紐は解かぬ方がよい　美智子
迷路かも知れぬ人生ただ歩く　照子
疑問符を背負うて長い坂登る　武庫坊
小踊りし雛つぎつぎと巣立ちする　きよ子
すだれには心落ちつく色があり　(栗)春子
満天の星から便りが来る床几　米朝
飼猫の尉に欠伸誘われる　舟二
編笠を覗いてみたい佐渡おけさ　散歩
約束をしてからはげしくなる動悸　明代
未練さっぱり断とう公園ひとめぐり　鼓城
爆心地白いコスモス揺れている　みつ子
ちょっと待て狙った財布軽すぎる　良征
炎天下の汗にこたえる茄子の艶　志津
蟬しぐれあさがお大輪咲き競う　千世子
プレゼントピンクの紐の花結び　よ志子
蜂の世もやっぱり女性上位です　東洋男
頂点に立って心の紐をしめ　山久
笛吹きの好意へ踊らねばならぬ　弘生
里帰り娘の笑顔に安堵する　泰世
紐引いて神の眠りを先ずさまし　千秀
ふる里の手踊りの輪にある絆　右近
踊り子の肩を濡らした白い雨　百合子
鈴の紐を握って神をややゆする　〆女
野良犬がとまどっている風の道　紫香

尼崎いくしま川柳会　角野かず子報

無理しないつもりの夏が忙しい　礼子
北向きの窓で引き際考える　はじ芽
お土産に貰ろたアロハがよく似合う　かね子
眼の為に無理にテレビはつけずおく　玉子
まっすぐに走れば少し近すぎる　幸次郎
達磨の絵に喝と言われてみたい夜　かすみ
事情はどうあれ扉開けたは私です　年代
これっきり逢わぬつもりの旅土産　かず子
律気な女ロボットと仲が良い　美代子
還暦を過ぎた夫婦で無理はせぬ　一郎
走り過ぎた夫よ汗を拭きなさい　伊三郎
走り書き置いてスーパーまで出掛け　すえ
盗むもの何もなかった水たまり　牧郎
月鉾を見ている愛の如きもの　作二郎
気をつかいなはんなと取る土産　紫香
走るのが好きでいつでもこけている　幸子
明日のある男は今日を耐えている　紀雄
戴いてばかりの土産手に重い　定人
黙っては居れぬ男の血が走る　伊升
管理職になっても走るくせ抜けず　郁栄
減塩の壺の平和に救われる　静江
病院の空気看護婦変えてゆく　ときお
洗い髪明日は会える夕茜　春子
故里のみやげは今も米ばかり　常子
みやげもの買ってようやく旅終わる　文夫
無理とおる道を知ってるハイヒール　君子

古傷も未練も流す西の風　正一
孟母三遷真似て見たけど効果なし　良征
小銭入れだけの暮らしになる定年　佳秋
お元気でお暮らしですかグリコ犯　みち子
夏は暑いもんやとおやじそっけなし　一掬
走馬灯姉には姉の恋がある　水声

川柳大阪　井上　喜酔報

雑草もホースが欲しい夏の雲　笑風
オペックの原油ホースが細くなり　柳弘
雨蛙ホースの水にだまされる　しげお
打ち水もホースじゃ似合わぬ古都の宿　酔玉
真夏日のホースに生きる声を聞く　洛酔
馬鹿にするホースの穴が大火災　正流
持ち込みの疑惑は消えぬ核兵器　金太
兵器庫のどこにも懺悔録が無い　重人
兵器売る死の商人がかっ歩する　みつる
黙々と兵器を作る労働者　一歩
老兵よ今ではペンが兵器かね　希久志
胃の痛む船出になりそな空模様　虎酔吟
ポンポンと小島をむすぶ船が出る　酔舟
見送った船出は国際エアポート　鉄心
四拾億払って船出する北の海　司
船出して海より深き愛を知る　一介
エンジンの音を残して船出する　敏
人生の船出に親の赤ごはん　好栽
幸せな船出お腹の子も三月　雅巣
水平線の彼方に夢がある船出　本蔭棒
定年の船出へ亀になる夫婦　喜酔
鱧の骨切る音船出の味にする　与呂志

川柳泉尾　吉川　寿美報

皆んなして流した川は今はなし　三世
仕草迄母似と言われ六十路すぎ　シメ子
人生に裏も表も有る街道　シマ子
七夕に地球の平和吊しとく　敏
天の川明日は日本の宇宙士も　トミ子
水洩れの音淋しさに輪を掛ける　伴子
覆水の盆に集めている未練　美代子
宮水が灘の銘酒の名を高め　白水
雲ゆきがあやしいそっと席はずす　三千代
雲ゆきが悪くなったら黙秘権　満州子
雲の顔流れて思案つきてくる　弘子
一言で迷いの雲が晴れました　淑子
赴任地へ思いを馳せる飛行機雲　文子
きのこ雲廃絶願い四十年　恭子
善人で雲から足をすべらせる　景子
川柳も二三句下げて軒の笹　文子
願いごと多くて笹がたれている　葉子
水がめの水が溢れる慈母の愛　寿美

川柳藤井寺　赤木　和子報

草野球審判氷屋の親父　与呂志
ピエロの鼻にジョークが吊ってある　吸江
純金に化けて書類を高く積み　末一
軒先で風鈴暑さで無言です　律子
目も鼻もなくて地蔵のよだれかけ　つや
ひと言の詫びが言えない鼻柱　治子
久し振り総領息子に金もろた　三郎
競馬ファン明暗分ける鼻との差　作秀
けつまずく鼻だと周り知っている　昭子
反対の方へ翔んだはバネの罪　美代子
尼寺の塀はすこうし高く積む　本蔭棒
再婚は出雲大社に尻を向け　哲正
鼻息の荒いダンナの赤いシャツ　伴子
鼻持ちのならぬ自慢を鼻で聞く　ふみ
低い鼻トンボ眼鏡に潰されそう　繁男
もてなしに梅酒の氷丸く溶け　秋園
お多福は鼻が低くて様になり　志洋
橋出来て四国と島が陸続き　清心
将棋差し氷溶けてる王手飛車　たかし
げんこつに息をかけるは孫の方　みのる
薄氷を踏む思いする老いの恋　雅美
OL生活少しは馴れて梅雨明ける　彩
そうめんに氷は夏のコマーシャル　祐二
梅雨明けの暑気やわらげる氷柱花　麻雄
大正がだんだん溶けゆくかき氷　ふさ
石川や影をばうつす金剛の峰　初枝
溶けるまで氷と呼ばれていましたが　和子

川柳ひらい　行吉　照路報

ふるさとの仏間でしみじみ夢枕　ともゑ
百号へ目出度くはねる祝い鯛　愛子
春夏秋冬ふるさとしのぶ彩がある　孝子
二人目はテレビの音も子守唄　幸江
墓洗い雑念一つ消してくる　美佐保
ほんのりと目もとを染めて吟唱し　せつ子
ラッパの音聞くと襟首のばすくせ　良一
百号に敷かれたレールいや栄え　方巳
靴の音露営の夢を思い出し　かずを
雑念を払う土俵へ塩が降り　敏和
脇役が主役の見せ場盛りたてる　博
見せ場には自慢の足もちぢこまり　美代志
ジェット音かき消す怒りの反戦歌　トモ子
ここ一番見せ場になるとコマーシャル　年子
浪曲も見せ場となって三味強く　アヒル
押売りに見せ場つくった山の神　柏峯

兎小屋明かりを消して月と寝る　胤親
思考ゼロで座るわたしの好きな場所　典子
雑念が消せるか木魚の音が澄み　やすえ
子の眠り音たてぬ様たてぬよう　寿子
音たててくずれた積木にある不安　千恵子
退院を悲喜こもごもの眼が送る　志津子
騒音にいかりドラムに酔っている　裕子
紙人形許すつもりの紅の帯　愛
老人の愚痴も一つの生甲斐か　栄翁
年功の差に耐え社会の隅に居る　博友
雑念が晴れて摩周湖の澄んだ瞳よ　青銅
寝返りをしても雑念まだ続き　柳五郎
壁時計止まったままの寒い部屋　草風
音立ててくずれる青春の自画像よ　真備雄
父の絵に駅長帽が見せ場なり　照路

うみなり川柳会　小林由多香報

空缶を灰皿にする知恵もある　行子
缶詰の料理真心詰めてない　一止
缶ビールあけて勝敗など言わず　熊生
ふるさとへ着くまで続く缶ビール　豊生
化粧品迷いあれこれ買ってつけ　芳泉
妻病んで創価学会すすめられ　正
拾おうか拾うまいかとけってみる　静生
ライバルに先手打たれぬ石を置く　雅女
美しい嘘に合い槌打った悔い　葉士人
茶の泡で今日の機嫌の棘まるめ　草人
泡とばす孫の話にうそがない　華子
病む妻が家庭の気分湿らせる　笑王
遅刻して湿った話持ってくる　希満子
梅雨空に負けずファイトも湿らせず　舟宏
なめくじに湿った厨のぞかれる　由多香

打吹川柳会　奥谷弘朗報

カーテンを替え七十歳の四股を踏む　規仔
女子寮を尋ねて母に叱られる　紫映
ぼけ始め今日も風呂水止め忘れ　志つ子
チョコレート贈り反応たしかめる　節子
戒名を贈り浄土の道を説き　佳女
贈りたい物沢山でただ迷い　英治
品よりも真心こめて贈りたい　高代
新婚に幸多かれと粗辞贈る　亮二
娘が贈る心の温み母の日に　吉朗
押しかえすわけにもゆかぬ贈りもの　柳風
贈る身になってと妻は思案する　孝美
贈られて動物使節腑に落ちず　弘生
ライバルへ贈る言葉を研ぎ澄ます　美智子
お返しを心配するから贈れない　寿満湖
酒好きと聞いて気楽に酒贈る　道子
父の日のネクタイ娘と選ぶ幸　文子
贈り物愛のとびらを叩かせる　康子
父として贈る言葉を考える　弘朗
贈り物虚栄も少し詰め込まれ　雄々

川柳はびきの　塩満敏報

単車乗るパンチパーマは河内弁　忠宏
母の鏡母の涙も知っている　ケイ子
意見具申吹き矢が背なに飛んで来る　昇
西瓜割り手の鳴る方に騙される　繁男
コンパスの中心ぐらついてはならぬ　美代子
一筋の道を歩いた土踏まず　寿美
地すべりで反省させる山の神　憲太郎
子に孫に七つボタンはもう着せぬ　比沙胡
朝顔が咲いてジョギング迎えられ　優
意見より母の涙が身に応え　泰子
末席の意見が的をついてくる　隆二
土用丑うなぎも喉にひっかかる　徳子
戦争が教えなかった世界地図　満州子
故郷の土の匂いが恋しい日　葉子
此の年で星に願いをかけたい気　淑子
地球儀を回すと日本赤い色　胡村
神の国真赤な日本として覚え　吐来
親と娘が浴衣で並ぶ遠花火　シメ子
おみこしが好き親も子も祭り好き　隆司
打つ釘に馬鹿にされてる老眼鏡　末一
夏祭りかつぐみこしの足があい　重樹
七夕の笹は願いで重たそう　みつる
機密保護又も戦時に戻りそう　隅谷義一
地図を見て靴の紐締め峠茶屋　伴子
広告の駅から五分は夢の地図　喜代子
地図片手旅のプランを考える　一屯
世界地図あすの平和がまだ遠い　昭子
若者の未来の地図は空に描く　石橋義一
時刻表地図に合わせて旅思う　蛙声
只今のビデオは満里ホームラン　弘子
微笑んで反対意見聞く策士　久治
御意見は承りおくと委員長　清二
ワンマンもたまには部下の意見聴き　白水
距離感のない観光地図にだまされる　敏
夾竹桃今年も平和な色に咲き

■訂正

☆9月号95P下段2行目「さざ波」は「さざ波」、同4行目「波にのる…」の作者名「廣子」は「慶子」の誤りです。

堺まつり協賛
第39回 堺市民川柳の会

とき 昭和60年10月20日(日)
12時半開場

ところ 堺労働セッツルメント
堺市熊野町西1―2
TEL 0722(33)6533
阪堺線大小路駅下車西三井銀行裏

講演 「悪を詠んだ川柳」 亀山 恭太

宿題
「森」 板尾 岳人選
「器」 田頭 良子選
「傷」 大路 美幸選
「港」 山本 翠公選
「巣」 野村太茂津選
「南」 墨 作二郎選
「家」 梶川雄次郎選

締切り 13時半 各題2句
席題ナシ 欠席投句拝辞

会費 千円(記念品・作品集呈)

賞 各題秀句に市長賞他呈賞

主催 堺番傘川柳会
堺川柳会

第9回
寝屋川市民川柳大会

日時 11月17日(日) 一時開場

会場 寝屋川市立東北コミュニティセンター
京阪香里園駅下車③乗場よりバスにて成田不動尊前(幼稚園前)下車すぐ

柳話 西田柳宏子氏

兼題
夕刊 里 小路選
タイミング 河内 天笑選
懐かしい 住田英比古選
灯 高杉 鬼遊選
皿 片岡 湖風選
入口 河合 鼓城選
雲 橘高 薫風選

席題なし
各題二句・締切2時
欠席投句拝辞

会費 一、〇〇〇円(記念品・入選句集呈)

主催 寝屋川市川柳協会
後援 寝屋川市文化連盟

第27回
豊中市民川柳大会

日時 昭和60年11月23日(祭) 正午開場

場所 豊中市立中央公民館
阪急曽根駅下車南一丁三叉路東半丁

柳話 片岡 つとむ

宿題
素顔 久保田元紀選
コーヒー 高橋 古啓選
嵐 尾谷 清風選
粋 西田柳宏子選
視野 黒川 紫香選
滴(しずく) 岩井 三窓選
ルーツ 水島羊之介選
当日席題一題 神前 朋義選
各題二句

賞 豊中市長賞他(各題秀句に水島羊之介画伯の額装版画を贈呈)

会費 一、〇〇〇円(記念品・発表誌呈)

主催 豊中川柳会

■各地句会だより

サークル檸檬　鳥羽吟行

田形美緒

天気予報を見事に裏切って晴れ乙女達?の吟行、薫風先生もかすみそうな、若くてハンサムな男性の同行は三十歳の岩田時哉君。総勢十二名を乗せたビスターカーVIP室は一路鳥羽へ。柔らかな絨毯の萌黄を縫って車内の賑わいは益々佳境に入り、鳥羽駅でダンディな紳士に迎えられ答志島の「サンビーチ鳥羽」に到着。先ず鳥羽湾を一望出来る大浴場で汗を流し、そのあと檸檬恒例の福引大会、豪華景品は特産のわかめにはじまって金、銀、サンゴに一同目をぎらぎら、赤いサンゴのイヤリングとペンダントのセットは一番若い藤岡花梢さんに、美代さんには赤い提灯と、それぞれくじ運の良い人悪い人、ひとしきり騒いだあと席題の「ビール」は、先ず体験が必要と、句会より宴会を優先することになりました。

誘惑を待ってる女の大ジョッキ　花梢

民宿の灯に中流たむろする　美代

花梢さんと美代さんの健康を祝して乾杯。飲む程に作句を忘れ、薫風先生と花梢さんのデュエットに始まり、時哉君とのデュエットに熾烈な女の闘いを繰り広げ、無礼講に鳥羽の夜は更けました。

ビール飲む男ロマンを追っている　今日子

湯上りの小ビンに酔える他愛なさ　美緒

ビール飲みその勢いで下手な唄　雅子

一杯のビールで唄う夫婦坂　美子

ローン済み天下大平ビール呑み　三四子

桃源郷ビールの泡のその向う　泰子

潮騒に目を覚まされ、早朝の海で波と戯れ貝を拾い、朝食後の豊かな気分で句会。

俺は俺お前はお前罐ビール　久子

カルチャーのはしご中流余暇と棲み　智恵子

等々秀句続出。

今日は奇しくも薫風先生の誕生日とてバースデーケーキとジュースでお祝いをする。ハッピー・バースデー・ディア薫風を鳥羽の海に向って大合唱。心を残しつつ島を後に、あこがれのラッコちゃんに会いに行きました。

帰途の車中、もう次の吟行のプランに花を咲かせながら「アッ」という間の楽しかった吟行に終止符を打ちました。

ただ岳人さんと美房さんが急に御都合が悪くなり御一緒出来なかったこと心より一同残念に思っています。

一息にローソク消せぬ誕生日　薫風

10月各地句会案内

	日／時及び題	会場と投句先
川柳塔 まつえ	12日(土) 午後1時より ひとすじ・空白・碑	慈雲寺　松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅 句会費 300円　投句料 300円（切手可）
川柳 わかやま	13日(日) 午後1時より 過信・眺める・誤解	県民文化会館4F（県庁前） 〒640 和歌山市駕町15　野村太茂津 句会費 300円　投句料 60円切手3枚
西宮北口 川柳会	14日(月) 午後1時より 神・答え・自由吟	西宮中央公民館　阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5—25—17　春城年代 句会費 300円　投句料 200円(小額切手)
堺川柳会	15日(火) 夕6時より 駅・円・餌・絵	堺青少年センター3F　阪堺線綾之町西南 〒590 堺市堀上緑町2—9—2　河内天笑
南海電鉄 川柳会	17日(木) 夕6時より 行楽・箸・かがし	南海会館ビル内南海電鉄本社地下食堂 〒542 大阪市南区難波5丁目1番10号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課　広井季雄 句会費 無料　投句料 60円切手1枚
高槻川柳 サークル 卯の花	17日(木) 午後1時より 懐手・食欲・自由吟	高槻市民会館301号室　阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3—19　辻 白渓子 句会費 500円　投句料 200円(小額切手)
南大阪 川柳会	19日(土) 夕6時より 台なし・熟す・図鑑・でたらめ	寺田町高松会館 大阪市阿倍野区天王寺町北1丁目3-11 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2　金井文秋
川柳 ねやがわ	20日(日) 〆切2時 くしゃみ・足音・女優・自由吟	寝屋川市立総合センター 〒572 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
駒つなぎ 川柳会	28日(月) 夕6時より あきらめる・味覚・娘 くもゆき	寺田町高松会館　国鉄環状線寺田町駅南歩5分 〒572 寝屋川市成田町19—28　里 義治(小路)
菜の花・富柳会・東大阪川柳同好会は川柳大会のため例会は休み		

★特に記載なき場合　句会費 500円、投句料 300円（郵券可）

原稿送り先（〆切・毎月20日　予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です）

〒596　岸和田市荒木町1—29—1　宮園射月芳

60年度二賞表彰本社10月句会と同人総会は10月6日（日）

（詳細は表紙裏に掲載）

11月本社句会は7日（木）

兼題「綱」「野菜」「のぞく」「準備」

本社句会の日どり

12月句会……12月6日（金）

〈61年〉

1月句会……1月7日（火）
2月句会……2月7日（金）
3月句会……3月7日（金）
4月句会……4月7日（月）
5月句会……5月7日（水）
6月句会……6月7日（土）

『夜市川柳』募集

第5回「いたずら」室田千尋選　締切10月31日

第6回「あやまち」橘高薫風選　締切11月30日

投句先　〒593　堺市堀上緑町二―九―一　河内天笑方　堺川柳会

募集

十二月号発表（10月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「箱」田口虹汀選
「乱」西岡洛酔選
「紳士」越村枯梢選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

一月号発表（11月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「我慢」平田実男選
「湯」芳地狸村選
「祝」松本はるみ選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。

10月の常任理事会は1日（火）

定価　五百円（送料50円）
半年分　三千二百円（送料共）
一年分　六千三百円（送料共）
昭和六十年九月二十五日印刷
昭和六十年十月一日発行
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社
〒545　大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六　ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六三九―六九一四番
振替口座大阪8―三三三六八番

＝編集後記＝

☆川柳塔改題二十一年目の第一歩を踏み出すに当り、当時八人の選者がひしめくという形容そのままに活躍して居られたのが、今では西尾栞主幸お一人が壮健でいらっしゃり、その主幸の喜寿金婚のお祝いの会を、予想以上の盛会裡に開催出来たことを感慨深く思うものです。二十年の歳月とはと、しみじみ顧みるとともに、二十年後を、また思わねばならないと感じています。

☆中島生々庵名誉会長には七百号の挨拶を頂けなかったが、寝たきりでいらっしゃるものの、内臓は君よりも丈太だよと仰言る通り、艶やかなお顔色で毎日を読書とテレビに親しんでおられる。同人諸氏によろしくとのことです。

☆須崎豆秋句集「ふるさと」は発刊後きわめて評判がよく、今さら故人の声価に驚いているが、中尾藻介さんに書評をお願いし、私も、豆秋さんの人柄を少し述べた。川柳人必読の句集と言っても言い過ぎではないと思う。ご喧伝をお願いする。

☆東野大八ご夫妻の青森行に随行したが、東北の旅はいつもながら快適だった。四月には大挙して郡上八幡を訪れた。十月には唐津へお邪魔する予定である。交通至便なる時代だから、地方との交流を一層緊密に計りたいと思っている。

☆十月は恒例の路郎賞と川柳塔賞の二賞発表、同人総会の開催月でもある。今年は、九月の大会の後でもあって、地方柳人の参加は望めそうにないが、せいぜい賑やかにご参加をお願いする。

☆各地の句会だよりも軌道に乗りそうで、特色のある例会の模様が寄せられている。殊更に依頼はしないが歴史と現状をお知らせ下さい。

☆再び元に戻るようだが、栞主幹のお祝いにご参加下さった他社をはじめ、同人誌友の皆様方のご支援に、心からのお礼を申し上げ、川柳塔のこれからの励みに致したく思います。（薫）

▼佐分利川べの子らにと題して「ぼくは電灯のない家に育ったので本に飢えていた／九歳で村を出て　本を読んで未知の人生や夢を拾った／作家になれたのも本のおかげだ／こんどぼくが君に／ぼくの蔵書を解放する／大切な本もあるが　勝手に読んで　何かを拾ってくれ」。これは作家の水上勉氏が、故郷若狭に建てた、〝若州一滴文庫〟に掲げた、故郷の子供らへのメッセージである。貧しくて哀しみの多かった故郷に対する想いのこもった、何とも床しく尊い贈り物であることよ。

▼幼年倶楽部に始まって譚海、少年倶楽部を毎月新刊で読むことができた幸せを私は嬉しく思う。それは、買物のつり銭を貯めた竹筒から母は五十銭の大金を父に内緒で、秋の本のために気前よく出してくれたお蔭である。

▼多くの本と出合った。随分と回り道もしたが良い悪いの選別も出来るようになった。と言っても好みの問題があって人に勧められるものでない。

▼本の値段は映画の入場料にほぼ近い。ためらわずに本を買う。映画のように時間と場所の制約がない。

▼著名人の話を聴くのも好きであるが、考える余裕のないきらいがある。その点、本は、反復理解することが出来る。気に入った文句があれば傍線を引いたりするが、多くはそのまま忘れてしまう。（き）

☆暦が十月にかわると、オフィス街や地下鉄の車内に紺のスーツの若者たちの姿を多く見かけるようになる。来春大学予定者の会社訪問が十月一日から始まるのだ。もっとも大学と企業間の申合せにも拘らず有力企業は既に優秀な人材の採用を決めてしまっているのが実情だと言う。そう思って眺めると、あのお仕着せの紺のスーツが一層いじらしく見えてくるのである。

☆今や就職学生の制服としてすっかり定着した、このリクルートスーツを見るにつけ、若者たちは本当に個性的なのだろうか、見せかけの個性ではないのかという気がする。ファッションにしろ生活パターンにしろ、これが流行だというと、右へならえで皆が同じ恰好になってしまう。

☆若者に限らず、こうした現象は、やはり日本人が稲作民族であることに由来するのだろう。田植え、稲刈り、その他すべて農作業は天候・季節に応じ、村の衆と同じようにやっていれば間違いはない。狩猟民族はそうはいかない。他人と同じ道を後から歩いては獲物にありつけぬ。〝赤信号みんなで渡ればこわくない〟と、〝人の行く裏に道あり花の道〟の違いか。

☆今年の稲作は二年続きの豊作という。就職戦線も豊作だといいのだが。（史）

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和六十年九月三十五日 印刷
昭和六十年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七〇一号 川柳塔 十月号
定価 五百円（送料五十円）

日刊

電波新聞

投稿欄案内

川柳 選者・橘高薫風
（掲載日）毎週水・土曜日

俳句 選者・小寺正三
（掲載日）毎週火・金曜日

短歌 選者・佐々木信夫
（掲載日）毎週月・木曜日

〈投稿規定〉
はがき一枚に三句（首）以内（川柳・俳句・短歌と明示すること）。投稿随時。
自由課題・秀句には掲載紙贈呈。

〈投稿先〉
〒五三〇・大阪市北区中之島三―三・朝日新聞ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

ボリュームたっぷり　スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子

なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ

551 HORAI

ほうらい
蓬莱
TEL641-0551

雑誌 05703―10